

---

# 恋し、春待ち人

たびと

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋し、春待ち人

### 【Nコード】

N7628H

### 【作者名】

たびと

### 【あらすじ】

太平の世がすぎ20年余り。役立たずな巫女紅葉は、世を平和へ導く旅＜魂もらい＞に出る。紅葉は、本当に役立たずなのか。世は平和になるのか。成長ものの和風ファンタジー。

## 第一話 出会い

晩秋の夜、女は足を急がせていた。里の医者に薬を届ける予定が、すっかり遅くなった。

ただでさえ短くなった日はすでに沈み、かわりにのぼった望の月が、女の足元を照らしていた。

長い石段をのぼり終えると、大社が女を迎えた。月光に照らされ、さながら光の宣託をうけているかのようだ。

女は巫女だった。

ひと仕事を終え、ほっとした気分で裏門へまわる。

と、女は足をとめた。

御社と木々がつくる濃い影の中に、ふたつの光がきらりとかがやいた。

獣——それも霊獣の一種、狛犬だ。女はゆっくりとうしろ足をだした。狛犬は御社の守護獣ではあるが、野生のものは獯猛で、人さえも食料にしてしまう。

懷から、退魔の護符をとりだす。そんな巫女を安心させるかのように、狛犬はお行儀よくお座りをした。

理解できずに、女は首をかしげた。

口を閉ざしていても見える牙のするどさや、鼻から眉間にかけてよった皺に犬のような愛らしさはまったくなかったが、殺気もなかった。

だが女とて、長年社務めをしている。霊獣が人よりも賢いことは、よく知っていた。女が気を許した隙に、襲いかかってくるつもりだ。護符をかまえ、油断なく狛犬を睨む。

狛犬はじっと動かない。

秋の終わりに、わずかにあたたかさをとりもどした風が、いまは気味悪くさえ思えた。

狛犬はやおらたちあがると、犬そのものの動きで裏門へとむかつ

た。女が目であとをおうと、狛犬はそこにあったものを鼻先で示した。

狛犬の横には、籠があった。女が籠に目をとめると、狛犬は役目をはたしたといわんばかりに、ふわりと姿を消した。

しばらくのあいだ、女は立ちつくしていた。きつねにつままれたような気分だった。

狛犬が届けものを？

まさか。そんな話は聞いたことがない。

用心しいしい近づいて、籠の中をのぞきこむ。

真っ白な布団のあいだから、紅の布がのぞきみえる。それがもぞもぞと動いたかと思うと、ちろりと飛びだしたのは、ちいさなちいさな五本の指だった。

赤ん坊？

人間の赤子であれば、見捨てるわけにもいかない。御社には、さまざまな事情ですてられる子どもも多い。だが、狛犬が先導したなど前代未聞だ。関わらぬほうが身のためかもしれない。

わかっていながら、女は籠をのぞきこんだ。

籠の中のモノはもぞもぞと活発に動きはじめた。白い布団の中から、みじかい手がのびたと思ったら、布団がめくれた。

くりっとした目がぱちりと女をとらえた。

人間の子だ。

女はあたりを確かめてから、赤子に手をのばした。ためらいもなく、赤子は女の指をつかんだ。ものめずらしそうに、大きな瞳で女を見つめる。

女は籠ごと赤子を抱きあげた。

「おまえの母親はどこへいったのだろうね？」

赤子は手足をばたつかせた。かけてあった布団のあいだから、紅色の産着が見え、女ははっと目を見張った。

ふつう赤子には、ぼろ布を着せる。生まれ落ちたばかりの赤子は二、三日もたたずに、あの世から迎えがくることが多い。その迎え

から目を盗むために、この世で生きる物の古着を着せるのだ。新しい衣は忌み子に着せ、迎えがやってくるように願うためのもの。

女は赤子を見下ろした。

狒犬に守られていた赤子。血の色に似た紅の産着。森にちかい裏門にすてられながら、獣に食われなかった。

ひろうべきか、すておくべきか。

女の悩みを知らずに、赤子はさかんに手足を動かす。紅の産着には帯がまいてあった。これもふつうならしないものだが、見事な金細工ではあった。

ふと、女は帯のあいだにあるものに目をとめた。そつとつまみとって、息をのむ。

榊の葉。

かんたんな魔よけの葉だが、赤子を守ろうという気持ちもあったのだ。赤子をすてたのは習わしの知らない年若い娘かもしれない。そうとわかれば、女に迷いはなかった。

「母親が名のり出るまで、おまえをあずかろう。これもなにかの縁だ」

布団をかけなおし、女は裏門をくぐった。

## 第二話 役立たずな巫女 壱

強烈な悲鳴が、御社中に響きわたった。おどろいた巫女や宿司たちが、ふりかえる。

が、すぐにまたか、といった調子で日常にもどっていった。

「あああんた、何度いったらわかるわけ！」

きつい切れ長の目をつりあげた巫女が、ひとりの少女に指を突きつけた。

「そいつを連れて、あたしの側に近よらないでっっていつているじゃない！」

指をさされた少女は、困ったようにうつむいた。そのうしろに、隠れるように狛犬がしっぽをだしている。

「ぼちは、悪いことはしません」

「あたしの腕をかんだのは、悪いことじゃないっていうわけ！」

「それは、あのととき彩さんがぼちの嫌がることをしたから……」

「言い訳は無用よ！」

「まあまあ、彩、落ち着いてちょうだい」

彩のとなりにはいた巫女が、ふたりのあいだにそっと入った。

「落ち着けないのよ、珠乃！ かまれたときの傷は、まだ残っているんだから！」

ほら、と袖をめくった彩の腕には、かまれた痕がみごとに残っていた。

「でも紅葉は庭の掃除をしていただけじゃない。ぼちは、そこにいただけでしょ？」

珠乃のいうとおり、紅葉は庭の掃除をしていた。そこに珠乃とおりがかった彩が、ぼちを見て悲鳴をあげたのだった。ぼちはずっと、松の陰で伏せていた。

「珠乃はかまれたことがないから、そんなことがいえるのよ！ きちんと管理もできないくせに、霊獣なんか飼ってるからいけないん

じゃない！」

黙った紅葉に、ふん、とあごをそびやかせて、彩はいいすてた。

「ちよつと霊獣をあやつれるからって、いつも側においてるから友達もできないのよ」

傲然とあごをあげ、彩は珠乃の腕をひいた。

「ごめんなさいね」

申し訳なさそうにしながら、珠乃は彩につれられ、本殿のほうへと去っていった。

紅葉は肩を落として、息を吐いた。狛犬のぼちが、身体をすりよせながら、紅葉の顔をのぞきこむ。

内側から光を放っているような金茶の目は、宝石のようでとてもきれいだ。しゃがみこんで、見事なたてがみの首に抱きつく、あたたかくて安心する。毛皮は見た目以上にやわらかく、御社中で焚く香の匂いがした。

ぼちは紅葉をなぐさめるように、抱きついてもしっとして動かなかった。

「ごめんね、ぼち」

見た目はどんな犬よりも凶悪だが、ぼちは決して悪いことはしない。紅葉が与えるものしか食べないし、お手も伏せも、お座りも待っても、なんでもできるのだ。だから、人をかんだりすることなど、絶対にならない。悪意をもって近づかないかぎりには。

ぼちは狛犬で、霊獣だ。守護獣として数匹の狛犬を御社で飼っているが、ぼちはそれらの狛犬とはちがい、紅葉だけを守っている。私物として動物を飼うことは禁止されているが、どこからともなくやってくるぼちの存在は防ぎようがなく、特別に許可が下りたのだった。

紅葉にとってぼちは特別な存在だった。物心ついたときから側にいて、ときどきふらりと姿を消す以外は、寝るときも一緒にいる。よしよしと頭をなでてやれば、ぼちは盛大なあくびをした。ずらりとならぶ鋭い歯。紅葉の頭がすっぽりはいるほどの大口だ。

「お、おっと？」

声に、顔をあげる。とおりかかった青年が、目を大きくして紅葉を見た。

「食べられるかと思ったよ」

「葵様」

色白で柔和な顔立ちをした葵は、巫女の中でも人気の高い宿司のひとりだ。かわった人で、ぽちをこわがらない貴重な人物。

「おお、よしよし。おまえは今日もかわいい顔つきだな。疲れないのか？」

そういつて、ぽちのしわだらけの鼻頭をなでる。ぽちはじっとしているが、犬のように気持ちよさそうに目を細めることもなければ、嫌がることもない。

「また彩の悲鳴が聞こえたんだが、あいかわらずなんだな」

「……はい」

縁側に腰かけた葵は、紅葉に座るようにうながす。ぽちは葵の手をするりとかわすと、松の下までいって、ごろりと横たわった。

「こうやってみると、犬にしか見えん」

「どっちでもいいんです。ぽちは、ぽちだから」

犬だろうと狛犬だろうと霊獣だろうと、ぽちはぽち。どこかに定義されて、なんのかんのといわれるのが、許せないだけだ。

葵はちいさく笑った。

呆れたのだ。その顔を見たくなくて、紅葉はうつむいた。

衣擦れの音がして、葵は去るのだろうと思った。

だが気配は、なおもそこにある。

膝のうえに重ねた手に、包みがぽん、と落とされた。

「練り菓子だ。好物だろう？ 巫女のひとりが分けてくれた。私はあまり食べないから」

包みと葵の顔を、紅葉は交互に見た。

「遠慮せずともいい。私もすこし食べたよ。とてもおいしかったから、上等なものだろうな。おすそわけだ。気にせず食べなさい」



声にださなくても、質問のすべてを葵は答えてくれた。

しばらく紅葉は包みを見つめた。片手におさまるほどのちいさな包みだ。練り菓子は高価なものだから、これだけでも紅葉の目が飛びでるほどの値がするはずだ。

「ありがとうございます」

「どういたしまして」

食べたらずすめられて、紅葉は包みをあけた。赤、緑、黄色に着色され、うすくまるくのぼしたものを、きゅ、と袋状にして固めたものだった。

「ぽち」

狒犬はすぐにやってきた。ひとつはぽちに、ひとつは自分で食べる。

「おいしい？」

「はい」

「それはよかった」

葵は笑みを見せた。こんなところを目撃されたら、他の巫女たちにあとで小言をいわれるだろう。

神がもつとも多く住まう里、と呼ばれる宮里には、あまたの神を崇め祀る特別な神宿——大社がある。

大社はふたりの大巫女と大宿司を軸として成り立っている。大巫女には表の大巫女と裏の大巫女の役があり、前者は神事で人前にでたり、神の依り代となる巫女。後者は巫女を育て監督する巫女である。大宿司は事務仕事を一手に受け、巫女と宿司はそれぞれの補佐役や雑務をおこなっている。

葵は次期大宿司と呼ばれるほど優秀な人格者で、巫女の中でも落ちこぼれの紅葉とはまったく正反対の位置にある人だ。

だというのに、時間を見つけては、紅葉に声をかける。お菓子をもってきてくれる。捨て子で、嫌われ者の女の子に、同情している。「ここにいと、戦の世とは思えない」

葵は、空を見上げていた。紅葉もうなずきながらそれにならう。

春らしいうす曇の空は、近くの山さえもかすませてしまう。

「……本当ですね」

太平の世がすぎて、二〇年余り。あちこちで争いが起こり、宮里にも難民がおしよせている。

神を宿す里は、多くの里々に欲しがられるが、中立を守るため、自治組織が発達している。戦の起こった当初、宮里にも戦火が押しよせてきたというが、里独自の守りと自治組織のおかげで、いまは落ち着いている。

それでもときおり、朱塗りの塀のむこうから、落ち武者や戦にまぎれての盗賊がやってきたといって、騒ぐ声が聞こえる。外からやってくるものたちからは、暗い話が多い。

「〈星流れ〉はこの乱世を終わらせるためのものか、はたまた、更なる災厄への煽りとなるのか。紅葉はどちらだと思う？」

まだ雪の降るひと月前のこと。東の空から夜の帳がおしよせる誰そ彼どき、ひとすじの星が流れた。まばゆいほどのかがやきに、人々は空を仰いだ。

それが、引き金だった。

西の空から、東の空へ。いくつもいくつも星が流れた。ひとつ、ふたつ、と数えていたものも、しだいに数えきれぬようになり、ただ呆然ときらめく空をながめるだけ。

そのとき紅葉は、育ての親でもある婆の手伝いをしていた。難民にくぼる葉をつくっていたのだ。人々のざわめきから何事かと縁側にでてみると、あふれこぼれんばかりに星星が流れていた。

ぽかん、と口をあけていると、婆がやってきて、その口を閉めてくれた。

『〈星流れ〉だね』

〈星流れ〉とは、争いで成仏できずにいる御霊が、霊山へいつせいにむかうことを星に例えている。霊山にはこの時期だけ、世を司るあまやどり天座おおかみ大神が舞いおり、霊山へつどった御霊を良いものと悪いものと選別する。そうしてこの世の流れを決めるのだ。

これが起これば、大社は忙しくなる。天座大神に平和な世となるよう祈りを捧げる旅〈魂もらい〉の準備が始まるのだ。

〈魂もらい〉は霊山で、天座大神に和魂をさずかる行事だ。霊山へたどりつくまで各地をまわり、人々とその地に宿る神々をむすび、平和を願うという行事でもある。大神は人々と神々のむすびつきと願いをうけて、世の采配を下すといわれている。

この行事に参加することになるのは、大社の巫女である。多くの巫女の中から、〈宿禰選択の儀〉によって、たったひとり、大神を宿したものを宿禰といい、〈魂もらい〉にでるのだ。

宿禰には、旅の道中を守護する守別がつく。守別は、里人の中から、自推他推を問わず、役割にふさわしいものであれば、何人でも大巫女によって選ばれる。

長くつづく戦に、〈魂もらい〉にかける里人の想いはつよい。宿禰となるものには、そうとうな負担がかかるだろう。

『〈星流れ〉は世の流れに変化がうまれるときにおこるもの。忙しくなるな』

婆はじつと紅葉を見つめた。にこった目だが、頭上を流れる御霊にかがやきを得て、つよい光を見せているようだった。

『おまえも、のほほんとしているのは、いまのうちじゃ』

それから、いくらかのあわたしさはあったものの、役立たずでとおっている紅葉には、あまり関係のないことだった。

「葵様、わたしは吉兆だと信じたいです」

「何故？」

「どうして何故と問うんですか？ このまま乱世がつづくことを望むものは少ないでしょう。〈星流れ〉が人の御霊なら、望むのは戦ではなく、平和だと思います」

葵は紅葉を見て、微笑んだ。

「紅葉の意見を聞くと安心する。私もおなじ意見だ。ありがとう」  
「どういたしまして……？」

葵は満足そうな顔をして、本殿へと去っていった。

一息ついて、よっこらしよ、と立ちあがる。彩との騒ぎで投げだした竹箒をひろう。

ふたたび掃除をはじめてまもなく、紅葉は大切なことを思い出した。

寅の刻に、すべての巫女は本殿に集まること。

彩も珠乃も、葵も本殿へむかった。

もう寅の刻にちがいない。

「あー！」

叫んで、紅葉は竹箒をなげすてた。

## 第二話 役立たずな巫女 貳

「どうしてあなたは、時間も守れないのです？」

額に青筋をたてた年長の巫女が、怒りと呆れを混ぜこんではきすてた。

「すみません……」

紅葉はちぢこまって、謝るしかない。

年若い巫女たちが、くすくすと笑いながら、紅葉のうしろをとおりすぎていく。

「この前の御饌<sup>みけ</sup>だって、あなたが遅れたせいで、お供えできないところだったのですよ」

朝夕と、かならず御膳を諸神に奉納する。そのための野菜の注文を頼まれていたのに、すっかり忘れていたのだ。あわてて八百屋に駆けつけて、無理をいってもらったからなんとか無事にことがすんだ。

だが、巫女も宿司もカンカンに怒った。神につかえる巫女として、自覚がたりない。何年ここに住んでいるんだ。と、あやうく御社からだされるところだった。

「すみません……」

「その言葉も、もう聞きあきました。そろそろ自覚をもって、行動なさい。……まったく、どうしてあなたのような人が、〈宿禰選択の儀〉に選ばれるのでしょうかね」

〈宿禰選択の儀〉をおこなう前に、表の大巫女が、大勢いる巫女の中から、何人か候補を選ぶ。紅葉が遅刻したこの集会で、儀式の候補が十人選ばれた。

大巫女が口上する、優秀な巫女たちの名のあとにあがった、役立たずな巫女の名に、居合わせた人々のあいだに衝撃がはしった。裏の大巫女が、静まるような声をあげなければ、いまごろまだ集会がつづいていただろう。

皆が信じられないように、紅葉自身も信じられない気持ちだった。だが、〈宿禰選択の儀〉に参加することが決まっても、宿禰になるとはかぎらない。皆もそう思って騒ぎをおさめているはずだ。

「大巫女様たちは、一体何を考えてらっしゃるんだか」

巫女はぼやいて、紅葉に背をむけた。

紅葉は肩を落として、その背を見送った。

怒られるか、あきらめるかが、紅葉の日常だった。

「で、遅刻した理由はなんだったんだい？」

庭仕事にもどった紅葉に、やってきた裏の大巫女――婆がたずねた。

「……忘れてしまったんです」

渡り廊下から紅葉を見下ろす婆と目を合わせられずに、紅葉はうつむいて答えた。

婆も巫女の世話役としての長を務めているからには、大切な集会に遅刻した巫女を、諫める必要があるのだろう。

腹にためた息を、脱力して吐ききって、婆は首をふった。

「今度からはその首に、今日の予定をぶら下げておこうかね」  
そうしたところで効果はないと、わかっていて婆はいう。

「庭仕事も終わってないようだね」

「はい……、すみません」

顔をあげようとしないうちに紅葉は、どんどん小さくなっているようだった。足元でぽちが、のんきにうしろ足で、首をかいている。

「それが終わったら、使いにでてほしいんだよ。暮れる前にいっておいで」

「はい」

婆の足音が聞こえなくなるまで、紅葉は顔をあげなかった。ぽちが紅葉の顔を見上げた。

紅葉は竹箒をにぎりなおして、庭仕事にとりかかった。

婆の使いにでるころには、日がだいぶかたむいていた。

いそがなければ、帰りには暗くなってしまう。そう思うものの、あせればあせるほど、失敗してしまうことを、紅葉自身もわかっていたから、いつもどおりに御社をでた。

人々の暮らす里から、すこしはなれた小高い山に、鎮守の杜に埋もれるように大社は建っている。

大勢の巫女と宿司が住まい、人々が参拝にくる外宮の奥に、神の依り代である表の大巫女が住まう内宮がある。巫女や宿司でも、高い役職をもったものや、行事のときにしか、内宮にはいることはできない。

御社からでてしまえば、内宮は拝殿の陰になってまったくみえなかった。

檜のようにそびえる杉の木立をくだって、紅葉はぼちと一緒に里を目指す。

紅葉は巫女装束をぬぎ、里娘のような格好をしていた。里で祈祷や祓いをお願いされて、うまくこなせないことが多いからだ。

御社の張りつめた空気とはちがう、のびのびとした空気に、紅葉はうんと伸びをした。

「ぼち、今度、葵様に練り菓子のお返しをしなくちゃね」

狛犬は黙って、紅葉の横を歩く。

「何がいいかな？ 葵様は欲のない人だから、何がいいのかわからない」

杉のむこうが明るくなってきた。里のにぎわいが、遠く聞こえてくると、紅葉の胸もどきどきと高まる。

あちこちから、ひっきりなしに声があがる里のにぎやかさが、紅葉は好きだ。里にはたくさん品の品物がある。御社にはない、いい香りのする花の髪飾りや、鈴。色あざやかな着物に、あまい菓子。見ているだけで心がうきたってしまう。

今日はどんな市が立っているだろう。

薬草のはいった包みを抱えて、最後の石段をぼん、と飛びおりた

ときだった。

ガサ、と下草が鋭く鳴った。

えっ、と音のしたほうを見ると、黒い影が畑に飛びだし、ぱっと畑の菜の花が散った。

ぼちが、うなり声をあげた。

黄色の花がゆれる。菜の花の匂いが濃くにおった。まっすぐに、紅葉にむかって花が道をつくる。

「ぼち！」

恐怖に、身体が硬直して動かなかった。祈るように相棒の名を呼ぶ。

ざ、と花のあいだから飛びでたそれは、紅葉の喉をねらって高く跳ねた。

野生の狛犬！

赤茶けた、犬よりもふたまわりは大きな巨体。鋭い牙が大口をあけて紅葉に飛びかかる。

ぼちが跳ねる。

ど、と胴体に頭突きをくらって、野生の狛犬は横に飛ばされた。のんびりとした空気は、あっというまに殺気に満ちた。

菜の花の下にもぐりこんだ狛犬は、じっとこちらの様子をうかがっている。ぼちは身を低くしながら、狛犬に睨みをきかせていた。

紅葉は、懷から護符をとりだした。自分で書き作ったものだから、利くかどうかはわからないが、もっているとするし安心する。

ぼちがわずかに前足を動かした。途端に狛犬が姿をあらわして、ぼちの首をねらって飛びかかる。

紅葉はあわてて飛びのいて、ぼちが狛犬の攻撃をかわすところを、はらはらしながら見守ることしかできない。

二匹の狛犬は道の中央で、円をえがきながら跳ね、互いを牽制しあった。鋭い牙をむきだしにして、かみついては身をひいて、うなる。

隙を見て、護符を張ることはできないか、紅葉はじっとその機会



をうかがった。

だが戦いなれている野生の狛犬に、紅葉のように戦いなれていないものが、隙を見つけることなど難しい。

ぼちは野生の狛犬と対等にやりあっているが、それがいつまでもつかわからなかった。

狛犬と紅葉が一直線にむきあったとき、一瞬、目があった。

瞬間、狛犬はぼちの攻撃を横にかわし、紅葉にむかって飛びかかってきた。

突然のことに、紅葉は護符をもっていることも忘れて、身をすくめた。やってくるはずの痛みに、身体をこわばらせる。

が、いつまでたってもそのときはやってこなかった。

もしかして、痛みを感じないまま、死んでしまった？

そう思いながら、おそろおそろ目をあけて、紅葉は息をのんだ。

狛犬が足元で死んでいた。

胸に矢がささっている。

どうなってるの？

目を瞬かせて、呆然とあたりをみまわす。

と、ぼちが飛んできた矢をかわして、横に飛んだ。

その先に、男がいた。菜の花に腰までうもれている。キリリ、と矢がぼちをねらってひきしぼられる。

紅葉はとっさにぼちに飛びついた。

びゅ、と耳元で風が鳴った。すぐ側に矢が突きささる。

言葉を失い青ざめながら、紅葉はぼちをおおうように、ぎゅ、と抱きしめた。

「娘、死にたいのか？」

紅葉はぞつとしながら、ぼちをつよく抱きよせた。腹の下で、ぼちが短くうなった。

「ぼちを殺さないで」

「ぼち？ 犬じゃないだろ」

男の声は、清水のように冷たかった。だが紅葉が動かず、またぼ

ちも害をくわえることがないとわかると、やれやれと息を吐いた。

「すまなかった」

予想もしなかった言葉におどろいて、紅葉は顔をあげた。長身の男はすぐ側で紅葉を見下ろしている。太陽の陰になって、顔がはっきりわからなかった。

男が死んでしまった狢犬を見るために、顔を横にかたむけたとき、ようやくまだ年若い青年だということに気がついた。

「おれが村の外れから追ってきたんだ」

「……あなたは？」

「おれは森村の浅葱。金角の鹿隊の一員だ。野生の狢犬がでると聞いて探していた。鎮守の杜にかえすつもりが、興奮させてしまったらしい」

金角の鹿隊といえば、宮里を守る自治組織のひとつだ。里の中にはいくつもの村がある。その中で大杜のある大きな村を中小里なかのこさとという。金角の鹿隊は中小里を守る組織だった。

死んだ狢犬にささった矢は、心臓をつらぬいているのだろう。苦しむことなく死んでしまった。

浅葱の矢の腕前はそうとうなものだ。

それだけに、紅葉は身をふるわせた。もしもこの矢が、ぼちの心臓にささっていたら。

ぼちの首に顔をうずめる。

よかった。無事で、本当によかった。

「あんた、巫女か」

里娘の格好をしているのに、何故巫女だと見抜かれたのだろうとおどろけば、浅葱は紅葉がにぎりしめた護符を見ていた。くしゃくしゃになったそれを胸にしまいながら、紅葉はうなずいた。

「安心してくれ、もうあんたの狢犬には手をださないから」

ぼちは紅葉を見あげて、はっはっ、と舌をだして息をしてみせた。  
「ぼち……、どこにも怪我はない？」

耳の下をなでてやると、応えるようにしっぽをばたばたとふる。

「ありがとう、ぽち。怖かったね」

「これはあんたのか？」

包みをさしだされて、紅葉はうなずいた。お札を口にしようとして、青年の背景が赤く染まっていることに気づいた。

「いけない！」

太陽はまるくはつきりと、その姿を真っ赤に燃やしてうかびあがっている。

「お詫びに、御社まで送っていく」

「これから、使いにでるところなんです」

浅葱はこれから？ とばかりに目をまるめた。

「助けてくださって、ありがとうございます」

頭を下げて、紅葉は里にむかって走った。

## 第二話 役立たずな巫女 参

「道に迷っただと？ あんた一体何度ここに来てるんだ？ いったやろうか？」

髪をぼさぼさにまとめた男は、紅葉に顔を近づけて睨みをきかせた。

「百遍はきてるよ！」

男の声が、頭にがーんと響きわたった。

それでもこの男、医者である。難民や自治組織の武者たちの世話があわただしく、すっかり気が立っているのだ。いつ会ってもこの調子だった。

「すみません……」

うつむき、紅葉は包みを男にさしだした。

「あんたが巫女だなんて、世の中が腐るわけだよ」

乱暴に包みをうけとって、男は部屋の奥へはいつていった。荒い足音が遠く消えていくと、部屋の隅で声があがった。

「あんさん、巫女なんてやめなよ」

帳簿をつけている男だった。

「むいてないよ」

筆をするすると動かして、顔をあげぬままつづける。

「巫女さんなら、そんな里人みたいな格好をしてたって、ふつうはそうとわかるもんさ。けど、あんたからは感じられないね」

紅葉はうつむいたまま答えなかった。

「物覚えも悪いようじゃ、祝詞も覚えてないだろ」  
本当のことだったから、紅葉は何もいえなかった。

「ま、その調子じゃ、社からでたとしても、やっていけるかどうかわからないがね」

筆をおいて、帳簿に紙をはさんでとじる。それを男は紅葉にさしだした。

「その守護獣のおかげで、御社にいるようなもんなんだ、大事にしてやるんだね」

紅葉は足元にいるぽちを見下ろした。帳簿を受け取ったとみると、腰をあげる。

「あんさんよりもこっちのほうが賢そうだ」

男は乾いた笑いをたてた。

紅葉は、どうしても理解できずに首をかしげていた。

薬草のつよいにおいが、あたりをただよっている。つぶした薬草を囲炉裏端で炒っていた婆が、顔をあげた。

背はまるくなり、髪は白いもののほうが多い。それを無造作に束ね、着古した着物をあわせた姿は、巫女とは思えない。だが彼女こそが、大社を本当の意味でとりしきっている裏の大巫女なのだ。

「紅葉、手が動いてないよ」

「婆様、わたしには理解できないんです」

「何がだい？」

炒る手を動かしながら、面倒くさそうに、婆はたずねる。

「どうして役立たずなわたしが、〈宿禰選択の儀〉に参加しなくてはいけないのか、わからないんです」

「だれがおまえを役立たずだといった？」

「みんなそうしています。わたしもそう思うんですから、当然です」

婆は呆れたように息を吐いた。

「おまえは薬をつくることができる。読み書きそろばんもできるし、料理も洗濯も掃除もできる。どこが役立たずなんだ？」

「それは、ここにいらっしゃるみんなができることです。巫女として、人のお役に立ったことはありません」

「占いや祈祷も人並みにできておる」

「でも、わたしは役立たずだといわれます」

それが悔しいわけではないし、悲しいわけでもない。

ただ、おなじ人間なのに、何故他の人とおなじことができないのか、わからなかった。そしてそんな人間が、何故世の流れさえもかえる、儀式への参加を命じられるのか、わからなかった。

「表の大巫女様が任命されたのだ。すなわち神の御意志ということだろう？　わしらなんぞにその理由がわかると思うのか？」

紅葉が黙りこむと、どこからともなくぽちがやってきて、となりで伏せた。頭をなでて首のあたりに手をおく。

「おまえにはおまえの善さがある。ぽちがなついているのがよい例ではないか」

「ぽち……」

毛並みに頬をよせる。微動だにしないぽちは、どこまでも大人しい。

「人には役割があるんだ」

婆は薬草を炒る手をとめない。

「ひとりひとり、かならず役割をもっている。その役割に気づくか気づかないかは、その人しだいだ」

「婆様は、気がついたんですね」

「気がつかずにいられない立場だったからだよ」

「わたしも、巫女なのに……」

「ここに住む巫女たちだって、自分の役割に気づいているものは、そう多くはない。巫女は未来が見えるわけじゃないんだよ」

ようやく婆の手がとまった。器をとって、炒った薬草をうつす。

「ほら、のんびりしてる暇はないんだ。次の薬草はつぶしたのかい？」

紅葉はぽちから顔をはなした。つぶしてあった薬草を婆にわたす。「婆様、もしもわたしが選択の儀で選ばれて、旅にでることになったら、この世は変わるでしょうか？」

「変わるだろう。〈星流れ〉があったんだ。おまえのことだから、

善いほうに導くだろう」

紅葉はすりこ木を手にした。ざり、ざり、と薬草をつぶしていく。青いにおいがぷん、と鼻をついた。

わずかにあけられた障子戸のむこうには、すべてを飲みこまんとするような闇がひろがっている。煙のようにするすると、臭いはその中へ流れこんでいるように見えた。

「春と、平和は似ていますね」

「そうかい？」

「待ち遠しいから」

婆は紅葉を見た。漆黒の髪は、まとめられているが、どこかふわふわと落ち着きがない。それでも、紅葉の声はどこまでも静かだった。

「そうかもしれないね」

器の中身を鍋にあけると、草の汁がぱちぱちとはぜて蒸発した。つよい臭いがただよかったが、ふたりの鼻はもうそれに慣れていた。手際よく、黙々とふたりは手を動かした。

ざり、ざり、と紅葉が薬草をする音が、静かに響いた。

### 第三話 春待ち人 壺

ドン ドドン

ドン ドドン

太鼓の音が、厚い天幕の中まで、よく聞こえていた。

六畳ほどのひろさに、選ばれた十人の巫女が、禊を済ませて座りならんでいた。

紅葉は入り口から遠い隅にいた。中央の位置で、精神を集中させている珠乃の姿をじっと見つめる。

珠乃は優秀な巫女だ。やさしくて人当たりがいい。葵のように、次期表の大巫女を期待されている。

きつと宿禰となるのも珠乃なのだ。

天幕の隅でたかれる香が、もくもくとたちこめる。あまいような香ばしいような匂いに、頭の芯がしびれていく。

〈宿禰選択の儀〉は、密閉された空間の中にいる巫女たちを、香の作用で感覚をにぶらせて、神をおろす儀式だ。

婆の話では、五年前にも〈星流れ〉があつたのだという。〈宿禰選択の儀〉によって選ばれ、〈魂もらい〉にでた巫女は、霊山に受け入れられずに命を終えた。

彼女だけではない、戦がつづく二〇年余り、〈星流れ〉のあるたびに〈宿禰選択の儀〉はとりおこなわれ、何人もの巫女が宿禰となつて〈魂もらい〉にでた。

だが、だれひとりとして成功するものはおらず、世は荒れる一方だ。

人々は期待しているだろう。今度こそ〈魂もらい〉が成功し、平和になることを願っている。

意識が朦朧とする中で、紅葉は膝を抱えた。太鼓の音が、遠く頭の底で響く。

――紅葉。



婆の声だ。

——はじめて出会った時、おまえは紅色の着物を着ていたんだよ。帯には榊の葉がさしこまれていてね。それで紅葉と名づけたんだ。きつと、おまえの両親もそう名づけたかったはずだと思ってね。

いつだったか、ふとしたときに、婆が聞かせてくれた話だ。

——子を愛さない親はいないよ。おまえの両親はやむなくおまえを手放したが、かわりにぼちをおいていったんだ。ぼちはおまえの両親の代わりに、おまえを見ているんだよ。

ぼち。

いつも側にいてくれるぼちは、紅葉をどう思っているだろう。友達のない紅葉は、よくぼちと話ができたらしいのと思う。けれど本当に話ができれば、そのときぼちは、他の人たちのように、紅葉に呆れた言葉を投げつけるのだろうか。

——ごめんなさい。

突然、聞き覚えのない声が聞こえた。包みこむようなあたたかな声は、涙にぬれていた。母の声だ、と何故だかすぐにわかった。

——ごめんなさいね、あなたは何も悪くないのよ。

(謝らないで)

母が謝れば謝るほど、紅葉は自分がみじめに思えた。

(わたしが生まれてこなかったら、あなたはそんなに悲しまなかったんじゃないの?)

——何故そう思う?

また声が変わった。深みのある声は、男のものに思えたが、断言できるほどではなかった。

——我々が選り産み落とした御霊よ。おまえは自ら我らのもとへ帰りたいと願うのか。

(ちがう。死にたいわけじゃない。謝るくらいなら側にいてほしかったとか、わたしを産んだことを後悔しているんじゃないとか、そういうことを恨んでいるわけでもない。ただ母に謝られると、わたしの存在はなんだろうって考えてしまう。だれの役にも立てない

のに、ここにすることさえ否定されたら、わたしはどうしたらいいのか、わからないから)

——ではおまえは人の役に立ちたいのか。

(だれかの役に立てるような人になりたかったなんて、大きなことはいわない。でもわたしはここにいます。望んで生まれたわけではなくても、役に立たなくても、わたしはここにいますから)

いつのまにか、香のしびれがなくなっていた。眠るように身体をまるめて、紅葉は夢うつつにぼんやりとしていた。

心地よいまどろみだった。

——おまえの望むものは何だ。

(望み?)

ぼんやりとした頭の中で、紅葉はぐるぐると考えをめぐらせた。

(はやく、春がきてほしい。あたたかなれば、みんな笑顔になるから)

——それがおまえの本当に望むことか。

(できるなら、みんなと一緒に笑いたい。だれかがわたしの名前を呼んでくれて、だれかがとなりについてくれたら、いい)

それがわたしの望み。

拝殿で祈りの舞を捧げていた表の大巫女が、ふわりと動きをとめた。髪に、手足首についた鈴がしゃらん、と音をたてて静まる。

拝殿にむかうように建てられた天幕。そのあいだには、朱色の布がわたしてあり、わずかにはなれた位置に、宿司がずらりと整列していた。

天幕のうしろには太鼓の列。そのむこうには、遠く人々が集まりざわついている。朱色の柵越しに、宿禰がでてくるのを今か今かと待っている。

ゆうつりと、鈴の音さえたてずに、大巫女が階段を下りた。月の

光を浴びた雪のように白い肌。腰までのびたまっすぐな黒髪に乱れひとつない。日毎神をおろす身体は常にうつくしく、清浄な気に満ちている。

葵は、大巫女がとおりすぎていくのを目で追った。

知らず、ごくりと唾をのむ。

だれが宿禰となるのだろうか。

大宿司が太鼓役にむかって打つのをやめさせると、あたりはしんと静まりかえった。風のそよぐ音も、鳥の鳴く声も聞こえない。ざわついていた見物人もいよいよだと、息をのんで見守っている。

空気がはりつき、表の大巫女以外、動くものはだれもいなかった。大巫女が天幕の入り口をあけた。ふわりと煙が立ちのぼり、香の匂いが風にのって葵の鼻をくすぐった。

大巫女が入り口の脇にひざまずき、頭をたれた。それを見た大宿司がひざをついた。宿司たちが同様に頭をたれ、葵もおなじように手をついた。

天幕から”何か”が出てきた。

す、とあたりが白くかがやく。曇り空の晴れ間のように。

目でその姿をとらえなくても、空気が大神の存在感をありありと語っていた。

凍りつくような緊張感。

神の一挙一動に空気が振動する。

地面の小石が音をたてずにふるえ、そのせいで地面についた手が、しびれた感覚を伝えてくる。

威圧感と、どこからともなくこみあげてくる畏怖に、葵は身体をこわばらせて、額をつよく地につけた。

『頭を上げよ、宮里の大巫女よ』

声は男のもののようにでありながら、少女のそれとも似ていた。

『我は天座大神。この者を霊山へと送り、祈願せよ。成就せしとき常世は和み、できなければ荒れるだろう』

表の大巫女がちいさく答えた。

『嘆く世の終焉来ぬる春待ち人 汝我らの待ち人なるか』

びりびりと、石のふるえがひどくなってきた。肌に感じる空気が、凍てついた冬の朝を思わせる。

痛みさえ感じはじめたそのとき、ずっと世界が暗くなった。

おどろいて顔をあげる。いけないことだと思ったが、まわりの宿司たちも顔をあげていた。

世界が暗くなったのではなかった。さしこんだ光が消えたのだ。だれが宿禰となったのか。その姿を探して、葵は目をまるめた。

表の大巫女に抱かれて、紅葉が倒れていた。

宿司のあいだに、おどろきと疑問の声があがる。

大宿司が厳しい表情で立ちあがった。葵を見る。呼ばれているのだと察して、葵は大宿司のもとへむかった。

紅葉は真っ白な顔をしていた。

まさか、死んでいるのではあるまいか。

「葵、彼女を裏の大巫女様のところへ運びなさい」

「かしこまりました」

冷たかったら――すこしの恐怖を覚えながら手をのぼす。

よくみれば、胸がかすかに上下していた。わかった途端、安心して葵は紅葉をだきあげた。

香のつよい匂いがする。呼吸をしているものの、紅葉の身体は、寒空の下にいたかのように冷たかった。

葵は慎重に紅葉を運んだ。裏の大巫女は、巫女たちが住まう宿舎で、宿禰をまっている。

これから、紅葉は忙しくなるだろう。

〈魂もらい〉はただ霊山へむかうだけの旅ではない。道中の神宿に祈りを捧げ、平和の使者として里や村をめぐり、平和を望む心の種をまかなければならない。

紅葉を見下ろし、葵はわずかに足をゆるめた。

ちいさな鼻に、唇。手も身の丈も、そのすべてが小振りにできた紅葉という存在。人と接することを苦手とし、己の殻に閉じこもっ

てしまった少女。

彼女に〈魂もらい〉は難しいのではないか。  
足が止まる。

だが、紅葉の身には、大神がおりてしまった。

婆はどんな顔をして、紅葉を迎えるのだろうか。

気が重くなると、紅葉も重く感じられた。

もう、紅葉に会えないかもしれない。ぽちと一緒に縁側でのんびりと過ごすこともなくなり、練り菓子をよろこんで食べてくれる姿を見ることがなくなるのだろう。

「紅葉……」

名を、呼ぶことさえも――。

首をふり、葵は気持ちをきりかえた。

裏の大巫女の間を前に、膝をつく。

「婆様、宿禰様を連れてまいりました」

「遅かったじゃないか、おはいり」

「失礼いたします」

襖をあける。婆は縁側の襖を全開にして、葵にまるい背をむけていた。

「梅が咲いたな」

何故、そのような話をふるのか、葵にはわからなかった。

背後で葵がひざまずき、紅葉を寝かせても、婆はふりかえらなかった。

「春が来る」

瞬間、葵は気がついた。裏の大巫女はだれが宿禰となったのか、すでにわかつているのだ。

婆はふりむいた。泣いているのではと思ったが、そんなことはなかった。ただその表情は、暗かった。

寝かされた紅葉の白い顔を見下ろし、婆は長い息を吐いた。それとおなじくらい長い間のあと、婆はいった。

「残す言葉はないか？」

葵は婆の目を見つめた。

「……何を、残せとおっしゃるのですか？」

「この子は哀れな子だ。おなじ年頃の娘たちと交われず、相手を思い交わることを自らやめた。何も望まぬ。ただ、そこに在るだけだ」  
ふたりして、紅葉を見つめた。

「私が残せば、心が晴れるのは私だけです。何も、残す力などありません」

婆は黙った。肯定とも否定ともつかぬ沈黙だったが、どちらの答えがだされようと、葵にはこれ以上何もいえなかった。紅葉に言葉をかけることなど、できなかった。

「すべては、大神様がお決めになること」

それは、大巫女としての言葉ではなく、ひとりの女としての言葉に聞こえた。だが彼女はすぐに大巫女にもどった。

「葵、さがりなさい。ここからはこちらの仕事だ」

身を引いて、葵は一礼した。

そしてもう一度、血の気のない紅葉を見た。

もうこれまでのように会うことも、言葉を交わすこともないだろう。それだけに、葵はつよく祈った。

——元気で。どうか、紅葉にも人並みの幸福がおとずれますように。

### 第三話 春待ち人 弐

三日、紅葉は寝ていたという。そんな感覚はなく、ただ一晚眠っただけのように感じていた。

紅葉は目を覚ましたとき、自分の褥ではない場所に寝ていると、すぐに気がついた。

見慣れぬ部屋の襖は、見事な桜が描かれている。婆と共に寝起きした簡素な部屋にはなかった、飾り棚。天井には寄木細工。

大神に選ばれてしまったのだと、気がつかぬほど紅葉はぬけてはいない。

床板を踏む音が聞こえる。すぐに障子のむこうに人影が映った。

「婆様」

「おや、お目覚めかい」

障子のひらく前から声をかけても、婆はおどろくことなくはいってきた。

「婆様、もしかしてここは内宮ですか？」

「ああそうだ。ひとつえらくなっただよ」

紅葉は唇をむすんだ。婆は黙ってその横顔を見つめた。

「お腹はすいてないかい？」

「……すいています」

何かがいつもとちがう。気がついて、紅葉はあたりを見まわした。

「ぼちは？」

「そういえば、おまえさんが寝ているあいだ、姿を見かけておらん」  
紅葉は立ちあがってぼちを呼んだ。だが、二歩、三歩も歩かぬうちに足がもつれて、障子戸にしがみつく。

「紅葉」

婆の声を無視して、紅葉は障子をあけた。

「ぼち！」

庭にむかって声をあげると、すぐさまぼちの足音が聞こえてきた。

いつもは音などたてないのに、こういうときはすぐにやってくるよ、  
というように足音をたてる。

建物の陰から、ぼちが飛びだした。かるい跳躍で紅葉の手の届く  
ところまでやってくる。

「ぼち……」

首にしがみついて身をよせると、いつものぼちの匂いがして、紅  
葉はほっと息を吐いた。

しばらくじっとそうしていたが、婆が何もいわないので紅葉は顔  
をあげた。目があう。

「婆様、本当にわたしが宿禰でいいのでしょうか？」

「わたしにはなんともいえんよ。ただ、大神様はお前を選ばれたのだ」  
どうしてわたしを？

聞きたかったが、聞いたところで婆を困らせるだけだと思い、口  
をつぐむ。

「これから〈魂もらい〉に同行する守別の選別がはじまる。それが  
終わったら出発することになるからね。旅支度をしておくように」

「荷物は全部、婆様のお部屋に残っています」

「馬鹿だね、この子は。荷物や食料なんかは、別の巫女が用意する  
よ。あんたは、毎日欠かさず禊をして、道中の安全を祈願し、天座  
大神様に受け入れられるように、清廉潔白でいなければならん  
だよ」

そうか、と紅葉はうなづく。

紅葉は居住まいをなおし、婆にむきあった。

「婆様、これまでわたしを育ててくださって、ありがとうございます  
でした。宿禰と選ばれたからには、期待に応えられるようにがんばっ  
てきます」

両手をそろえ、頭を下げる。

「その挨拶は、まだ早くないかい？　だいたいがんばってくる必要  
なんざ、ないんだよ」

紅葉がきょとん、とすると婆はいった。



「いつものおまえらしくしていればいいんだ。御神はそんなおまえを見て、おまえを選んだんだから。肩肘張るな」

口の端をあげて、婆は笑ってみせる。そう、力んだところで、失敗するだけなのは目に見えているだろう？　といわんばかりに。婆は紅葉の性格をよくわかっている。

紅葉は心がなごんで、肩の力がぬけた。まったくもって婆のいうとおりだ。

「さあ、朝餉の用意をしようかね。おまえさんはここで待ってな」

婆はまるで風邪をひいて寝込んだときのようにやさしかった。日常がすこし変わってしまったけれど、婆は変わらないのだと、紅葉は安心した。

部屋をでたあと、婆がきつく目を閉じ、深く息を吐きだしたことも、外宮で〈宿禰選択の儀〉のやりなおしの声があがっていることも、知らぬまま。

### 第三話 春待ち人 参

あたりは茜色に染まっていた。

定時の鐘が鳴ったばかりだから、子どもたちが高い声をあげながら、浅葱の横を駆けぬけていく。見知った少年がとおりすぎさまに手をふった。無言で手をふりかえすと、上機嫌に頬をあげる。道場で愛想のわるい浅葱になつてくれている数少ない子どもだ。

通りにならぶ店の売り子たちの声が、一日のおわりをにぎやかにしていた。商品が売れ残れば、自分たちの食べるものも買えない。帰りゆく人々は、売り子から物を買ったり、あるいはさけたりして、家路を急いでいる。

通りにたちならぶ店の奥は、住居をかねているところが多く、その奥からは夕餉の支度をしているのだろう。湯気があがり、よい匂いが香ってくる。

「ご苦労さま」

声をかけてくれるのは呉服屋のおばさんだ。見回りをしているときに顔をみると、店棚の奥から顔をのぞかせて、にこにこしながら頭を下げる。こちらも頭を下げると、むこうもまた頭を下げた。

浅葱の存在はよく目立った。何しろこの時代ではめずらしく長身で、並の男の頭ひとつ分はでかい。体付きはそれほど大きくはなかったが、切れ長の目が印象深かった。

そのせいもあって、売り子のひとり、浅葱に目をとめた。

「ちよいとだんなさん、うちの商品を見ていかないかい？」

声をかけてから、売り子は、浅葱の羽織に気がついて、はっと顔をひいた。

「いやあね、金角さんかい。巡回中？ 失礼したわね」

藍染に山吹で鹿の描かれた羽織は、金角の鹿隊の隊員であることを表す。

宮里は多くの神を宿した巡礼地だ。その中心の中小里の守りをま

かされているのが、金角の鹿隊だ。

浅葱は武道に長けていたこともあって、家をでて入隊試験に望み、見事合格した。もうこれで七年の勤めになる。年こそまだ若いが、二人一組の巡回をひとりでまかされるようになり、集まりのときは意見を述べることもできるようになった。

いずれは森村に帰るつもりだが、〈星流れ〉によって宿禰が選ばれたからには、できれば〈魂もらい〉の守別となって、世の流れの変化を体感したい。

守別となるのは大変名誉なことだ。そこには相当激しい争奪があるだろう。金角の鹿隊の隊員のことを考えても、浅葱にはかなわぬ夢にちかい。

大通りをぬけて、里のはずれまでやってくると、どこからともなく悲鳴があがった。

浅葱が駆けだすと、路地から人が飛びだした。

「金鹿さん、よかった。落ち武者だ！ その飴屋の陰から出てきた！」

背後を気にしながら、逃げざまに男が叫んだ。

浅葱は男のいう飴屋にむかった。

そもその戦の発端は、日乃出里と夜乃出里の領土拡大によるものだった。それまでもちいさな戦は各地であったが、ふたつの里がそれぞれ里を傘下におさめ、力を誇示しはじめたところから戦国の世がはじまった。

位などもうあてにならず、力さえあれば、だれもが功名をたてられた。秩序は乱れ、どちらの里の傘下にはいるのが安全か、そればかりを考え寝返る者や、下克上に燃えるものもいて、統率がつかない里も多い。

戦が長くつづいたこともあって、どこもかしこも疲弊しきつていると聞く。身体をつよいものは皆戦にかりだされ、女子どもばかりが残り、田畑は荒れ放題。食料も底をつき、食料を目当てに戦が起こっている。そうして踏み荒らされた大地はますます荒れ、悪循環

におちいつている。それでも武将たちは戦をやめない。

人々は安全な宮里を目指して、危険な道をやってくる。それは農民たちだけでなく、戦に敗れ将を失った武者たちも同じだ。

金品を求め、食料を求め、あるいは手傷の治療を求め、平和を求め、やってくる。

一番厄介なのは、戦にささくれだって、人を殺めようとする輩だ。現れた落ち武者は何を求めているのか、それ如何によって、浅葱も手を血に染めることになる。

路地からでる前に、目の前をその落ち武者が横切った。兜を失い、顔の半分は血にぬれている。どす黒く変色した鞆を杖代わりにしながら、左足をひきずっている。戦の前まではそれは見事な胴であっただろうものが、いまは胸から腹へとぼっさり切られ、血で汚れていた。

目は死の淵をさまよっていて、視点がはつきりさだまっていない。いつ倒れてもおかしくない状態だった。見たところ、武器はもっていない。

つい先日、となりの里境で戦があったと聞いた。そこからでた武者かもしれない。

浅葱が駆けより、声をかけるまもなく、武者はどさりと倒れた。

「おい、しっかりしろ」

仰向けにしてやると、武者はうめいた。

「み、……水、を……」

浅葱はあたりを見わたした。こわごと、家の中から目をのぞかせている女に、声をかける。

「水を用意してくれ」

短く悲鳴をあげて、女の顔がひっこんだ。

あてにならない、と武者を再度見下ろす。四十ほどの中年の武者だった。身なりのよいところから見るに、それなりの地位を得ていたものだろう。家紋部分が見事になくなっていて、どこの出のものかはわからない。

青ざめ、冷たくなった身体。死期はちかい。せめて望む水を与え、心安らかに旅立たせてやりたかったが。

「宿禰、様は、……決まった、か……？」

乾いた喉から、武者は必死に言葉をつむいだ。

「ああ、決まった。もうすぐ〈魂もらい〉がおこなわれるだろう」  
「そう、か……」

武者は安心したように目を閉じた。

足音がして、顔をあげる。と、ボロをまとった少女が、こわごと欠けた茶碗をさしだした。

「お水」

みれば、茶碗の底にわずかだが水がはいっていた。ここまで来るあいだに、こぼしてしまったのだろう。少女はそのことに気づいて、茶碗をひっこめた。

「ありがとう」

だが浅葱はうけとった。もう一度汲みにいつているあいだに、武者は息をひきとるだろう。

「水だ、飲め」

「かたじけない……」

武者はほんのわずかな水さえ喉をとせず、こぼした。それでも、満足したのか表情がやわらいでいく。

「宿禰様に、伝えてほしい」

ゆっくりと、だがはつきりと、武者はいった。血にぬれていない片目をしっかりと浅葱にむけて。

「天座大神にうけいれられ、かならずや、世を平和へと、導いてほしい」

「ああ、かならず伝える」

浅葱がうなずくと、武者は身体の力をぬいた。目を閉じると、そのまま首も落ちた。

無言のまま、浅葱は武者を見下ろした。

そっと、地面に頭を寝かせる。

平和を願うために、瀕死の怪我を負いながら、中小里までやってきたのだろう。そう思うと、胸にくるものがある。

「おじちゃん、死んじゃったの？」

少女がいった。

「ああ」

浅葱は少女に茶碗をかえした。やせ細った少女は、難民の子なのだろう。死んだと聞いて、きゅ、と唇をむすぶ。

「あんたのおかげで、この武者はひとつ満たされて逝ったんだ。代わりに礼をいう。ありがとう」

少女は首をふった。

ふたりは亡くなった武者を見下ろしたまま、それぞれの胸にわく感情にしばらくひたった。

周囲の喧騒が徐々にもどり、人々が集まってきた。

「浅葱！」

呼ばれて顔をあげると、金角の鹿隊のひとりである甚三<sup>じんぞう</sup>が走ってきた。

「うわ、落ち武者か。死んだのか？」

「ああ」

「じゃ、ちよっくら人手を集めてくる。あんた悪いけど、ここにいてくれ」

甚三が去ると、浅葱は羽織をぬいで死んだ武者にかけた。鎧をまとえるほど名のある人物が、こんなところで見世物になるのは不名誉なことだろう。

「おい、見世物じゃないんだぞ！」

声を張りあげたのは、難民の少女だった。

「あっちへいけ！ いけったら！」

腕をふりまわして、少女は人垣を乱した。大人たちはうっとおそろいよけるものの、少女のいうことはきかない。

「あっちにいけよ！」

「おい」

子犬のように、きゃんきゃんとほえる少女を、浅葱は捕まえた。

「何するんだよ！」

「あんたが騒ぐとよけいに人がくる」

少女はぐ、と喉をつまらせた。浅葱がいうとおり、少女の声に見物人が続々とやってきていた。

「あんたの気持ちはうれしいが、黙っていたほうがいい」

唇を固くむすんで、少女は顔をゆがませた。泣くかもしれない。だが少女は泣かなかった。浅葱の腕をはらって、武者の枕もとへいくと、お行儀よく正座する。そのまま、動かなくなった。

野次馬の影から、「かわいそうに」と声がもれる。手を合わせ、足早に去っていくのは女たちだ。

浅葱が横にならぶと、少女がつぶやいた。

「あたしの父ちゃんも、戦にいつて死んだんだ。兄ちゃんは、村を襲ってきたやつらに殺された。だれも、助けてくれなかった」

ひざの上でにぎりしめられた少女の拳が、白くなった。

「宿禰様が選ばれて、本当に平和になるのか？　だれも死ななくてよくなるのか？」

涙をためた目で訴えられて、浅葱は言葉につまった。

「母ちゃんも、弟も、病気で寝込んでる。だれも助けてくれない！　平和になったって、死んでしまうかもしれない！　あたしは、どうしたらいいんだ」

つかみかかってきた少女を、浅葱はそのまま抱きよせた。さっと緊張した身体を、ぽんぽんとやさしくたたくと、少女は胸に顔をよせて泣きだした。

細い身体だ。肉がまるでついていない。一着しかないだろう衣はひどい臭いがするし、体も洗っていないとすぐにわかる。母も弟も病にかかっているというなら、少女にもうつっている可能性は高い。難民は平和を求めて宮里にやってくるが、道中の怪我や病で死ぬ者も多い。せっかく戦から逃れられても、満足な食事も得られない。

荒れた田畑を細々と耕し、周囲の武者の脅威におびえながら生活

するか、危険をかえりみずに宮里を目指し、安定することのない貧しい生活をするか、どちらがいいかなどわからない。

浅葱が少女の不安をなぐさめても、母や弟の薬を買ってやることも、食事を与えてやることも、できないのだ。

戦がなくなっても、本当の意味で平和になるのは、何年も先の話。それまで、この少女が生きていけるかは神のみが知るところだ。

天座大神に選ばれた宿禰とは、どんな人物だろうか。

少女をあやししながら、浅葱は御社のある方角へと目をむけた。

「浅葱、今日はご苦労だったな」

金角の鹿隊をとりしきる璃寛りかんがいった。距離をおいた位置で、浅葱は頭を下げる。

璃寛を上座に、ずらりとならぶ隊員は浅葱をふくめ十人。浅葱は下座から話をうかがっていた。

「しかし、今回の〈星流れ〉も我々の期待を裏切るものになりそう  
だ」

璃寛がぼやくと、次々と声があがった。

「大巫女様も、何を考えていらっしやるんだかな」

「選ばれた宿禰はひどく役立たずな巫女だというじゃないか」

「ああ、〈宿禰選択の儀〉を見にいった者たちの噂では、巫女も宿司たちも、首をひねっていたらしい」

「内部のものにも信用されていない巫女が宿禰とは、世はますますの荒廃をのぞんでいるということか」

「〈星流れ〉にうかれた人々の落胆は、相当なものだ」

「ああ。期待させられただけなんだからな」

宿禰が選ばれたその日、里中に宿禰の噂がひろまった。はじめは期待の声が多かったが、そのうちあちらこちらから不満があがった。  
『あいつが宿禰だって？』



『そりゃ役立たずな巫女のことだ。祈祷を願ったら、ろくな祝詞もあげられなかった』

『いつもきてる巫女のことだ。何度きても道をまちがえやがる。約束の時間を守ったことがない』

『世はお仕舞だ、あんな巫女が靈山にいけるわけがない』

『大神様は我々を見捨てたのか』

『ついに御社の大巫女様も気が狂ったんだ』

『終わりだ』

『この世は終わりだ』

暗い噂は一晩で里を満たした。翌朝には、人々は集まって御社へ抗議にでた。それは三日たった今でも毎朝くりかえされている。

御社は「大巫女様が決めたことだ」と言い張っているようだったが、外につながる巫女の話では、内部も相当もめているという。

望みを託しながら、役立たずな巫女だからと、がっかりする人々の身勝手さもどうかと思うが、そこまでいうほどひどい巫女なのだろうか。浅葱にはなんともいえず、会話にはいる気にはなれなかった。

「守別になるものも少なからうな」

「いないだろう。みすみす命をすてるようなものだ」

あっさりと璃寛はいいきった。

「そのような馬鹿な真似は、この金角の鹿隊の隊員にもしてもらいたくはないものだな」

璃寛は皆を見まわして、ひとりひとりにむかってうなずいてみせた。

宮里がいくら平和でも、外からの脅威がないわけではない。戦力は貴重なものだ。

だが、浅葱はふと思った。

もしもだれも守別として立候補しなかったら、宿禰はどうするのだろう。ひとりで旅をするのだろうか。

里を守るためとはいえ、ひとりの娘を何の守護もなく旅立たせる

のは、無責任に思えた。宮里を守護するものとして、巫女をひとりで旅にだすのは、恥ずべきことではないか。

しかし浅葱は、なおも黙ったまま意見することはしなかった。

集まりを終えるまで沈黙をとおし、集まりが終わったあとは部屋にもどり、同室の甚三とたあいもない話をする。

甚三は幼少のころから下働きで隊にはいり、最近になってようやく隊員として扱われるようになった男だ。

「まったく、暗い話ばかりで嫌になるな。せっかく〈星流れ〉もあったっていうのに」

「宿禰になった巫女のことを、知っているか？」

「いや、まったく」

褥をひき、その上であぐらをかいたまま黙った浅葱に、甚三はいった。

「里人の噂では、十五、六の少女だという話だ。巫女として失敗して、里に下りてくるときは里娘のような格好をしてくるらしい。いつも狛犬をつれて歩いているって話だ」

狛犬をつれた娘。

浅葱の脳裏にさっと、先日 of 光景がうかびあがった。色白で、ふわっとした髪。小柄な身長は、浅葱の胸ほどの身の丈しかない。

あの娘が、宿禰？

「篠庵の治療院に薬をもっていくのが、その娘の役割だったみたいだな」

そうだ、あのときも包みをもっていた。あれは薬だったのか。

「あいつ、巫女相手にもひどい取引をしていたそうだ。何のかのと巫女に難癖つけて、金を支払わなかったこともあったらしい。罰があたればいい、あのクソ医者！」

甚三の話は、よく脱線する。浅葱は横になって目を閉じた。

「なあ、浅葱。おまえは守別になりたいと思うか？ 隊長は守別に立候補するなど達しを出していたが」

それは浅葱自身も悩んでいることだった。隊長がいうことは絶対

だ。だが、彼のいうことにはすこし疑問を覚える。

「まあ、俺たちがなくても、他の隊のやつらになるだろうけどな」

甚三も、どこか腑に落ちないところがあるらしい。

「宿禰になった巫女も、かわいそうだよな。これから危険な旅にでるってのにさ、里の人たちはだれも応援なんかしないぜ。世のため、人のための旅。だが、だれも望まぬ旅、か。俺だったら、逃げだすな」

もしも彼女が逃げだしたら、そのときこの世はどうなるのだろうか。変わらず、荒れつづけていくのだろうか。彼女が大神に受け入れられず、旅が失敗に終わっても、世は荒れるというのに。

あーあ、とぼやきながら、甚三は布団に入った。もう話は終わりで。

目を閉じながらも、浅葱は眠れずに、宿禰となった巫女のことを考えていた。

#### 第四話 東風吹かば 壱

大宿司が神妙な顔つきでいった。

「婆様、皆の者の気持ちもおくみください」

ここのところ毎日、大宿司はおなじことをいいにくる。

「表の大巫女様が決められたことに、我々が口出しすることはできぬまい。そのことは何度といわずとも、おまえならわかっていることだろう？」

「しかし、このままでは世は救われませぬ。里の者たちも、紅葉が宿禰だと聞いて嘆き悲しんでおるのですぞ。せつかくのへ魂もらいゝを、希望も託せぬものにいかせるわけにはまいりませぬ。宮里の大社としての威厳にも関わることですぞ！」

婆は息を吐いた。

「さりとて、霊山におわす天座大神様を選ばれたのだ。我らのような人間が、勝手に宿禰を選べば、それこそ世が荒れる」

「天座大神様は血迷うたのでございます。神とて誤りはございません。ですから、これまでのへ魂もらいゝも失敗に終わったのです」

「大神様を愚弄するな！」

一喝すると、ひっ、と大宿司が身をすくめた。

「だれがどのようにいおうとも、天座大神様は紅葉をお選びになったのだ。紅葉はまだ未熟者かもしれぬ。だが、我々の知らぬ能力をもっているかもしれぬであろう。我々の見えるものは、ほんのわずかだ。身の程をわきまえよ！ 大宿司が聞いて恥ずかしいわ！」

下がれ！ 命じると、大宿司はそそくさと去っていった。

やれやれ、と息を吐く。内宮のほうへ目をやって、婆はどうしようもない気持ちをもてあました。

大宿司にはああいっただが、彼も巫女や宿司、それに里人の気持ちに代弁しているだけなのだ。大巫女と、人々のあいだで胃を痛めているにちがいない。

正直なところ、迷っているのは自分もおなじだった。

紅葉には大役すぎる。霊山で、大神に受け入れられずに命を終えるくらいならば、御社からだして、多少の危険はありつつも、里人と共に生きたほうが、しあわせなのではないか。そう考えないこともない。

だが、代わりのものを霊山に送れば、大神はかならず激怒する。戦だけではあきたらず、天災が起るようになるかもしれない。それはどうあっても防がなければならぬことだ。

立ちあがり、婆は内宮へむかった。紅葉は何をしているだろうか。御社の中を歩いていても、ひそひそと交わされる言葉は、紅葉のことばかりだ。

「何故彼女が〈魂もらい〉にいくの？」

「あんな役立たずな子が」

「これじゃあ世が平和になるはずがないわ」

「大巫女様たちは何を考えてるの？」

「裏の大巫女様は、紅葉をかわいがっていたから、裏で手をまわしたんじゃないかしら」

などと、半分妬みも聞こえてくる。

紅葉をかわいがっていたわけではない。人の輪にはいれずにいる紅葉を放っておけなかったのだ。部屋がおなじなもの、他の巫女たちが彼女の狛犬を恐れたからだ。巫女と同室にしたとき、紅葉は敏感にそれを感じとって、厩で寝ていた。

家族代わりとして、どうしても狛犬を手放せない紅葉を、責めるわけにはいかない。狛犬がいなくなったからといって、彼女が巫女たちの中に入っていけるとも思えなかった。

きっと、紅葉自身も狛犬ではなく、人間の友を求めているだろう。他の巫女たちとおなじように、何気ないおしゃべりを楽しみたいはずだ。人間なのだから。

うまく人とまじわれぬ不器用さが、こんなところで仇となっていくような気がして、ならなかった。

内宮にはいつてすぐのところ、婆は何かにつまずいてころびそうになった。

盆だ。きれいに中身を食べたあとの食器をのせた盆が、昼よりも夕刻にちかい時間にまだ下げられていない。疑問に思いながら先へすすむと、櫛もまだあげられていなかった。

どういうことだ？

縁側に、ぼちのしつぽが見えた。

「紅葉や」

「婆様？」

明るい紅葉の声がする。先へすすめば、ぼちのとなり、寝巻き姿のままの紅葉がいた。

「着替えていないのか？」

「着替えるものがないから」

紅葉の答えに婆は血の気がひいた。手伝いにやった巫女が、世話をしていないのだとようやく確信がもてた。どうやら、巫女たちも実力行使にでたらしい。

婆の憤りにも無頓着に、紅葉はいった。

「そろそろ旅支度をしようと思うのですが、内宮からでもいいですか？」

「おまえは宿禰だ。そんなことはしなくていい」

「でも」

「自覚をもて！」

怒鳴られて、紅葉は身をすくめた。

「はい、婆様」

彼女を怒っても、せんないことだと、婆は我にかえって、ため息をついた。

「……婆様も、忙しいでしょう？ 葉作りくらい、手伝えたらいい

のに……」

「気にするな。おまえが手伝ってくれる前は、ひとりで全部やっていた」

紅葉は黙ってぼちの首に抱きついた。

彼女を傷つけたのだと、ちいさな背を見て、婆はようやく気がついた。

ひとりきりで、だれとも言葉をかわすこともなく、一日を過ごしていたのだろう。宿禰というよりも、だれからも見捨てられたような、心細さを感じていてもおかしくはない。

婆は紅葉の背後に座り、その背に手をおいた。

さみしいと感じたのは、自分もおなじだった。とりたててにぎやかな子だったわけではない。それでも、ぼつりぼつりとかわされる会話に、満たされていたのだといなくなってから気がついた。

「すまぬ。本当は忙しいのだ。おまえにあたってしまいうくらいな」  
ゆっくりと顔をあげて、紅葉はちらりと婆をうかがった。

「おまえがいなくなってから、ろくに眠れておらん」

「何故ですか？」

「これからのことが、急に不安になったの」

紅葉は身体を起して、婆の腕に触れた。このあたたかさを、感じることも、もうないのかもしれない。そんな不安も胸をよぎる。

「おまえはわしにとって、娘のようなものだ。わしはおまえの親として、おまえのしあわせを願わずにはいられない」

「婆様、わたしは婆様に出会えてしあわせだったと思います。だからどうぞ、婆様は自分の役割を果たしてください」

婆は紅葉を見た。どこか遠くを見つめたぼんやりとしたまなざしは、いつもの紅葉と変わらない。淡々としていて、ぼちに抱きついて、自分をなぐさめようとした姿が幻のようだ。

そうだ、大巫女ともあろう者が、これから旅立とうとする巫女に、なぐさめられていては、立場がない。何の迷いも、心配もさせず、毅然として見送るのが、大巫女としての務めだ。

婆は紅葉にうなずいて見せた。紅葉はわずかに目元をゆるめた。  
言葉のないまま、ふたりは空を見上げた。  
暮れかけた空に星がひとつ、かがやいた。



## 第四話 東風吹かば 式

「なに？ 大社は我々の意見を聞き入れぬと？」  
宗傳そうでんの声に、室内にいた者たちは色めきたった。

「はい。〈宿禰選択の儀〉のやりなおしは受け入れぬと。大神の怒りをまねくようなことを申すものは、大社への立ち入りを禁ずると仰せでした」

使い役となった甚三は、璃寛りかんの怒りの形相に、身を低くした。

「なんと、我らの訴えをないがしろにするか」

璃寛の声はふるえていた。

金角の鹿隊は里人の意見をまとめ、大社へ〈宿禰選択の儀〉のやりなおしを訴えた書状をしたためた。その返事がこれだった。

「おまえはもうよい、さがれ」

命じられて、甚三はそそくさとでていった。その背を浅葱はうらめしく見送った。できることなら、浅葱も集会からぬけだしたかった。

というのも、浅葱は〈宿禰選択の儀〉のやりなおしには反対だからだ。一度、大神様が選ばれた宿禰を、里人の意見でかえようというのは、大神様をないがしろにする行為だ。多くの神々を崇め祀る宮里がそのようなことをしては、他の里に示しがつかない上に、この土地に宿っている神々に対しても、不信感を表すことになる。

そもそも地に宿る神々は、天座大神の子である。大神を否定すればその子らが怒るのは目に見えている。

〈魂もらい〉で宿禰は人々の想いを、その地に宿る神に伝える。宿禰とその神々が、霊山で天座大神に民意を訴え、采配が下されるのだ。

地に宿る神々への不信は、〈魂もらい〉へ悪影響を及ぼすだろう。平和を願うための行事が、平和を遠ざける行事になりかねない。そのことに、何故気がつかないのか。

〈宿禰選択の儀〉のやりなおしのため、書状を書くこと決まったとき、浅葱は声をあげて反対した。だが、璃寛は平和のためだといってゆずらない。

もどかしさに、膝の上でにぎった拳がふるえた。話し合いなど聞かずに、通りへ駆けでて、里人に訴えたかった。だが、そうしたところでどれくらいの人が、浅葱の声に耳をかたむけてくれるだろうか。

浅葱は自分の無力さに、自分を思いきり殴りつきたいほどの苛立ちを感じていた。

「どうなされますか、璃寛様」

隊員のひとりが問うた。

「書状をもっていた当日の返事とは、考える余地もなかったとみえる」

「あくまでも大社が里人の意見を軽んじるならば、こちらとしても別の行動にでなければなりませんな」

隊員たちが意見をかわすあいだ、璃寛は黙っていた。一同が口を閉ざしてはじめて、璃寛は口をひらいた。

「大社が受け入れぬならば、我々は水際でくいとめるしかない」

「どうなされるおつもりですか？」

「守別が決まらなければ、宿禰も旅立つことはなからう」

「そうか、守別をださないという方法もあるな」

「守別となろうとする者を、大社の門をくぐる前に追いかえすというのはどうだ？」

宗傳の言葉に、浅葱は声をあげた。

「反対です！」

男たちはいっせいに浅葱を見た。我慢の限界だった。

「そもそも宿禰は、天座大神様がお決めになるもの。我々里人が決めるものではないはず。その守別となる者を我々が追いかえすなど、自警団として度が過ぎます！」

「ならば浅葱よ、おまえはこの戦の世が、このままつづけばよいと

申すのか」

「いいえ。ですが、選ばれた宿禰のだれが、世を平和に導けるか、我々にわかるものではありません」

「ふん、役立たずだった巫女が、宿禰になったからといって、急に利口になるわけもない」

浅葱は隊員からむけられる視線の冷たさに、齒がみした。

「大神様がこの世の采配を下すとき、人々の多くが平和を望まなければ、戦は終わりませぬ。大神様が選ばれた宿禰を、受け入れられずにいるこの里に、いま、どれほど平和を望む心があるというのですか？ このままでは、大社と里人が分断し争いが起こります。我ら自警団が、自ら唯一平和な里に争いを起そうというのですか！」

「我らとて平和を望んでのことだ。大社がこちらの意見を軽んじるならば、刃をかけることもまた、平和の道」

浅葱は、声を失った。喉をしぼるようにして、いう。

「正気ですか？ 平和を求めるために、争いを起そうとするなら、そこで勝ち得た平和は、平和とは呼べない」

「浅葱、落ち着け。宗傳もだ」

璃寛の声に、ふたりは浮いた腰を落とした。

「浅葱、そなたのいうこともまちがいはない。このままでは、宮里の中で争いが生まれるだろう。だが、だからこそ我々が、里人の意見をまとめるのだ。里人が先走って過ちを犯さぬように、我々がくいとめなければならぬ」

「その方法が、守別を追いかえすことなのですか」

「我らは穏便に過ごそうとしたのだ。それを切ってすてたのは大社。我らは次の行動へうつらなければならぬ」

「では、それも受けいれられなければ、どのようなにされるおつもりですか？」

璃寛はじっと浅葱を見つめた。そのまなざしには、大社との対峙がゆるぎのないもので映っているように思えた。

浅葱は唇をかんで、首をふった。

「大神様の意を否定することは、この地に宿る神々をも否定すること。神を否定した我々がだれを宿禰にしようと、大神様がよい采配をくださるはずがありません」

「ではいうが浅葱よ。戦が始まって二〇年余り、我らはずっと天座大神の選ばれた宿禰を霊山へと送りだしてきた。だが、世は平和にならなかった、何故だ？」

「それは御霊に宿る想いと、我ら里人の想いに、平和を望む心が少なかったから――」

「おまえは本当に、里人たちが平和を望んでこなかったと思うのか？」

浅葱は口を閉ざした。戦のために男たちをとられ嘆く女たちの声。母を失って泣く子どもの声。食べるものがなく常に腹をすかせている難民たちの想いは、戦が始まって以来、とぎれることなくうまれきただろう。安全な宮里に生まれ、暮らしてきた浅葱にも、そのことは想像がつく。

「おまえはまだ若い。本当に正しいものが何なのか、見極める目もいまについてくるだろう。我らの言葉の正しさもわかるようになる」唇をかみ、浅葱は身をひいた。璃寛が満足そうにうなづく。だがその目は、すぐにまるく見ひらかれた。

浅葱は着ていた羽織をぬいで、たたんだ。

平和を望む声があって、それでもまだ平和の世とならないのは、人が何を平和だというか見極めきれないからだろう。

たとえ、その理由がまちがっていたとしても、浅葱には平和を望む声を受け入れない大神を否定することが、平和になることだとは思えない。

さしだされた羽織を、璃寛は訝しげに見た。

「どういうつもりだ？」

「これまでお世話になりました。私は今をもって、金角の鹿隊を脱退させていただきたく思います」

「何だと！」

「早まるな、浅葱」

「これまで私は中小里を守ることに於いて、金角の鹿隊であることを誇りに思っていました。ですが、これ以上意見を異にした隊に、所属することはできません」

「こちらが下手にでておれば、調子にのりおって、この若造がっ！」

膝をたて、声を荒げた宗傳を璃寛がとめた。

「その気持ち、あとあと後悔するぞ」

「私の心はもとから決まっております。この心に従わぬことが、後悔となります」

「残念だ」

「私のです」

浅葱は深く一礼をして、部屋を去った。

「なんだって、おい。鹿隊をやめて、守別に立候補する？」

浅葱は与えられている部屋にもどると、わずかな荷物を手早くまとめた。それを見た甚三が理由を聞いて、目をまるくさせたのだった。

「おまえには世話になったな」

「いや、俺はなんていうか、俺が世話になったっていうか……。ってそんな話じゃなくてよ、何だよ、何で急にそうなったんだ？」

「おれは璃寛様の意見は理解できない」

「理解できないっ、つつたっよ」

急に別れを告げられ、戸惑っている甚三をおいて、浅葱は足早に部屋をでた。隊を脱退することに決めた浅葱が、次にとる行動は璃寛たちにも、かんたんに想像がつくだろう。長居は無用だ。

だが、一足遅かった。

部屋をでたとたん、これまで親しんできた隊員仲間が、わらわらとでてきて浅葱を囲んだのだ。おどろいたのは甚三だった。

「な、何だ……?」

「甚三、浅葱を捕らえよ」

最後にあらわれた宗傳の声に、甚三は彼と浅葱を見た。浅葱は宗傳を睨みつけた。

「やはりきたか」

「脱退することはかまわぬが、ここをでたおまえが守別候補として立っては迷惑なのでな」

浅葱は答えず、周囲をたしかめた。何人いるかはわからないが、浅葱ひとりで突破できるほど少ない人数ではない。だが、だからといってあきらめる浅葱ではなかった。

気づかれぬように、利き足に重心をかける。荷をもちなおすように見せかけて、浅葱はそれを投げた。まわりがぎょっとしているうちに、刀をぬく。出口にもっとも近い場所にいた仲間へむかって突進すると、相手はおどろいて身をひいた。

浅葱はそのまま駆けた。

「おい、何をやっているおまえたち！ 浅葱を追わんか！」

宗傳にいわれて我にかえった隊員たちが、浅葱を追いかけてきた。だが、その足はにぶい。おそらく、急に浅葱を捕らえるようにいわれ、とまどっているのだろう。あとからやってきた甚三に追いぬかれている。

「浅葱、甚三、どういうことなんだ？ 璃寛様にはむかったって？」

隊員のひとりが、どうしてこんなことをしなければならないのか、わけのわからぬ顔をしながら問うた。

「璃寛様にはむかったわけじゃない。おれは、おれの信じる道をいくことにしただけだ」

「どういう意味だ？」

浅葱と璃寛のやりとりを知らないものには、理解できないにちがない。だが、詳しく話している時間はなかった。

ひとり、甚三だけが、納得したようにつぶやいた。

「浅葱は、自分の信念をつらぬくことにしたってことだな」

「信念？」

彼らのやりとりがもどかしく、浅葱はいった。

「甚三、おれはいく。迷惑をかけるが、あとは頼んだ」

ふりかえった浅葱は、甚三から荷を投げつけられて、あわてて受けとった。

「ほんと、迷惑だが、まかされてやる。俺だって、守別になりたかったんだからな。帰ってきたら、覚えておけよ！」

勝手口から通りへ駆けでる。その背にかけられた甚三の捨て台詞に、浅葱はちいさく笑った。

甚三の気持ちへ感謝するならば、なんとしてでも守別にならなければならぬ。

だが、はたして浅葱のような若造が、守別に選ばれるのだろうか。こみあげた不安も、甚三への裏切りのような気がして、浅葱は気持ちを前へときりかえた。

昼をすぎたばかりの通りは、すこしずつにぎわいを増している。飯屋からでてきた大工風の男たちは、浅葱の様子をのんきに見送った。

「金角さん、また事件かい？」

羽織をぬいでも、浅葱の顔は金角の鹿隊として親しまれている。だが、やめたということを知ったとしても、彼らは、そうかい、のひと言ですませてしまうだろう。

にがいものを感じながら、浅葱は大社へとひた走った。

#### 第四話 東風吹かば 参

大社の前には、初詣を思わせる人ばかりができていた。〈宿禰選択の儀〉に反対の声をあげている人々だ。

そうした人々がいるせい、大社の門はかたく閉じられていた。その門をたたき、でてきた宿司に守別候補だと告げると、中へとおされた。だれもない境内は常よりも神聖さが増しているように感じられた。

宿司の案内で社務所の一室に案内されると、そこで待つようにいわれた。

まもなく年老いた巫女がやってきた。浅葱は身を低くし、巫女からの言葉を待った。

婆は目の前の青年を見すえた。かるく頭をふせている青年の表情は見えないが、彼から立ちのぼる気配は、ふざけた気持ちでないとだけはうかがえる。

宿禰が選ばれたというのに、噂が先走って、守別候補者はなかなか現れない。やってくるのはいかにも盗賊出の怪しい男たちばかりで、とてもではないが紅葉をあずけようとは思えなかった。

この青年はどうだろうか。

「守別候補者よ、名を名のり、己が出生を述べよ」

「はい、私は森村の浅葱と申します。成人を機に中小里で金角の鹿隊として働いてまいりました」

金角の鹿隊といえば、先日〈宿禰選択の儀〉のやりなおしをおこなうよう、書状をもってきた自警団だ。断ると一蹴したはずが、今度は守別になるとはどういう見だろう。

「金角の鹿隊は里人の意見を代弁し、〈宿禰選択の儀〉のやりなおしを求めておったはずがのう」



伏せていた顔を、浅葱はわずかにあげた。切れ長の目が、婆をとらえた。

「はい。それが理由で、私は金角の鹿隊を脱退しました。私は〈宿禰選択の儀〉のやりなおしをする必要はないと信じております。大神様が選ばれた宿禰様こそが、〈魂もらい〉へいくべきお方。大神様のご意志を疑っては、世が平和になるとは思えません」

浅葱の言葉に、ゆらぎはなかった。芯のつよさを感じて、婆は不覚にも感動していた。

噂に翻弄される里人や、巫女や宿司たちの心のもろさに、婆は苛立ちを感じていた。世に生きる人々が、皆このような心をもっているならば、この世は終わりだと、嘆きたくなる心を必死におさえこんできた。その嘆きを、浅葱は打ち砕いた。

まだ、信じるものがある。

「そなた、なぜ守別として立候補した？」

「このまま〈宿禰選択の儀〉のやりなおしの声が高まれば、宮里内で争いが起こると考えました。宮里はこの戦の世にあって、唯一平和な里。その里を自らが崇め祀る大神様をないがしろにしたあげく、戦場としてしまつては、それこそ宮里の恥。宮里を守るためにも、宿禰様には旅立っていただく必要があります」

婆は目をまるめて浅葱を見つめた。浅葱はどこまでも、本来あるべき里人の信仰心を語る。

「〈魂もらい〉は危険な旅だ。ましてこのご時世、自身と宿禰の命を守るのはかんたんなことではない。道中だけでなく、霊山では試練にもむきあうことになる。宿禰は無事でも守別が命を落とすことも多い。体力勝負の旅ではないのだぞ。そのあたりもわかつての言葉か？」

「重々承知です」

婆は黙った。どこまで信じるべきか悩むところだ。

きちんと紅葉を守ってくれるだろうか。無事に霊山までつれていってくれるだろうか。紅葉に変な気はもたないだろうか。

考え、やれやれと内心息を吐く。これではまるで紅葉の媚探しをしているようだ。

だが、安穩としているわけにはいかない。

宿禰をふたたび選ぶうという気運は、日に日に高まっている。いつ爆発してもおかしくない。このままでは紅葉に害がおよんでしまう。その前に彼女を旅にだす必要があった。

「おぬし、宿禰に会ってみるか？」

伏せた浅葱の頭がぴくりと動いた。

「可能ならばぜひ」

紅葉がうなずくならば、彼を守別にするしかない。何しろ他に候補者がいない。待てば待つほど、紅葉の立場はなくなる。

もしかしたら、だれよりもふさわしい守別かもしれない。そんなふう to 自身をなぐさめながら、婆は内宮をめざした。

困った事態になった。

巫女のひとりが、内宮にはいっていく浅葱の姿をみてしまったのだ。

内宮には宿司さえ、許可のあるものしかはいれない。男人禁止なのだ。まして年若い男ならなおさら。

「こちらだ、急げ」

婆は足を早めて内宮の奥をめざす。浅葱はすべてわかっているかのように足音を殺し、気配さえ隠しながらついてくる。

「ここへ来たならば、覚悟はできているのだろうか」

「はい」

間のない答えは、偽りのない意志を表しているようだった。

「ならば旅立ってもらおう。宿禰を頼んだぞ」

最後の襖をあけ、浅葱を中へとおす。

「婆様？」

柱の影から紅葉が顔をだした。同時に狛犬が飛びだし、紅葉を守るような位置で、身を低くしてうなった。

「え、あれ、浅葱……さん？」

「なんじゃ、知り合いか？」

「葉を届けにでたおりに、助けていただきました」

と、突然外宮のほうから、わっと声があがった。巫女が大宿司に知らせたようだ。

「旅の支度はできているのか？」

「婆様にご用意していただいたものはすぐこちらに……」

「ならば紅葉、よくきくがいい。これからおまえは宿禰としてへ魂もらいゝにでる。守別はこの男だ。霊山へいき、天座大神様のご意志をうけとってくるのだ」

婆は包みを紅葉におしつけた。

「いまから、ですか？」

「ぼち、おまえにはいわずともよいかもしれんが、紅葉を頼んだぞ」返事のかわりに、ぼちはじっと婆を見つめた。

「それから浅葱。急なこととなったが、おぬしを守別として任命する。宿禰を守護し、無事霊山までとどけてほしい。まず第一の難関として、ここから宿禰をつれたすのじゃ！」

浅葱は一礼した。その背後で騒ぎが一段と大きくなった。

「嘆かわしいことじゃ」

ぼやいて、婆は外宮に足をむけた。

「婆様！」

「紅葉、わしはおまえのいう春を待っておるからな」

眉を困らせて、紅葉はもっていた包みをぎゅっとだきしめた。

「はい」

背をむけると、胸がつまった。

だが泣いてどうなる。これが紅葉の運命だ。

別れをかみしめるまもなく、気を奮い立たせる。ちかづいてくる騒ぎに、これが紅葉への最後の親孝行だと気をひきしめた。

「こっちだ」

建物の配置さえも知らないはずだが、浅葱は紅葉を先導して庭へおりた。草履もはかず、すたすたと物置小屋のほうへむかう。

紅葉は騒ぎを気にしながら、結局は浅葱を追った。

婆はどういうつもりなのだろう。内宮に彼をつれてきて、ばたばたしている巫女たちの気をおおるなんて。いつだって婆は冷静で、無謀なことなんてしない人なのに。

浅葱は小屋の軒先に手をかけると、身軽に屋根に飛びのった。びっくりして言葉を失った紅葉に手をのばす。

「つかまれ」

騒ぎはいっそうひどくなっている。

『大巫女様!』

悲鳴がきこえると、紅葉は婆のことが気になって動けなくなった。「来い、大巫女様はおまえを逃がそうとしているんだぞ」

紅葉は浅葱を見、もう一度外宮に通じる廊下をみた。ぽちがうなった。

「紅葉!」

ぽちが縁側に駆けていった。姿が消えると、空気をふるわすような吠え声が響いた。

紅葉は唇をかんだ。手を出したままの格好で待っている浅葱の手をとる。軽々と持ちあげられ、屋根の上にのぼる。

だがそこを越えると、浅葱はまたひらりと地におりる。これで外宮にでたことになる。

浅葱の手を借りながら、紅葉も屋根からおりる。

「あの、どうして守別になったんですか?」

風呂敷包みを体にしぼりつけて、浅葱は簡潔にいった。

「話はあとだ」

バタバタ、と内宮が騒がしくなった。

「いないぞ！」

大宿司の声が塀のむこうからきこえる。

「どこだ、どこにいったんだ？」

つづいて、宿司たちの戸惑いの声。

紅葉は黙って浅葱のあとを追った。瞬巡しながらも浅葱はすばやく移動する。

回廊を越えると、そこは裏門だった。そのとなりにある、厩を見つけると、浅葱は迷うことなくそちらへむかった。

「あんたはゆっくりこい」

足の遅い紅葉に、浅葱はそう吐きすてて、厩の戸をあける。

が、あけようとした戸が勝手にひらいた。浅葱がぎょっとする。

「葵様！」

あらわれた人物が、思いもよらない人で、紅葉は声をあげていた。浅葱が飛びずさって刀に手をやると、葵は浅葱に手のひらを見せた。

「待ってくれ、私は紅葉の味方だ」

浅葱は黙ったまま答えない。

葵が厩からでると、そのうしろから一頭の馬も姿を現した。

「きみが紅葉の守別になったのなら、ひとつ頼みごとがある」

浅葱はまだ黙っている。

「霊山まで無事に紅葉を送り届けてほしい」

「葵様、どうして……」

ようやくふたりの元までたどりつく。

葵は紅葉を見てにこりと笑った。そうして、また浅葱に目をやると、もっていた馬の手綱をわたした。

#### 第四話 東風吹かば 四

浅葱はさしだされたものを受けとった。

目を見れば、葵の紅葉への想いがはつきりと見てとれた。託されるものが、予想以上の重みを増したが、御社がこの状態では、紅葉をつれてでていくほかに道はない。

浅葱の決意を感じとったのか、葵は目に力を宿し、高らかに宣言した。

「これは宿禰に与えられる馬。かならずや宿禰を霊山に送り届け、役目を果たすように」

騒ぎが一瞬、静まった。

偶然なのか、必然なのか、葵の言葉を響かせようとしているようだった。

瞬間、浅葱は全身に鳥肌がたった。

天座大神は、浅葱が守別となることを歓迎している。そして紅葉が宿禰として旅立つことを、世に知らせたのだ。

葵の声は、空気をふるわせ、波紋のようにひろがっていくだろう。人の耳には届かぬ音かもしれない。それでも、何かを感じとることができる波動になったはずだ。

浅葱は神聖な気持ちで一礼した。

「たしかに享け賜りました」

葵が深くうなづく。

本来なら、大宿司が守別に対しておこなうことだったのだろう。

だが、いまの葵に不足はなかった。

騒ぎが一段とひどくなっただけでかえってきた。浅葱は遠慮なく手綱をひき、馬にのった。

紅葉はさしだされた浅葱の手につかまり、馬に乗った。

葵が裏門にむかった。門をはずし門をひらく。

「いたぞ！」

声があがってふりむけば、若い宿司が紅葉を指さしていた。バタバタ、と足音が響く。

浅葱が馬を走らせた。背後でぼちの吠え声がした。

「この犬、邪魔ばかりしやがって！」

罵声に紅葉はふりかえる。ぼちが心配だった。

「紅葉」

門をでると、葵がちいさな包みをさしだした。

「葵様、わたしに関わったら……」

「ほんのわずかしかつくれなかったが、旅の役にたたせてくれ」

紅葉はうけとつてもいいものか迷った。きっと御社は、紅葉が宿禰として旅立つことを許してはいないだろう。それは外宮のざわめきから、察していたことだった。紅葉自身、自分では〈魂もらい〉などするような器ではないとわかっているだけに、社内の動揺は手にとるようにわかった。

それでも選ばれたからには、役割を務めなければならないと、責任を感じていた。

守別が現れないのなら、ひとりで旅立ってもいい。そのぐらいの覚悟はできていた。

けれど、守別は現れ、葵は逃げるように旅立つ紅葉を助けてくれた。次期大宿司と噂されるほどの人物が、役立たずな巫女の旅立ちを手伝っては、経歴に傷がついてしまう。

迷う紅葉に、背後を気にしていた浅葱がいった。

「受けとれ。時間がない」

「でも」

わらわらと宿司たちが、御社から駆けつけてくる。浅葱は葵がさしだした包みを乱暴につかんだ。

「かならず宿禰様を霊山へお届けする」

馬が駆けだした。気をつけて、そんな葵の声が耳に届いたような気がしながらも、背後からの罵声に、すべてがのみこまれた。

馬は鎮守の杜を駆けて、山へ山へとつきすすんだ。道などないはずなのに、浅葱は道標があるかのように、迷わず先へ馬をすすめる。訊ねたいことがたくさんあったが、倒木をとびこえ、小川のぬかるみを走っていては、舌をかんでしまう。

いつまで杜をすすむのだろうと疑問になってきたころ、ようやく杜の切れ目が見えた。

光の滝をくぐりぬけたかのように、一瞬明るさに目を奪われる。

馬は休むことなく駆ける。紅葉がまぶしさに、涙ながらあたりを見わたすと、田園がひろがっていた。とはいえ、この時期はまだ、昨年稲の刈りとりをしたままの姿ではあったが。

森と田んぼの境をはしる道をすすんでいくと、ちらちらと田んぼに人の姿が見えてきた。鍬をふるって、土を起しているようだ。

しばらく走ると、村が見えてきた。田んぼを見下ろす高台に、簡素な門が建てられている。そのむこうに、家々がたちならんでいた。「どこの村ですか？」

「森村だ」

その村は、森の入り口にあった。十ばかりの茅葺屋と、小屋がいくつか建っている、ちいさな村だ。

村の入り口で、浅葱は馬を下りた。村に人気は少なく、ちいさな子どもや年老いた者たちがまばらにいただけだった。働けるものは皆、田や山へとでているのだろう。

浅葱が足をとめたのは、屋敷といっても、他の茅葺屋よりもひとまわりほど大きな茅葺屋だった。

「中小里から浅葱、ただいまもどりました」

はりあげた声をかえすように、中から少年がひとり、走りでてき



た。

「おかえりなさいませ、浅葱様！」

「朔太郎、新しい草鞋はないか」

「はっ、……は？」

紅葉よりも二、三年下であろう朔太郎は、返事をしてから、何故と思っただけだった。

「宿禰様の御履物だ」

いわれて紅葉が、そういえば素足だったと気がついた。朔太郎は紅葉を見て、あわてて探しにいった。

「荷物をこちらへ」

「いえ、これはわたしでもっています」

包みを胸に抱くと、浅葱は何もいわずにひきさがった。

朔太郎はすぐにもどってきた。

「申し訳ありません、浅葱様。あたらしいものは、あいにく切らしておりました……」

「そうか。なら悪いが一晩で用意してくれ」

浅葱は馬上の紅葉に手をさしだした。

「今はおれで我慢してほしい」

何を、と問う前に、浅葱は紅葉を抱きあげ、馬上から屋敷の床まで運んだ。こんな扱いをされたのは初めてで、紅葉はおどろいて言葉もでない。

「朔太郎、ひとつ部屋を用意してくれ。宿禰様は、こちらへ」

「あの」

先をいく浅葱を、紅葉は呼びとめた。

「わたしのことは紅葉、とお呼びください。宿禰様では、だれのことかわかりません」

浅葱は紅葉の言葉の意味を、考えあぐねたらしかった。

「ふつうの、娘のように接してほしいんです。宿禰様では、こちらのほうが萎縮してしまいます」

「……わかった」

浅葱の先導で先をいけば、ちいさいと思った屋敷も、奥にひろいのだということがわかった。剣術の稽古でもできそうな、飾り氣のない庭を横目に奥へすすむと、浅葱の足はそこでとまった。

「父上、ただいまもどりました」

「おお浅葱か。おまえがもどってくるとは、めずらしいな」

野太いが、しかし大らかな声が答えた。紅葉が障子戸から姿をあらわすと、熊のような大男があわてて身を起した。

「なるほどな、わしはよいぞ。そろそろおまえにも、よい娘を見つけてやらなければと思っておったところだ」

ひげにおおわれた口から、白い歯がのぞく。人懐っこい笑みは、浅葱とは似ても似つかない。浅葱は男の前に座ると、紅葉もそのとなりに座るようにしめした。

「父上、彼女は宿禰です」

しばらく大男は沈黙したあと、ぽかんとあいた口から問うた。

「とすると、おまえは守別になったのか」

「はい。準備をするためにもどってまいりました」

大男の頭の中で、息子と宿禰がつながるまで、しばらく時間があつた。そうして、突然目が覚めたように飛びあがると、いった。

「宿禰様はどうぞこちらへお座りください。浅葱、何をやっている、〈魂もらい〉の準備だろう？ 何が必要なのか千歳に伝えよ」

父の背におされて、浅葱は部屋をでていった。

男は紅葉を上座に座らせると、伏して非礼をわびた。

「申し遅れましたが、私は森村の長を務めます浅尚と申します。僭越ながら、守別となった浅葱の父として、宿禰様の〈魂もらい〉の支度はおまかせください」

はあ、と答えそうになって、あわててのみこむ。〈魂もらい〉は人の期待をかつぐものだ。紅葉でなく、宿禰として立つとき、その役割をしかと演じる必要がある。

巫女であったとき、人々の期待に応えられなかった紅葉だったが、宿禰となった紅葉は、すこしでも期待に応えられる紅葉になりたい。

「浅尚殿、せっかくですが、荷はこの手に抱えている包みひとつで十分です」

「いえ、そんなわけにはまいりませぬ。不肖ながら、我が息子が宿禰様の守別となったのです。我が森村から御社の守別がでた、というだけで名誉なこと。これが〈魂もらい〉の守別となれば、これ以上名誉なことはございませぬ。中小里ほどのものはありませぬが、どうぞ、我らの気持ちとしてお受け取りください」

気持ちといわれてしまえば、紅葉にかえす言葉はなかった。

大変な旅の前にのんびりしてください、といいのこして浅尚はでていった。

紅葉はひとりおきざりにされて、途方にくれた。することもなく、あたりを見わたす。

とてもいい部屋だった。庭に花などは見えないが、すぐ間近にせまった森が生き生きと塀をのりこえ、さながら森そのものが屋敷の庭園のようだ。

紅葉は立ちあがった。縁側まででる。

「ぼち！」

ここへ来るまでのあいだ、ぼちは姿をみせなかった。まさか宿司たちにつかまっているとは思えないが、姿が見えないのは不安だった。

「ぼち！」

もう一度呼んで、ようやくぼちは足音で自らの存在を知らせた。軽快な足音がぴた、ととまったかと思うと、塀のむこうから大きな狒犬が姿をみせた。庭に着地して、はっは、と舌をだして見せると、ゆっくりした足取りで紅葉のもとへやってきた。

「ぼち……、よかった、無事だったんだね」

首に腕をまわして抱きしめる。よしよし、と身体中をなでまわして、怪我がないか確かめた。

と、バタバタと複数の人が走る音が聞こえてきて、紅葉はぼちを背に隠した。といっても犬よりもふたまわりはゆうにある巨体が、

紅葉の細身の身体に隠しきることが出来るはずもない。

やってきたのは浅葱と朔太郎だった。

「狛犬が……」

浅葱はいつてから、紅葉の背から顔をだす狛犬に気がついた。

「浅葱様！ あれです、あの狛犬です！」

朔太郎が真っ青になって叫んだ。紅葉が狛犬の餌食になると思ったのだろう。

「紅葉、それはおまえの狛犬か？」

浅葱の問いかけに、紅葉がうなずくと、朔太郎は信じられないといった顔つきで首をふった。

「屋敷のほうに狛犬がかけていったと、村人から通報があつてな。そうか、ぼちならい」

「……すみません」

「いや、もし野生の狛犬だったら、と考えただけだ。屋敷のものには伝えておく」

身をひるがえして、浅葱は呆然とする朔太郎の肩をたたき、ともに去っていった。

不思議な人。

浅葱はぼちを怖がらない。邪険にもしない。

紅葉はぼちの背をなでた。守別になった人が、ぼちを嫌わなくてよかった。

突然、追われるように御社をでてきたが、案外このほうがよかったのかもしれない。役立たずといわれる巫女に、ついてくる守別など、それほどいるはずがないのだから。

部屋にもどって、紅葉は墓からもらった包みを手にとった。

大宿司の昇進に傷がつかないけれど、と墓を憂いながら包みをひらく。でてきたのは、たくさんの護符と練り菓子だった。

護符の一番上には文があつた。

わずかしかな作ることができなかったが、すこしでも道中の役にた

たせてほしい。道中の無事を祈る。かならず、帰ってくるように。

紅葉 拝 葵

走り書きだった。もしかしたら、騒ぎが起こってから筆をとったのかもしれない。

紅葉は文を胸におしあて、きつく目を閉じた。

――葵様……

どんなにわずかであっても、気にかけてくれた葵の心に、胸がふるえた。

わずか、と文にはあるが護符の枚数は、一日や二日で書ける量ではない。一筆、一筆、丁寧な、力のこもった文字からは、無事を祈る想いがにじみでるようだった。

いつのまにか、すぐ側にぽちがやってきていた。身をすりよせ、膝頭の前に鼻面をおいて、紅葉を横目でうかがっている。

ぬれた目じりをぬぐって、紅葉はぽちの頭をなでた。

「ぽち、葵様が練り菓子をくれたよ。大事に食べようね」

紅葉は文を丁寧におりたたんで、数枚の護符と一緒に胸にしまった。お守りにしようと思った。

## 第四話 東風吹かば 五

翌朝、紅葉は旅にでるために、御社から支給された装束に着替えた。

白の小袖に紅の切袴。薄雲のような白の狩衣を緋色の帯でしめる。狩衣の裾には緋色の帯がわたしてあり、ちいさな鈴が動いたびに涼やかな音をたてる。首からは紅の胸紐と守りかけを下げ、帯に檜扇をさした。

〈魂もらい〉の衣装はこれと決まっていた。人々はこれを見て、宮里からの宿禰が〈魂もらい〉をおこなっていると知るのだ。

足音が、聞こえる。ぼちはそちらへ目をやったが、特に動きをみせない。きつと浅葱だ、と紅葉は部屋をでた。

「さすがに起きていたか」

浅葱もすでに旅装束だった。

「朝餉がすんだら出立する。準備をしておいてくれ」

にぎり飯と汁物と香物の朝餉をとると、ふたりはそろって屋敷をでた。

「おお、宿禰様！」

屋敷の門前に、村人たちが集まっていた。中年の男の声に、人々がいつせいに紅葉を見た。浅葱は怖気づく紅葉の背をかるくおして、先へうながした。どうやら浅葱は村人が集まっていることを知っていたようだ。

紅葉が歩きだすと、人垣は道をつくるようにひらいた。その先に、浅尚が待っている。となりには細身のうつくしい女がいた。浅葱の母なのだろう。切れ長の目が異性だというのによく似ている。

「おはようございます、宿禰様」

おずおずと前へでた紅葉は、浅尚の太鼓のように響く声に身体をちぢめた。

「おはようございます」

「我々がここに集まっているのは、宿禰様にお願いがあったからでございます」

「はい……、〈祈踏〉（きとう）ですね」

〈祈踏〉は〈魂もらい〉の根幹だ。人の集まる場所には、かならず中心に神の祀られた神宿がある。宿禰は村々をたずね、神宿へ参り、その土地に住む人々の祈りを、舞うことで神に伝える。

「お願いいたします」

浅尚はいつて、背後の神宿と幾本もの、剣をつきたてたような山々をふりあおいだ。

「ここに宿るは、剣乃木連峰の頂きに祀られます剣乃木姫となります。我らの祈りをどうかお伝えください」

紅葉はうなずいて、神宿の前にたつた。浅尚と千歳がさがる。

素朴なつくりの神宿だったが、人々に愛されていることがわかる。きちんと掃除され、塩・米・水が供えてあった。

紅葉は目を閉じ、守り掛けをにぎった。

役立たずな巫女、というのは名ばかりではない。紅葉は〈祈踏〉も舞いも成功することは稀だ。宿禰として選ばれたあと、ひそかに練習を重ねたが、うまくいかなかった。

うまくいくだろうか。人々の目と、期待のまなざしに、心臓がとびださんばかりに鳴っている。こんなときは、うまくいかないと、経験が紅葉の不安をあおる。

だが、もうただの巫女ではない。宿禰となったからには、役立たずだから、できないから、と逃げているわけにはいかないのだ。

深く息を吸って、吐く。

気を静めてから、草履をぬぐ。ゆっくりと膝をつき、地面に手をついた。頭を深く垂れる。

「掛けまくも畏き剣乃木姫の大前に紅葉恐み恐みも白さく、天の下万の国と互に信義を重んじ親睦を深めて平和しき御世を開かしめ給ひ、い行き渡らふ旅路の遠近漏る限なく落つる限なく見守り導き給ひ、宿りの夜に災なく出発つ朝に禍事なく滞る事なく導き給へと恐

み恐みも白さく」

目を閉じ、目の裏に何も映らなければ、紅葉は失敗したことになる。

うまくいっただろうか。

こわごと目を閉じると、眠りに誘いこまれるように、すつとあたりは深い緑に包まれた。

紅葉の祝詞に神が答えたのだ。

人の踏み入ることのできない森の世界は苔むし、空気はあふれんばかりの水に満たされていた。

背筋がぞくつとするような風がふいて、ふりむく。

そこにはゆらゆらと陽炎のようなものが立っていた。

剣乃木姫だ。

わかった瞬間、紅葉は全身に鳥肌がたった。

神が自ら紅葉のもとへ舞いおりた。どんなに才能のある巫女でも、神から接触してくることはごく稀なこと。紅葉のような人間には、奇跡としかいいようのないことだった。

剣乃木姫はそんな紅葉を笑ったようだった。陽炎が森にぱっと散って、また集まった。

紅葉はひざまずき、腰をおろし、平伏した。陽炎が音もなく近づき、紅葉と重なった。

途端、ざわざわ、といろいろなものの話し声が聞こえてきた。人だけではない、獣や鳥、木や草、水といったあらゆるものの息遣いを感じる。だが、それはほんの一瞬のことで、すぐに耳は正常にもどった。

紅葉は目をひらいた。

日々祈りを捧げられている神宿が、紅葉を見下ろしている。

ゆつくりと身を起こし、帯にはさんだ扇を手にとった。浅葱やその両親、見ている村人たちが皆、頭を垂れていく。

呼吸を整える。

失敗する気はもうしなかった。体内に宿った剣乃木姫が、紅葉に



どう舞えばいいのか教えてくれている。

紅葉は扇をひらき、右足をふみだした。

身体が思うままに紅葉は舞った。

狩衣についた鈴の音と、足を踏み鳴らすことで音を奏でる。

扇をひとふりして風となり、またひとふりして大地と化す。くるりと舞えば、人々からたちのぼる祈りの想いが、芽吹くようにあらわれ、またくるりと舞い、それを糸のように束ねる。

くりかえし、くりかえし――紅葉の意識はいつのまにか、鳥のように空を飛んでいた。

人々の想いで編んだうつくしい布をくちばしにはさみ、紅葉はそれを剣乃木連峰の頂きで待っている、剣乃木姫にさしだした。

姿の見えない女神は、布を受けとってまた、笑ったらしかった。

ほ　ほ　ほ　ほ　……

という笑い声が山に木霊すると、まだ雪におおわれていた山々は、たちまちのうちに緑を芽吹き、花を咲かせた。鹿や猿や猪たちが、元気よく跳ねまわり、芽吹いたやわらかな新芽を食べている。鳥たちが歌うおおらかな声が、きらきらとかがやく雪解け水の流れる音と重なって、田をたがやしている村人たちの耳を、かろやかにまでていく。

紅葉はくるりくると身体をまわして、春の景色をながめた。そのうちに、いつのまにか大地はちかくなり、自然に紅葉は自分の身体にもどっていた。

〈祈踏〉がおわる。

名残惜しみながら、紅葉は足をとめ、扇を神宿へさしだした。体内に宿った剣乃木姫がずっと身体をはなれ、扇の上で緑の炎となつて現れた。それは雪のように、じよじよにちいさくなり、消えた。

おわった……。

紅葉は力がぬけて膝をついた。倒れそうになったのを、駆けつけた浅葱が支えてくれた。

全身が汗でびっしょりとぬれていた。肩で息をしなければならず、

手足はふるえて力がはいらなかった。

できた、という思いで紅葉の心はいっぱいだった。失敗しかしてこなかった〈祈踏〉が成功した。疲れていたが、それよりもよろこびのほうがまさっていた。

「宿禰様、ありがとうございます！」

興奮した面持ちで浅尚が駆けてきた。

「いいえ、こちらこそありがとうございます。皆様のおかげで成功しました」

「滅相ありません」

村の神宿に対する信頼が深いからこそ、成功したのだと紅葉は思った。きつと、彼らの側にはいつでも剣乃木姫がいるのだろう。

「宿禰様、おらまだ雪もとけきらぬのに、春の景色が見えました」

「女の楽しい笑い声も聞こえた！」

「ありゃ、剣乃木様だ」

「そうだ。な、そうにちがいないだろ、宿禰様」

村人たちは紅葉のまわりに集まって、口々にいった。

「おい、おまえたち。宿禰様は疲れていらっしやるんだぞ」

浅葱がいうと、村人たちは手で口をおさえたり、身体をひいたりした。だが、興奮は冷めない。

「今年はいいい年になるな」

「あの景色は、見事だったからなあ」

口々にあがる声に、浅葱はやれやれと息を吐いた。すまなさそうに紅葉を見る。紅葉は首をふった。足に力をいれて、立ちあがる。

「宿禰様、我らの想いが、〈魂もらい〉の成功につながることをお祈りいたします」

浅尚がいうと、村人たちは話をやめた。

「こちらこそ、皆様方の想いを無駄にせぬよう、精一杯勤めを果たしてまいります」

さしだされた手を、紅葉はにぎった。浅尚が手をはなすと、横から次から次へと村人たちが手をさしだした。ひとつひとつの手は、

かさつきとてもきれいとはいえない。だが、どの手も厚みがあつてあたたかかった。この村のようだと思った。

最後に千歳が馬をひいてやってきた。荷はすでに積んであつた。

「準備はできているぞ」

「すみません、母上」

「おまえが宿禰様の守別となつて、私はうれしい。これくらいのこととはせねばな」

そういつて手綱を浅葱へ手わたす。浅葱の母は、紅葉にむきあつた。

「まだまだ若輩者の浅葱が宿禰様の守別などと、なんと光栄なこと。我が一族の血にかけて、宿禰様の御身をお守りいたします」

「息子殿にはお世話になります。かならず千歳殿へおかえししますゆえ、しばしおあずけ願います」

「恐れ多いお言葉にございます。万が一、宿禰様のお役に立てなかつたとしても、それは本人の未熟さゆえ。宿禰様は霊山へ祈りを捧げることにのみにお気をくばらしてください」

「母上、急ぎますのでこれにて」

わつてはいつた浅葱に、千歳もうなずく。

「気をつけてな」

一礼する浅葱にならつて、紅葉もまた千歳に、となりにならんだ浅葱に、そのうしろで見送ってくれている村人たちへむかつて礼をした。

浅葱の手をかりて馬にのる。浅葱もすぐさまそのうしろにのつた。

「浅葱、宿禰様を頼んだぞ！」

浅葱がいつた。

「宿禰様、かならずや世を平和に導いてくださいませ！」

あわせて、朔太郎が叫んだ。

はい、と紅葉は短く答えた。期待されているのだと思うと、胃が重くなつたが、どこかくすぐったい気もした。

浅葱が馬をけつた。横にならんでいたぼちが、馬を追いぬき先導

する。

〈魂もらい〉が始まる。

宿禰として選ばれてから、たちこめていた暗雲から、一条の光がさしこんだ。そんな旅立ちだと思った。

祝詞参考…祝詞作文事典 戒光祥出版

## 第五話 光の春 壺

ひらりと舞う桜の花びらを紅葉は追った。手のひらぎりぎりに、薄桃色の花びらをうけとって、両手におし抱く。

「何をやってる？」

紅葉はそっと手をひろげ、浅葱につきだした。

「命のひと欠片」

一瞬何をいつているのか、浅葱は理解できなかった。紅葉は黙ったまま両手をとじた。懷紙をとりだし、飛ばないようにそっと包んで、胸にしまう。

浅葱の目の前で、また桜がひらひらと舞った。

「桜の花は家族で」

唐突に紅葉はいった。

「花びらはひとりひとり。花びらがあって、花になって。花があって桜になる。ひとりというたくさんの人がいて、家族がいて、世界ができる。だから、花びらは命のひと欠片とおなじ」

桜を見上げる紅葉の髪がふわふわゆれる。

鴨が三匹、一列にならんで小川をのぼってくる。

抽象的すぎる。

浅葱は思った。だが、おそらく紅葉は理解してもらおうとは思っていない。だから、鴨に気がついてふらりと歩きだす。浅葱は首をふった。

住む世界がちがう。見えるものがちがうのだ。

浅葱は紅葉のうしろを歩いた。

日差しがあたたかい。土手に寝そべって一眠りしたい陽気だ。ナズナやらハコベやらの白と緑の草原にどかりと寝そべる男もいて、半分うらやましくなりながら、先をいく。

争いとは無縁なのどかな風景だった。

だが、耕されていない田畑は荒れ、黒くなった地面はそこで火事

があつたことを物語っている。近くにはいくつもの墓がならんでいた。墓地かと思わせるほどの数だ。

思わず目をそらす。平和そうに見えて、争いの火種はこんな山奥の村にも届いているのだ。

ぼんやりしていたのだと思う。

「よう」

声をかけられるまで、浅葱はその人物がそこにいたことに気がつかなかった。

背後をふりかえり、浅葱は身がまえた。

ぼさぼさの頭に、着くずした小袖。日に焼けた肌は肥えた土のようだ。見たところ刀はさげていない。一見浮浪者風だが、油断できる相手には見えなかった。

紅葉を意識すれば、何事かと首をかしげている。

「その姿、〈魂もらい〉だな」

何がおかしいのか、にやにやと口元がゆるいのが気に障る。

「宿禰様に何か用か？」

「別に」

よく見れば、さきほど草っ原に寝そべっていた男のようだ。髪に桜の花びらがついている。着古した着物の裾には土汚れが見えた。

浅葱と変わらぬほどの年齢に思えるが、いい年のものが真っ昼間からのんきに昼寝とはいいい身分だ。こんな輩には関わらないほうが身のためだ。

浅葱は男に注意をはらいながら、紅葉に先をうながした。

さいわい、紅葉も男への警戒心をもったらしい。浅葱にうながされると、積極的に歩きだした。馬の鼻面に手をあてて、ちらちらとうしろを気にしている。

「宿禰様、馬にのりましょう」

いって、浅葱はなかば強引に紅葉を馬にのせた。すこし馬で駆け、男と距離をとったほうがいい。そう考え、浅葱も馬にのる。

馬の腹をける前に、男を一瞥した。男は何をいうでもなく、ひき

とめるわけでもなく、ただひょうひょうと成り行きを見ていた。

一体、何がしたかったのだろうか。

わからないまま背をむけることに不安はあったが、浅葱は馬の腹をけった。

抱えこんだ紅葉の手が、腕に触れた。冷たかった。

野を駆けると、前方に海が見えてきた。つよい風に潮の香りを感じる。浜にでる手前には、ぽつぽつと小屋が見えた。浅葱は馬をおりて、手綱をひいて歩いた。

「村でしょうか？」

板張りの小屋は風雪によってだろう、つぶれているものが大半だった。それもなかば草に埋もれている。

「村、だな」

かろうじてたっているような小屋は、あちこちにつきはぎのような板が打ちつけられてある。人の姿は見えないが、だれかが住んでいる気配はあった。

紅葉は浅葱に助けてもらい、馬をおりた。

戦時中とはいえ、中小里は子どもの遊び声や、女たちの笑い声が聞こえ、売り子たちのかけ声もにぎやかで、品物もでまわっていた。だが、海ぞいのこの村は、人の歩いている姿はなく、声も聞こえない。聞こえるのは潮風が耳元で鳴らす、低いうなり声だけだ。

「今日はこの村で泊めてもらおう」

浅葱がいった。

人の姿のない村で、泊めてもらえる場所があるのかわからなかったが、この先には祈りを捧げなければならない神宿がある。

それに、本当ならば人々と顔をつきあわせ、平和を祈らなければならぬのだ。宿を探しながら、ひとりでも多くの人に出会い、宿禰が旅をしていることを知ってもらふ必要がある。

浅葱は紅葉に馬をまかせて、一軒の小屋へとむかった。軒先にわずかな海藻と魚が干してある。

浅葱が近づくと、それを察知したかのように、むこうから戸がひらいた。女がでてきて、浅葱の姿に「あ！」と声をあげる。

あわてて、干してある海藻と魚を手につかんだが、そこで紅葉と目があった。女は目をまるめて、海藻と魚を落とした。

「あの」

声をかけるまもなく、女は急に身をひるがえして、小屋にとってかえした。

「おばあちゃん！」

大きな声が、紅葉のところまでよく聞こえた。

「おばあちゃん、宿禰様だ。宿禰様がいらっしゃった」

紅葉と浅葱は顔を見合わせた。

しばらくすると、女はまたでてきた。

「あの、宿禰様とお見受けしました。よろしければ村長のところへご案内します」

「ぜひお願いしたい」

女はちらちらと浅葱をうかがいながら、さびれた村の通りへと案内してくれた。

近くで見れば、女は浅葱ほどの年に見えた。着古した着物はどこも接ぎ当てだらけで、接ぎ当てに接ぎ当てをし、それでも穴が空いている。裸足の足の甲は骨が浮かんで見えた。

となりあわせにならんだ三軒の小屋の前で、女は足をとめた。中央の小屋の戸をたたく。

「婆様、千草です」

名のって千草は戸をあけた。

「うるさい、おまえの声は遠くにおつてもよお聞こえるわ！」

「なら話は早いです。婆様、宿禰様がいらしたんですよ」

千草は紅葉と浅葱を手招きした。

「なんと、宿禰様が？」



目をまるめたのは、しわで目もおおってしまうほど、年老いた老婆だった。土間に座りこんで、膝に網をひろげている。大社の婆よりも年をとっているようだった。

「おお、なんとまあ。こんな村へ、ようお越しなされた」

「お邪魔しております。宿禰の紅葉と申します。こちらは守別の浅葱殿です」

太陽を直視するような、まぶしいまざしをむけた老婆だったが、それもわずかなあいだのことで、すぐに手元の網をもやいはじめた。「戦が始まってから、この村は朽ちる一方じゃ。男どもはみんな戦にとられた。村長のわしの夫もじゃ。いまこの村に男はおらん。となり村から嫁いだわしなんぞが、村長を務めておるが、治める村人もこの千草をふくめもう一四人。それもみな婆ばかりじゃ。せつかく来てもろうたが、ここじゃ〈祈踏〉に参加できるものも少ない」

「婆様、私が参加します！」

千草が力をこめていった。

「当然じゃ。……神宿はこの先の岬にある。今日は千草のところへ泊めてもらうがいい。これでももとは旅籠屋だ」

老婆はそれ以上話すことはなく、網を黙々と編みはじめた。こうなるとだれが話してもきかないから、と千草はいつて、紅葉たちはきた道をもどるかたちとなった。

「お客様が来るのは、本当に久しぶりです。私がちいさな頃には、魚や塩を買いつけに来る行商人がたくさんいたんですが、最近はまったくないんです。漁のできる男たちがいないし、街道は盗賊がでて、こちらから物を売りにいくこともできません」

千草は紅葉をふりかえった。

「宿禰様、この村の人たちは、みんな滅びることを受け入れてしまっています。年老いた婆たちだけでなく、私の友達も」

「何故男がひとりもない？ 老いた男たちまで、戦にとられることはないだろう？」

浅葱の問いに、千草は頬を赤くした。年頃の男と話す機会がない

から、気恥ずかしいのだろう。浅葱を気にしながら、千草はそわそわと落ち着きがない。

「私がまだちいさいころには、爺たちが漁をしていました。その頃はまだこの村にも活気があって、行商人も来ていました。でも、あの日、日の旗をもった軍勢が村を襲ったんです。山越里を襲った日乃出里の軍勢は、山越里に負け、逃げのびた兵士たちが村を襲ったようでした」

千草はうつむき、はきはきとした大きな声も、しだいにちいさくなった。

「いまここに住む女たちは皆、そのとき岬の神宿にいていて、難を逃れたものたちばかりです。私たちが村に帰ってくると、……爺たちは殺され、女たちの大半はさらわれていました。兵士たちは村の船をつかって逃げ、私たちは生きているものがないか探しましたが、息のあった爺たちは、怪我がもとで半年もたたずに亡くなりました」

「むごい……」

「いいえ、むごいのは、それからの私たちの暮らしのほうです。わずかなたくわえのほとんども盗られ、船もなくなり、私たちは食べるものに飢えました。ひとり、ひとりと餓死していく人を見送り、毎日どうやって飢えをしのぐか考え、死んだものの肉は食べられないかと何度話しあいが行なわれたか！」

ぶるぶるとふるえた千草は、必死な顔で紅葉の両腕をつかんだ。

「宿禰様、私はこのまま死にたくはありません！ 村と共に朽ちていくなど、絶対に嫌です！ 世を平和にしてください。私の想いを天座大神様にお伝えください！ 私は何も贅沢など申しません、ただ、ちいさかった頃のような、貧しくとも安らぎに満ちた日々を過ごしたいだけです！」

紅葉は強烈な現実を突きつけられて、言葉をうしなった。

そんな紅葉の戸惑いを感じたのか、浅葱は千草の腕に手をおいた。おどろいた千草は、腕をひっこめて、背のうしろに隠した。

「その祈りを捧げるために、宿禰様は旅をしている。明日の〈祈踏〉には、参加できうるかぎりの村人を集めてほしい」

「はい。……すみません、宿禰様。私、興奮してしまったようで……」

「いいえ、お気持ち、お察します」

うつむいたまま、千草はそれから必要なこと以外、口にすることはなかった。

## 第五話 光の春 弐

浅葱は紅葉をうかがった。だれもない八畳ほどの部屋で、身をよせるように側にいる。

囲炉裏端でちいさくなって、じっとにぎった拳を見ていた。

千草は一軒の小屋へふたりを案内した。

旅籠屋だったというが、以前のそれは兵士が攻めてきたときに燃えてしまったという。かといって、千草の住む小屋は、ちいさすぎてふたりを泊めることができない。空家となった小屋を掃除して提供してくれた。

こざれいになった部屋は、だがすきま風がひどく、つかわなくなった囲炉裏の薪木は、なかなか火がつかない。

食事も薪木も提供できないと、千草は申し訳なさそうにいった。

浅葱は泊めてもらえるお礼にと、近くの山へいき、薪木を切って集めた。

千草は小屋を掃除しているあいだに集められた薪の量に、目をまわめていた。

紅葉はそのあいだも、ひと言も口をきいていなかった。

このまま黙っていようかとも思ったが、なんとなく放っておくことができなかった。

「不安か？」

びくりと紅葉はふるえた。わずかに視線をずらしたのか、横顔にかかる髪がゆれた。

火が、ようやく薪木に燃えうつった。

あたたかくなれば、紅葉の緊張もとけるだろう。

浅葱は干し飯をとりだして、水のはいった竹筒にいれ、火にかけた。

「現実はこのまんじじゃない。霊山に近づくにつれ、もっとむごい話を聞くことになる。話だけじゃない、目の当たりにするだろう」

紅葉はぎゅっと膝のうえの拳をにぎった。

「まともに受けとめていたらきりがない」

浅葱の言葉に、紅葉は顔をあげた。

「せめて、かける言葉があれば……」

「言葉はつなぎにはなるが、救いにはならない。〈魂もらい〉は何のための旅だ？ 宿禰は何のために旅をしている？ 人々が期待しているのは、宿禰からのあたたかい言葉ではないと思うがな」

「わたしは……」

紅葉は唇をふるわせて、かんだ。

飯が炊けるまで、ふたりは黙ったままだった。

千草の語った話は、紅葉にとって衝撃だったにちがいない。安穩と暮らす世界があつて、一方では食べるものにも着るものにも飢えている。

無情であつたとしても、これが現実なのだ。

飯がぐつぐついいはじめたころには、部屋もだいぶ暖まっていた。無言で筒をさしだすと、紅葉はにぎりしめていた拳をようやくひらいた。

「ありがとうございます」

かすれた声だった。そっと手で受けとって、あつつ、と耳たぶを触る。となりに伏せていたぼちが、ちらりと視線をむけた。

あまつた竹でかんたんにこしらえた匙をわたすと、紅葉はふうふう息を吹きかけて食べはじめた。それでも熱いのか、はふはふいながら食べている頬は、すこしずつ赤みがさしてきた。

腹が満たされば、すこしは前向きに考えるようになるだろう。

紅葉は半分を食べて、半分をぼちにわけた。まだ短いつきあいだが、いつでも彼女はぼちのことを忘れない。どんなにお腹がすいていようとも、ぼちと分け合う。さながら、姉弟のようだ。

夕餉を終えると、ふたりは囲炉裏をはさんで横になった。互いに背をむけたあいだに、ぼちが置物のようにどっしりと座りこんでいた。

紅葉が横になると、ぽちはいつも彼女に身をよせたまま石像になつてしまう。目を閉じ、眠っているように見えるが、紅葉に危害をくわえようとすれば動きだすのだろう。

だから紅葉は、浅葱のような年頃の若者と、平気で寝起きを共にできるのだ。彼女自身に警戒心はまるでない。

紅葉が寝息をたてるまで、浅葱は目を閉じたままじっとしていた。

「浅葱さん」

呼ばれたときは、しばらく呼ばれたことに気がつけずにいた。

ふりかえると、かすかな囲炉裏火の中に、紅葉の顔がうかんで見えた。

「明日の〈祈踏〉、がんばります」

何を突然いいだすのかと、浅葱はわからないまま適当に返事をした。紅葉はじっとそんな浅葱を見つめてから、「おやすみなさい」とつぶやいて、また背を見せた。

動かないぽちのむこうで、紅葉の寝息がかすかに聞こえはじめた。その頃になってようやく、浅葱は紅葉が何をいいたかったのか気がついた。

紅葉は浅葱の言葉を受けとめたのだ。〈魂もらい〉の意味を考え、紅葉なりに消化した結果が、明日の〈祈踏〉への想いとなったのだろう。

浅葱は眠ってしまった紅葉に、うなずいた。

千草の想いを神宿へ、ひいては天座大神へと、共に伝えよう。

## 第五話 光の春 参

翌朝、まだ日もあけきらぬ時間。小高い山々には薄雲がかかり、しっとりした空気が、旅籠をでたふたりを包んだ。

そんな早い時間にもかかわらず、ふたりを先導するのは村の女たちだった。千草が呼び集めてくれたのは、彼女と年のかわらぬような五人の女だった。いま動けるのは彼女たちだけだという。

神宿は村のはずれの岬にあるという話だった。陸からわずかにはなれた海辺に、ごつごつした岩の小島がある。その頂きに神宿があるというのだ。

すぐそこに見える岬は、歩くとずいぶん遠かった。知らぬまに、すっかり日がのぼっている。

近づくにつれて、道は不安定な岩場に変わった。何かにつかまっていなければ、立っていることもままならないほど、足場が悪い。岬にしがみつくようにすすめば、足元の岩に波がくだけ、皆の足をぬらした。

そんな険しい道だが、かつて人々がとおっていたあとが見えた。わずかな足場に見える人々の信仰は、すでに薄れている。何年も人がおとずれていない証拠だった。

ようやく神の祀られた神宿の前までやってきた。

立烏帽子のような小島の頂きに、壊れかけた神宿が建っている。おそらくこの小島自体が、神を表す磐座いわくらなのだろう。海の底から、地と海の力がからみあって、ふきあげてくるような力を感じる。

それゆえに、人々はここに神宿をおいたのだらう。だが、だれも拝むもののいない神宿からは、神の気配がほとんどしない。

「宿禰様、ここに祀られているのは、大海地力神様おおつみのちぢからのかみです。よろしく願います」

「はい。みなさんは、さがっていてください」

紅葉は、皆がさがれるところまでさがるのを見届けてから、ひと

つ、深呼吸をした。

身を整え、草履をぬぐ。腰をおろし、裾をさばいた。両手を膝の前にそろえ、頭をたれて深く息を吸った。空気の流れを感じながら、ゆっくりと唱える。

「掛けまくも畏き大海地力神の大前に紅葉恐み恐みも白さく……」  
目をとじる。

が、何も見えない。

しばらく待っても、剣乃木姫のときのように、景色が見えることはなかった。

失敗したかもしれない。

——大海地力神様、どうかこの村の想いを感じてください……！

つよく、紅葉は祈った。千草に言葉をかけてあげることができなかったかわりに、〈祈踏〉でその想いをかえすと決めたのだ。このまま、できなかったと身をひきたくはない。

と、波の音がおく聞こえてきた。

それはじょじょに近づき、突然、紅葉をどっとのみこんだ。ぐるぐるところがされ、気がつけば紅葉は深い海の底にいた。

暗い海だった。魚の姿はなく、暗い海藻がけだるそうにゆれている。

剣乃木姫のときとはまったく逆の光景だった。あのときは、日ざしがかすかであっても、そこに生きるものたちの命がかがやき、暗いと感じることはなく、居心地も良かった。

だがここは、死の海だ。生きるものがおらず、その屍だけが残されている。それはどこか、村の様子を連想させた。

神の姿が見えず、紅葉は死んだ海藻をかきわけながら、捜した。遠くぼんやりとしかささない日の光は、紅葉の手元にさえ届かず、足元は何も見えない。人の信仰が薄れるということは、神の住まう世界をこれほどまで暗くしてしまうのか。

しばらくすすむと、むっと異臭がただよってきた。生き物が腐った臭いだ。



紅葉は先へすすむべきか迷ったが、大きく息を吸いこんで、足をふみだした。くにゆり、とやわらかいものを踏みつけた嫌な感触がする。

思いきって海藻をかきわけると、急に視界がはれた。

そこは海藻の壁でまるく形づくられた部屋のようにだった。底一面に、腐った魚やその骨が散乱している。異臭はここから放たれていたのだ。

部屋の中央に、ゆらゆらと陽炎が見えた。大海地力神だろう。紅葉はゆっくりと神に歩みよった。

大海地力神は紅葉に気がついていないようだった。ゆっくりとした動作で、底に沈んだ魚の死骸をつかみ、食べる。ぼりぼりと魚をむさぼる嫌な音が響いた。

姿が見えないのに、紅葉は敬われることを忘れた神のみすぼらしさに、胸が痛んだ。村に活気があった頃は、人々に祀られ、大海のようにうつくしく、そして荒々しい姿をしていたことだろう。

——大海地力神様、どうか村の想いに気がついてください。

紅葉は大海地力神を抱きしめるように腕をだした。

途端、耳をつんざくような悲鳴が紅葉を襲った。荒々しい馬のひずめの音、火がぼつと燃えあがり、ひろがっていく音、鎧金具の音、断末魔の悲鳴——

はっ、と紅葉は目を覚ました。

潮風が紅葉の頬をなで、磐座にうちよせた波しぶきが、目の前で舞う。

身体中に嫌な汗をかいている。一瞬目に見えた光景を思い出し、

紅葉は口元をおさえた。

これが、この村を襲った悲劇。

千草の語った絶望。

紅葉は気を静めようと深呼吸をくりかえした。

腹の底に、冷たくかたまった大海地力神を感じる。あとは舞を捧げて、村人の想いを伝えるだけだ。

立ちあがると、めまいを感じた。

剣乃木姫のときとはちがい、舞い方がまったくわからなかった。大海地力神の力が弱まっているせいなのか、紅葉の能力不足なのか。それでも、紅葉はやるしかなかった。〈祈踏〉を成功させ、千草の望む平和な世へと少しでも近づけるようにしたい。

紅葉は檜扇を手にした。

大丈夫、舞い方は剣乃木姫から教わった。

扇をひらき、ひとつ呼吸をして、右足を踏みだす。

鈴がちいさくころん、と鳴った。足でとんとん、と拍子をうつ。そうすると、身体は自然に舞いはじめた。

腕をひろげ、手首をしならせ扇を舞わす。片足を軸にくるりと舞い、扇をとじると両の手でにぎった。櫂をこぐように、腕をのぼしては胸にひきよせる。地からわきあがる力をくみあげて、ひきよせる。くみあげて、ひきよせる。

腹の底でじっとしていた大海地力神が、むくりと起きあがった。腕に冷やりとしたものが添うたかと思うと、力を貸すように、地の力を一緒になってひきあげてくれる。

それはどこか、漁の光景にも似ていた。魚のかかった網をひきあげる。ひきあげる、ひきあげる。

大量の魚が、船の上できらきらと跳ねあがった。船が岸へもどると、女たちが駆けてくる。岸には何艘もの船がならび、次から次へと魚が運びだされていた。にぎやかな売り子の声が、行商人の足をとめる。

紅葉が舞い、〈祈踏〉へやってきた女たち——千草の想いがふくれ、かつての村の様子が、それぞれの目の裏に映しだされたのだ。大海地力神は、にぎやかだった村の様子が好きだったのだろう。もっと見たいもっと見たい、と紅葉を舞わせる。

紅葉は一心不乱に想いをひきあげた。

そうしていつのまにか、紅葉はその想いの網をすりぬけた一匹の魚となって、大海へ泳ぎでた。暗く死んでいたはずの海は、明るく

いきいきとした海にかわっていた。

うつくしい海藻の幕をぬって、大海地力神のもとへいくと、神は紅葉を手にとり、ぱくりと飲みこんだ。

波しぶきが紅葉の顔をぬらし、現へと呼び戻した。

紅葉は神宿にむかって扇をさしだした。すると大海地力神が扇のうえに宿り、ざっとしぶきをあげると、そのまま溶けるように消えていった。

紅葉は、気を失った。

## 第五話 光の春 四

浅葱は紅葉を抱きとめた。見れば、紅葉の額にはびっしょと汗がうかんでいる。森村で見せた〈祈踏〉もそうだったが、この儀式は宿禰の体力を相当奪うようだ。

霊山まで、紅葉のちいさな身体がもつのか、浅葱は心配だった。

「宿禰様！」

女たちがわらわらと集まってきた。その声に目が覚めたのか、紅葉は目をあけた。

「大丈夫か？」

「……はい、何とか」

かすれた紅葉の声は、千草の明るい声にかき消された。

「宿禰様、ありがとうございます！」

「わたし、昔の村の様子を見たら、元気がわいてきました」

「あんな村にもどれるように、がんばります」

うつすらと涙をうかべた千草や女たちの様子に、紅葉はかすかに微笑んだようだった。

「はい。わたしも〈祈踏〉をつづけて、天座大神様にこの村のことをかならずお伝えします」

紅葉は村で休んでいってください、という千草の誘いを断った。

そうして千草たちは先に村へ帰し、紅葉は力つきたかのように、ちかくの砂浜に腰をおろした。

浅葱は黙ったまま、紅葉の横顔をながめた。彼女はずっと海を見ている。表情を表にださない紅葉は、何を考えているのか浅葱にはわからない。ただ、ぼんやりしているのではなく、彼女なりに何か考えているのだということは、わかってきていた。

「ここへきて、よかった」

紅葉はぼつりといった。

〈祈踏〉を終えたあと、千草たちはみちがえるように明るくなっ

た。五人ではしゃぎながら帰っていく姿を見てみると、〈魂もらい〉が成功すれば、この漁村にもまた活気がでるだろうと思えた。

「そうだな」

ただひいてはよせてをくりかえす、海の鼓動を感じながら、ふたりは満たされた気分だった。

母に抱かれているような気分になって、のんびりしていると、ぽちのうなり声が聞こえて、浅葱は我にかえた。見れば、背後の岩陰を睨んでいる。

「おいおい、ちょっと待ってくれ。こっちには争う気はねえんだ」

声と共に、岩陰からでてきたのは、昨日声をかけてきた、あの浮浪者風の男だった。だが、その格好は襤褸ではなく、旅装束に変わっている。

男は平手をふりながら、ぽちから逃げた。

浅葱は紅葉を背に隠した。

「なんのようだ？」

浅葱が低くたずねると、男は手をあげて、ぽちから距離をとったままいった。

「さっきの〈祈踏〉は本当に見事だった」

ぽちが攻撃態勢にはいると、男は早口にいった。

「俺は山越里やまこしのむらの常盤とこばんという。昨日、あんたたち——いや、宿禰様をお見かけして、〈魂もらい〉かと気になっていたんだ。もしもそうならば、俺もつれていってもらいたくてな。きつと、あの神宿へ参るだろうと待たせてもらった。それで〈祈踏〉を見せてもらったんだ」

浅葱は常盤と名のつた男をにらみつけた。

「昨日はおどろかせて悪かった。笑っちゃったのは、うれしかったからだ。怪しいもんじゃねえよ。もし身の証がほしいってんなら、

山越里の里長を訪ねてくれ」

紅葉が浅葱の影からでた。それを手で制する。

「あなたも、守別になりたいんですか？」

「いや、守別じゃない。旅に同行させてもらいたただけだ。でも、宿禰様の身は俺からお守りさせていたたくし、食料だってあんたたちの世話にはならねえ」

「どうだかな」

浅葱の言葉に、常盤は肩をすくめてみせる。

「何故、〈魂もらい〉に同行したいんですか？」

紅葉が問うた途端、男の飄々とした顔に影がさした。

「葉月」

その名前に、紅葉が目をひらいた。

「前回の〈魂もらい〉に出た巫女の名前ですね」

「ああ、そうだ。俺と葉月は兄妹だ」

「！」

「何故、葉月が戻らなかったのか知りたい」

紅葉は顔を伏せた。そして静かに答えた。

「〈魂もらい〉とはそういうものです」

波が岩にくだけた。水しぶきが、風にのってとんでくる。ぼちが

紅葉の足元へやってきて、身をすりよせた。

「常盤さんが、葉月さんの軌跡を知りたいとおっしゃるなら、わたしはかまいません」

浅葱は首をふった。

「紅葉、どこのだれともわからないものを〈魂もらい〉に同行させることはできない」

「もしも彼が、物盗りでしたら、わたしたちの少ない荷でもほしいほど、何かに飢えているのでしょうか。彼が、わたしたちを殺したとしても、この世はつづいていきます。この〈魂もらい〉でも世は平和を望まなかったというだけです」

静かにとつとつと話す紅葉の口調は、他人事のようで、浅葱を苛立たせた。

「じゃあ、葉月は平和を望まなかった世の人のために死んだってのか！」

怒鳴ったのは、常盤だった。

「あんたのいってることはそういうことだ。〈星流れ〉は、平和を望む心の流れじゃないのか？ 〈魂もらい〉はその想いを霊山へかっついていくためのものだろ。宿禰がそんな考えじゃ、平和になるわけがねえ！」

「その怒りが、あなたが葉月さんの兄妹だということを表している」紅葉が投げてきた視線に、浅葱は認めるしかなかった。

「常盤さん、〈魂もらい〉の想いを受けとめるのは天座大神様です。宿禰は人の御霊をつないでください。わたしたちは道中の神宿に旅の安全を祈りますが、それを受け入れるかどうかも大神様がお決めになること。優秀な巫女であったという葉月さんが、それをわからないはずがありません」

常盤はまだいいたいことがあるのか口をひらいた。それを、紅葉がとめた。

「そういう旅だと、わたしは受けとめています。それでも常盤さんは、同行されますか？」

鴉が遠い空で鳴いた。戦の世だと、人が嘆いても動物も自然も、かわらぬ毎日を過ごしている。人が足踏みしていても、歩みつづけていても。

「〈星流れ〉があつたとき、葉月が死んだってことがようやくわかったんだ。そうして思った。宿禰様に会って、〈魂もらい〉に同行させてもらおう。葉月が歩んだ道を見ておきたいってな。そんなわけで、よろしく頼むわ」

常盤がさしだした手を、紅葉がにぎった。ふたりの目が浅葱にむいた。

浅葱はもう一度いいのか、と紅葉に目で問うた。うなずく紅葉に、しかたがなく浅葱は手をのせた。

「おふたりとも、よろしく願います」

「ああ、まかせとけ！」

元気のいい常盤に、浅葱は嘆息した。

「おい、ふたりっきりの旅路を邪魔されたからってそんなに怒るな！」

浅葱は常盤の頭を疑った。

「〈魂もらい〉の意味をよく考えろ」  
これからの道中が、不安になった。



## 第六話 墮栗花 壺

サア——……

細かな雨が静かに降りつづいていた。

すぐ近くで、蛙が鳴いた。

ぽつ、ぽつ、と雨水の滴る音がやけに大きく聞こえた。

もう、かれこれ五日は降っている。木々も草もすっかりうるおって、地面はあちこちに潦をつくり、ぬかるんでいた。よろこんでいるのは蛙くらいだ。

紅葉と常盤は雨やどりをしていた。村と村をむすぶ土着の神を祀った神宿の屋根をかりている。峠と峠をむすぶ街道ぞいのちいさな神宿だ。あめのくらこのかみ天之蔵戸神にはすでに挨拶をすませてある。

浅葱は馬を駆って、この先に夜をこせる場所があるか探しにいった。

ふたりは黙ったまま、雨の音に耳をかたむけていた。

「寒いのか？」

常盤にきかれて、紅葉ははじめて自分を抱きしめるように、腕を抱いていたことに気がついた。

降りしきる雨に、蓑の中まで水が染みこんできている。衣の裾はすっかりぬれてしまった。足袋もずぶぬれで、指先の感覚はもうない。

「寒い」

「こっちにこいよ、すこしはあったまるだろ」

人ひとりぶん、常盤とは距離があった。紅葉はその言葉にあまえた。このままでは風邪をひいてしまう。

常盤に肩をならべたところで、ふたりの二の腕のあいだから、ぬつと鼻面があらわれた。

「おい、犬」

「ぼちです」

狒犬が顔をだした。かと思うと身体をずいとおしだして、窮屈にもふたりのあいだにおさまる。そのまま満足そうに目を閉じた。

「……空気の読めない犬だな」

「ぼちです」

常盤はどうしてもぼち、と名を呼んでくれなかった。

「でも、あたたかい」

ぼちの毛皮もぬれていた。それでも側によると、ほんのりとあたたかさが伝わってきて、ほっとする。

「獣臭いな」

「獣ですから」

「サア——……」

雨のやむ、気配はない。

「まだひと月なんだな」

ぽた、と落ちる滴のようなひと声だった。

「そうですね」

「あまり先へすすんでいない」

「こんなものだと思います」

宮里をでて、常盤の住む山越里を、ようやくぬけたところだった。低い山が連なるこのあたりでは、のぼってくだっての道のりに、なかなか距離をかせげなかった。

「先へすすまないほうがいいんじゃないか？」

常盤を見ると、彼は意地悪そうな顔をしていた。

紅葉はしばらくのあいだ、黙った。答えを探すのに、すこし手間どった。

「いずれ、そのときはやってきます。どんなものでも、かならず人間だけじゃない。動物も、虫も、花も、木も、かならず終焉がおとずれる。」

「わたしは、それにあらがいたくない」

「……あらがえよ、っていっても、あんたら巫女には通じないのかね？」

「巫女がみんなおなじ考えなわけではありません。これはわたしの意見です」

常盤はかぶったままの笠をもちあげ、空を仰いだ。

薄墨の五月雲から絶え間なく雨は落ち、草葉や地面をたたく。

葉にたまった水が、ししおどしのうちに、すつ、と落ちた。

「葉月もそうだった。あいつ、俺より五つも年下で、御社にはいる前はまだ俺の背の半分もなかった。ぎゃあぎゃあ騒いだかと思ったら、ぴーぴー泣いて、うるさい奴だった。御社に入っていないなくなっただかと思いきや、突然帰ってきて宿禰になったってさ。世を平和にしてみせます、なんてすました顔ででていって、……戻ってこなかった」

息をはいて、鼻をすする。横をむいてしまった常盤を、紅葉はじつと見つめた。

「久しぶりに会ったとき、おどろいた。妹だっていわれてもわからなかったね。親がそういうから、へえ、そんなもんかと思ってたくらいだ。話し方も態度も落ち着いていて、里のもんとはちがう。あいつがそこにいるだけで、空気がび、っとひきしまるっつーか、清浄になるっつーか、……ある意味、異様だった」

里人にとって、御社の人間は皆、おなじ種類の人間だとは思われていない。常盤のいうように、空気がちがって異様だという。御社で暮らしてきた紅葉にはわからないが、薬を届ける治療院の人にはよく、「あんたには巫女さんの空気がないね」といわれた。

常盤もまた、紅葉におなじことをいった。

「あんたからは、そういう空気は感じられないんだが、話をしていると、やっぱり巫女なんだって思わせられる。物に対する執着心とか、欲望が、ないんだよな」

「わたしにも、ほしいものはあります」

常盤はにや、と口端をもちあげた。

「なに、どんなもの？」

「練り菓子です」

ふ、と息を吐いて、常盤は声をあげて笑った。紅葉は首をかしげた。

「どうして笑うんですか？」

「いや、まあ、いまの世の中、練り菓子が高価なものだよな」

またひとしきり笑う。

雨は、そんな笑い声も打ち消して、静かに静かに降っている。

浅葱は、まだ戻ってこない。

「葉月が旅にでて、一年がたって、二年がたって、世は平和になるどころか、荒れていく一方だった。ああ、こりゃ、失敗したんだなって漠然と感じたとき、なんつーか、急にあいつが妹だったんだって、思ったんだ」

わかるか？ と常盤はたずねた。

「巫女で宿禰になったあいつは、妹というよりまったくの別人だった。でも、いなくなつて、死んだんだってわかつて、はじめて、血のつながった妹として、俺のところへ帰ってきたような気がした。姿を見たわけじゃねえけど、魂がふらつとやってきたんじゃないかってそんなことまで考えたりしてさ。おかしいよな」

にがく笑ったかと思うと、常盤は怒りの面を見せた。

「俺には、わからねえ。神様ってのは、そんなに大事なもんかね？ いるかいないかもわからねえものに、命をかけられるあんたらが、わからねえ」

雨どいから、しみた雨水がぽたぽたと地に落ちた。水たまりと同化して、はねて、また地面に染みこんでいく。

「死にたい、と思う人はいません」

紅葉のつぶやきに、常盤ははっとふりかえった。

「どんな人だって、死ぬのは、怖いです。その先のことを、何も知らないから」

神宿をかこむ、雨にぬれた木々をながめながら、紅葉はぼちの頭をなでた。

「葉月さんもおなじだったと思います。きっと身のかるくなった葉

月さんは、もう一度家族へ挨拶に来たのだと思います」

雨にぬれ、森は沈黙している。

静かな紅葉の声は、森の吐息のようにかすかだった。

「体という器をすてた御霊は、本真の塊です。〈星流れ〉で流れた御霊を霊山におわす天座大神様が見極め、そうして世の流れを決められます。〈魂もらい〉で、一身に祈り、大神様が世の平和を望む心が少ないと判断されたとき、葉月さんは己の御霊をさしだしたのかもしれない。すこしでも、平和を望む御霊が増えるようにと」

「自分の命をさしだせば、平和になると考えるなんて、お人好しいところだぜ」

また、常盤は顔をそむけた。

サア――……

雨のやむ気配はない。

「降りやまねえし、そろそろ墮栗花かねえ」

「かもしれないね」

「あーあ、やだやだ、この時期はなんでも腐るし湿っぽいし、はやく夏がこないかね」

「そうですね。でも、雨があがったあとの緑がきれいで、わたしは好きです」

「むっとしなけりゃ、なおいいがね」

突然、ぼちが立ちあがった。街道のほうを見つめる。紅葉も常盤もおなじ方向を見た。

雨音のなか、かすかに水をはね、地をける音が聞こえる。

「ようやく帰ってきたかね」

「そうですね」

まもなく、馬にのった浅葱の姿が見えた。

## 第六話 墮栗花 弐

出発して二刻半ほどがたとうというとき、あたりの闇がしずかに三人を包みはじめていた。蛙の鳴き声がいつそうつよくなり、山をはさむ街道中にこだましている。

「まだつかないのか？」

雨は降りやまず、いまもしとと三人の肩をぬらしている。紅葉は馬上の人となっていたが、常盤も浅葱も足はすっかり泥まみれだ。

「もう着く」

浅葱の言葉をうなずかせるように、道の端に草に埋もれた道祖神がたっていた。

馬からおろしてもらって、紅葉はわずかなあいだ塞の神へ祈った。ここからは”村”という領域だ。

紅葉も歩いて集落を目指した。

あたりがすっかり闇にのまれたころ、うすい雨のむこうに、ぼんやりと暖かな光が見えてきた。

「やれやれ、ようやくついたな」

「こっちだ」

旅籠を探した浅葱は、結局この先にある村しか見つけれなかったという。村人の話では、次の村まで一日はかかるというから、村人に一泊の宿をお願いした。

猫の額ほどのわずかな田畑をはさんで、茅葺の家がぽつぽつとならんでいる。その、中央あたりの家で浅葱は足をとめた。

戸をたたき、名を名のと板戸があいた。

「遅かったじゃない？ 待ちくたびれたわ」

でてきた女は、胸に赤子を抱えていた。

女は紅葉に気がついて、笑みをうかべた。

「そちらが宿禰様ね。どうぞ、おはいりください。もてなせるよう

なものはありませんが」

「いいえ、風雨がしのげるだけで、とても助かります」

中へはいると、囲炉裏端に老夫婦が座っていた。紅葉を見て、ここにこと目を細める。

「ようこそいらっしやいましたな」

「宿禰様を泊められるなど、こんな名誉なことはありません」

老爺が腰をあげて、紅葉に手をさしだした。その手をにぎる。かさついた、骨ばった手が裏の大巫女の手を思い出させた。

御社から逃げるように去ったあと、どうなったのか紅葉は気にしていた。婆や葵のこと、紅葉が〈魂もらい〉にでることを反対していた巫女や宿司、宮里の人々のことも。

と、老爺の手が急にこわばった。目を大きくさせて、紅葉の背後を凝視している。

「狛犬じゃ！」

老爺は土間に立てかけてあった鍬をつかんだ。突然の声におどろいた赤子が、泣きだした。

「待ってください！」

浅葱が老爺の前に立ちふさがった。紅葉は戸口の手前にいたぼちの首に抱きついた。

「あれは、人を襲う狛犬じゃないですよ」

常盤がいった。

「宿禰様の守護獣です。宿禰様に危害を与えないかぎり、なにもしません」

「いいや、人を襲わん狛犬などいやせん！　そこをどけ！　わしが退治してやる！」

浅葱をおしのけようとする老爺は、しかし浅葱をびっくりとも動かせぬまま、地団太を踏んだ。

「狛犬がいるだなんて、聞いてないわ！」

赤子を深く抱きかかえ、女が叫んだ。

「宿禰様のいうことをきく獣だろうと、狛犬は一步も家に入れんぞ

！ 狛犬は赤子が好物じゃ。ちかくにおれば、食わずにはおれんじやろう」

「あの狛犬は宿禰様のわたすものしか食わない」  
常盤がいつても、老爺は首をふった。

「宿禰様の守護獣というなら、今晩は宿禰様だけでお泊まりください。わしらはおなじ屋根の下では安心して眠れません」

「わかりました」

老婆の言葉に、紅葉は立ちあがった。二歩さがると、戸口からもれる光の外だった。ぽちがのっそりとそのあとにつづいて、紅葉の横にぴったりとくっついた。

雨が、紅葉の頭を、肩をぬらした。

「お騒がわせをし、申し訳ありません。狛犬が赤子を食うのはよく知られたこと。貴女方の恐怖はもつともなことです。そのことに気がつかず、宿をお願いしたことを、深くお詫びいたします」

「紅葉……？」

ちらりと浅葱を見て、紅葉はつづけた。

「馬小屋か納屋はありませんか？ わたしはそこにかまいません。  
一晩、泊まらせてください」

「紅葉」

あきれた常盤が紅葉の腕をとった。紅葉は常盤を見上げた。つよい光を放っているようでもなく、哀しみをふくんでいるわけでもない、紅葉の深いまなざしに、常盤は手をはなした。

「納屋なら、その畑のむこうにある」

紅葉から目をそらした老爺は、常盤の背のむこうにうつすらと見える小屋をさした。

「ありがとうございます。狛犬はわたしがりっかりと見ています。  
決して怖がらせるようなことはさせません。このご恩は忘れません」  
一礼をし、紅葉は老爺に背をむけた。ちりん、とかすかに鈴の音が鳴って、紅葉はぽちと共に小屋へむかった。

「ありゃ、本当に宿禰様なんか？」



老爺がその背を見ながら、浅葱に問うた。

「宿禰様だからこそ、狛犬がなついているんだ」  
常盤が馬をひいて紅葉のあとを追った。

「もう三月、共に旅をしてきたが、人を襲ったことはない。悪意をもったものは別としてな。だが、……先にいわなかったことは申し訳なかった」

〈魂もらい〉といえども、荒れた村々に泊まることは少なく、泊めてもらえることも少ない。紅葉になついているせいか、ぼちを犬だと思ふ者が大半だった。すっかり油断していた。

「わしらは……、罰があたらんかね？」

老婆がいった。

「宿禰様に、あんなことをいってしまった」

「でもお婆あちゃん、狛犬は赤子を食べるわ」

「だとしても、本当に食うかどうかは、わからんじやろ？」

「食べられてからじゃ、おそいじゃない！」

浅葱は、ぬいだ笠をかぶった。

「宿禰様は、それほど心のせまい方ではありません。一晩の宿をいただく、ありがとうございます」

一礼し、浅葱は小屋へむかった。

「寝ないのか？」

「はい」

小屋は、せまかった。農具が散らかっているうえに、藁がぎっしりとつまっていた。雨が降りつづいているせいか、藁はぬれ、地面に触れているものは腐っていた。

地面は雨水が染みこんでいた。足をのばして横になって寝ることはできず、三人は乾いた藁をしいて、膝を抱えている状態だった。

ぼちは、紅葉のとなりに寝そべっていた。

「約束をしましたから」

「寝ずの番をするってか？」

「はい」

やれやれ、と常盤は首をふった。

「犬なんか獣なんだ。外においときゃいいじゃねーか」

浅葱は常盤を睨んだ。だが、暗くて常盤はそれに気がつかなかった。

「乾いた清潔な場所で寝れたかもしれねえのに。もしかしたら、あったかい汁物だってもらえたかもしれねえぞ」

「すみません」

「常盤、すぎたことをいうな」

「でもよお」

「それ以上いうなら、外に追いだす」

「……わあったよ」

せまい小屋の中で、常盤は膝を抱えて寝ころがった。

「あー、腹減った。さみい。つめてえ。せめえ」

「すみません」

「紅葉も謝るな」

「すみません」

浅葱は嘆息した。小屋の外から、蛙の声が聞こえてくる。

「なんでそんなに犬にこだわるんだ？」

寝そべったまま、常盤がいった。

「ぼちは……、家族で、友達です」

「でも犬だろ」

「ぼちです」

常盤は失笑した。

「犬の名前じゃねえか」

「常盤、いい加減にしろ」

「いってることが、意味不明なんだよ。こっちの身になってみろ。おまえだって、納屋じゃなくて、あったかい家で寝たいだろ」

紅葉は立ちあがった。ぽちも立ちあがる。紅葉がでていくと、ぽちもまた、納屋からでていった。

雨は、やんでいた。

紅葉がうしろ手に戸をしめた。

小屋の中はすこし、闇の色あいが濃くなった。

「常盤」

「なんだよ。本当のことだろうが。宿禰だろうが、ちょっとは人のことも考える機会になるだろ」

「人のふり見てわが身を正せ」

「説教かよ」

常盤は浅葱に背をむけた。浅葱は立ちあがった。

「紅葉を見ってくる」

「おう、いつてらっしゃい」

## 第六話 墮栗花 参

こびりついたかのようにたれこめていた雲は、ちぎれちぎれて、あいまから月の光がもれていた。田んぼのほうから蛙の声にまぎれて、虫の声も聞こえてくる。

ちいさな谷だった。十軒ほどの家しかない。いびつな田には稲が植えられ、畑には菜っ葉やら芋の芽が見える。

ほそぼそと暮らしているのだろう。どこの家にもゆとりは見えない。ただ、戦のあとがないことだけが、この谷あいの村をうつしく見せていた。

紅葉の姿は見えなかった。ぼちが一緒にいるだろうから、さほど心配はしていない。だが、独りにさせるのは心配だった。

畦道をとおって、あてなく歩く。

どこへいったかなど、まったく見当がつかない。

なんとなく、家のないほうへとすすんでいくと、森の入り口に鳥居が見えた。

月光が、浅葱を導くように鳥居を照らしている。

鳥居をくぐると、急な階段が視界をうめた。苔むし、深い緑に染まった階段は、すべりそうなほどぬれている。

いくら月がでているとはいえ、暗い道を紅葉はよくひとりで行くものだと思う。

旅の道中でも、紅葉はけっして不満をいわなかった。あたたかいものが食べたいとか、寝床が冷たいとか、野宿はしたくないとか、足が疲れたとか。

わかい娘だというのに、ぬかるんだ道を歩くことも嫌がらず、こちらが何もいわなければ、ただ黙々と足をすすめる。

体力があるのかと思えば、そうでもなく、我慢しているふうにも見えない。口だけでなく、態度ですら表さない。

紅葉が何を考えているのか、浅葱にはわからなかった。

虫の声にまぎれるように、紅葉の祝詞がきこえてきた。

こんな夜中に参拝することもないだろうに。

紅葉のいきつく先が、人のある場所ではなく、神の宿る場所なのだとしたら、これほど悲しいことはないと浅葱は思った。

階段をのぼりきると、苔むした狐のとなりに、じっと浅葱を見つめる金の目があった。ぽちだ。狛犬のもとまでいくと、ぽちはようやく目をそらし、紅葉を見つめた。

ぽちは、紅葉によくなついている。犬が飼い主になつくような主従関係ではない。紅葉がいうように、家族の関係だ。寝食を共にし、ときにじゃれあって、ときにあまえている。

そうしていつも、ぽちは紅葉を見ている。いや、見守っているのだ。紅葉はそんなぽちを知っているから、いつでも側にいる。

突然、ぽちが吠えた。

祝詞を唱え終え、伏せていた紅葉が一瞬にして、緑の炎に包まれた。

駆けよるあいだに、炎はぱっと白みを帯びて、はじけた。思わず、腕で目をかばう。

目をあげると、紅葉が倒れていた。

「紅葉！」

抱え起こすと、紅葉の顔は真っ白だった。

まさか死んだのではないか。

そんな不吉な考えが頭をよぎる。

かすかに、紅葉が顔を動かしした。

「紅葉！」

呼びかけると、ぴくりと指が動いた。頬を口元へよせると、呼吸がある。胸も上下していた。

ほっ、と息を吐く。どうやら生きているようだ。

いつのまにか、隠れていた月が、ゆっくりと顔を見せた。

紅葉が、目をひらいた。

「……浅葱さん、失敗してしまいました」

かすれた声だった。

「やはり村人がいないと〈祈踏〉は成功しないようです」

紅葉は顔を腕でかくした。彼女がこんなふうに話すのは、めずらしいことだった。

「わたしは、やっぱり役立たずです。あんなふうに村の人と別れて、〈祈踏〉なんてできるでしょうか？」

「〈祈踏〉とぼちは別物だ。明日には村人も集まってくれる」

紅葉は答えなかった。

月が、また雲にかくれた。明日もまた、雨が降るのだろうか。

「浅葱さん、ごめんなさい。わたしのせいで、ご迷惑をおかけしてしまいました。せつかく、一夜の宿をみつけてくださったのに」

「気にするな」

「常盤さんにも、ご迷惑をおかけしてしまいました。わたしはわがままで、人の気持ちも考えられない」

紅葉の身体はかすかにふるえていた。だが、顔は腕にかくれて見えなかった。

しばらくのあいだ、ふたりは黙っていた。

やがて、紅葉は身体を起した。

「大丈夫なのか？」

「はい、よくあることですから」

紅葉はとなりにいたぼちに抱きついた。口でいうほど大丈夫ではないのだろう。

浅葱はしばらくのあいだ、このままでいさせてやろうと思った。

「ぼちは、わたしの唯一の家族なんです」

ぽつりと、紅葉は話しはじめた。

「わたしは孤児で、親の顔を知りません。兄弟がいるのかも知りません。大巫女様のお話だと、赤子のときに御社にひろわれたそうです。ぼちは、そのときからわたしと一緒にいました。すてられていたとき、ぼちがわたしを守ってくれていたそうです。それからずっと、わたしはぼちと一緒にいます」

浅葱は黙って紅葉の話を聞いた。

「御社のみんなも、ぽちを怖がりました。だれもわたしの相手をするとは思いませんでした。しばらくのあいだ、ぽちからはなれて暮らしていたこともありました。でもわたしは、ぽちがいないことに耐えられませんでした」

ぎゅ、と紅葉はぽちを抱く力をこめた。

「ぼちだけがわたしの側にいてくれたから。ぽちだけが、ここにいていいとってくれているような気がしたから。もしぽちがいなくなったら、わたしはどこにいたらいいのかわからなくなる」

涙をこらえるような間があった。

「どうしてぽちがわたしを守ってくれるのか、わかりません。けどわたしは、ぽちがいたから、今まで生きてこられた。ぽちがいなくなったら、わたしは生きていきません」

うつむいた横顔から、すすり泣きが聞こえそうだった。だが、それらしいものは聞こえず、かわりに風が木々をゆらして泣かせた。

不意に、紅葉が無口で無表情な理由がわかったような気がした。

人としてではなく、ぽちと共に生きていこうとした紅葉にとって、感情も言葉も必要ではなくなったのだろう。

だが、そうして内にこもってしまえば、なおさら人との関係が遠くなる。人とはなれればはなれるほど、ぽちの存在が大きくなっていく。はなれられなくなる。

紅葉はその悪循環に気づいてなお、ぽちからはなれられずにいるのだ。

「紅葉」

浅葱は、そんな紅葉の痛ましい姿に、何か言葉をかけずにいられなかった。

「月を見てみる」

不思議そうな顔をしながら、紅葉は月を見上げた。

「既望の月だ」

「……はい」

それがなにか？ と紅葉は首をかしげる。

「既に満ちた月。だが、こいねがう文字を当てはめれば、希望になる」

文字遊びだ、といいながら宙に漢字を書く。

「平和を希う。それがへ魂もらい」だ。道のりは険しい。雲が光をとぎすように。だが、その光はかならず地を照らす。雨がやまないことはない。雲はとどまることがない。月は、満ち欠けしながら、かならずのぼる」

浅葱は紅葉を見た。

「だれがそうと決めたわけじゃない。だが世のすべては、そうしたもので成り立っている。おれの存在もそうだ。だが、それではあまりにもさみしい。だから人は皆、居場所を求める。おれの居場所は今、おまえのもとにある。おまえの居場所がおれのもとでは、心許ないか？」

「……いいえ」

紅葉は表情をゆるめた。すこし落ち着いたようだった。

浅葱の言葉をたしかめるように、月を見上げる。その瞳に、光が見えた。

安堵して、参道を見下ろした浅葱は、刀をにぎってたちあがった。道の奥にゆれる黒い影が見えたからだ。

ゆらゆらと次第に影をふくらませるそれに、浅葱は鯉口をわずかに切った。

月が影の正体を照らしだした。

「おー、いたいた」

常盤だった。のんきな声に、緊張をとく。

「どこにいつちまったんだか、ずいぶん捜したぜ」

「すみません」

紅葉の前までやってくると、常盤は頭をかいだ。

「いや、なんつーか、謝るのは俺だ。気を悪くしちまうこと、いっちまった。悪かった！」



姿勢を正したかと思うと、深く頭をさげた常盤に、紅葉は目をま  
るめた。

「いえ、本当のことですから」

真顔で答えられて、常盤は口ごもった。紅葉が怒っていると思っ  
たらしい。

「ま、その、……これからよろしく頼みたいんだが……」

「はい」

すかさず肯定の返事を得て、常盤は表情をゆるめた。浅葱もまた、  
そんなふたりのやりとりにほっと息を吐いた。

常盤の言動を紅葉は受けとめる。反論は一切しない。そんな紅葉  
の性格につっこむような性格であれば、常盤と旅をするのは考えな  
ければならなかった。どうやら杞憂だったようだ。

「帰ろう。明日の朝も早い」

「はい」

月の光がやさしくふりそそいでいた。

蛙の恋歌は、このうつくしいときを無駄にしてはならぬとばかり  
に高まった。雲は山むこうへ流れ、星がぼつぼつと瞬いている。

明日は、晴れるだろう。

## 第七話 片蔭 壱

うだるような暑さだった。

何もかもぬぎすてて川に飛びこんだら、どんなにすっきりするだろうか。だが、泳げるような川はなく、あっても足の甲にさえとどかない小川だけだ。

山道をぬけると、広大な平野にでた。見渡すかぎり何もない野っぱらだ。そのむこうには、海が見えた。

「戦場ヶ原、か……」

だれにいうでもなく、常盤がつぶやいた。

戦がはじまる前までの名では、もうだれも呼ばない。国を真つ二つにわけると大戦がおこなわれ、その後何度となく戦場となったがために、ついた名だった。

平野の中央を流れる天川を境に、東に日野出里、西に夜乃出里がある。どちらも東の都、西の都と呼ばれる大きな里だ。

国をつかさどるふたつの里がならんでしまったことが、戦を生んだ原因かもしれない。

風が、ざっと紅葉の頬をなでていった。

草葉がざわざわと言葉をつないでいくようにさざめいて、去っていく。

かすかな異臭に、紅葉は眉根をよせた。

「そういや、つい先日、またここで大きな戦があったらしいな」

「ちいさな里は疲弊しきつてるといいうのに、徴兵で子どももとられたそうだ」

「ああ、ひどい話だぜ」

よくよく見れば、緑のあちこちは馬や人に蹴散らされ、土がむきだしになっている。いたるところに立つ、墓標のような棒は槍だろうか、刀だろうか。月の描かれた裂けた旗が、むなしく風にゆれている。

数日前まで、そこは血にぬれた大地だったにちがいない。あちらこちらに散らばる死体に群がる烏や妖獣たちの姿や、ときおり風につてくる腐敗臭に胸が悪くなる。

右手奥の小高い丘からは、煙がうっすらと立ちのぼっている。

夜乃出里の方角だ。

紅葉の身体は、自然と力はいった。

目に焼きつけておかねばならない光景だと思った。この戦が終わるようにと祈ることが、紅葉に託された使命だ。目をそむければ、真に祈りを捧げることなどできない。

紅葉はじつと戦のあとをながめた。

浅葱と常盤は、紅葉がいこうというまで、黙ってそのときを待った。

戦場ヶ原をとおって、天川につきあたったら、川ぞいに北へのぼる。樹海をこえれば目指す霊山はすぐそこだ。

今回の〈魂もらい〉の一番の難関が、この戦場ヶ原なのだった。国を荒廃たらしめるほど勢力をもったふたつの里にはさまれた地では、何が起こるかわからない。戦に巻きこまれるだけでなく、間者だと思われれば攻撃を受けるだろう。捕らえられ、処刑される可能性もある。

三人はいつでも逃げられるようにと、山ぞいの道をいくことにした。旧街道のその道は荒れてはいるものの、戦場からも遠く、身もかくせる場所が多い。その分、待ち伏せされることも考えられたが、戦にまきこまれることも、目立つことも少ない。

「紅葉、馬にのれ」

しばらく歩きすすんで、浅葱はたまりかねたようにいった。紅葉はすぐさま首をふった。

「強情を張っていると、すぐにばてるぞ」

馬をひいて、前をいく常盤もふりかえっていった。紅葉との距離はだいぶあった。

猛烈な暑さに、紅葉の足がぶっていた。ふたりについていこう

と足を動かしているものの、どうにも先へすすめないようだった。  
梅雨が終わってから、気温はぐんぐんあがった。笠をつけるのも  
うっとおしいと、常盤は黒く焼けてしまっている。

今朝方、中途半端な雨が降ったせいで、昼をすぎるころには空気  
はじつとりとまとわりついてくるようだった。

「ちょっと休むか」

道端のケヤキの影に入って、常盤はいった。

「……何度休んだと思っている？」

「何回休んだって、死にやしねーよ」

「死ななくても、遅れるだろ」

「んだよ、いいじゃねえか。もうあとちょっとだろ。紅葉ちゃんも  
仲良くなったし、もうしばらく一緒にいたいじゃないか」

浅葱は嘆息した。

「夏がすぎれば秋になる。秋がすぎれば冬になる。冬がくれば雪が  
降る。旅がしづらくなる」

地面にぺたりと座りこんだ紅葉は、竹筒にはいった水を手にあけて、  
ぽちに飲ませた。ぽちも涼しい顔をしているが、竹筒をあっという  
間にカラにしてしまった。

「あのな、たしかにそのとおりだ。だけどよ、霊山につくってこと  
はよ、ただのお別れってばかりじゃねえんだぞ」

紅葉はきよろきよると水場を探している。ぽちはそのとなりでど  
つしりと腰をおろし、はっは、と犬のように舌を見せた。

蝉がやかましいほどに鳴いていた。

「だが、のんびりしている暇もない」

「ないけどよお」

常盤は頭をかいた。

紅葉が立ちあがった。浅葱は自身の竹筒を紅葉につきつけた。

「紅葉、水ならおれのを飲め」

「でも……」

「そこで常盤と待ってろ」

紅葉の竹筒を奪いとり、浅葱は水を探しに山にはいつていった。

「あいつ、ほんと不器用だな」

常盤がつぶやいても、紅葉は去っていく浅葱の背を呆然と見ているだけだった。そうして、浅葱の竹筒をもてあます。

「待ってよーぜ。動いてなきゃ、落ちつかねえんだろ」

常盤をふりかえって、紅葉は腰をおろした。

じっとしていると、どこからともなく風がやってきて、頬をなでた。熱い空気とは裏腹に、涼やかな風だ。すうっと、生きかえった気分になる。

山を背にして、戦場ヶ原をながめる。平原とはいっても、大地はなだらかにくだり、遠くはるかな海を見下ろすようなかたちとなる。世が平和なら、平野に稲の葉が青々とゆれていたことだろう。いまや一面草だらけだ。

街道さえ整備されていないところが多く、草をかきわけ、倒木をまたぐことさえあった。だが、景色がどれほど移り変わろうとも、風も草木も、かわりなくそこにある。

「なあ、紅葉ちゃん。旅が終わったらどうする？」

あぐらを組んだ格好で、常盤は問う。平野をながめていた首をまわして、紅葉は常盤を見た。だが、何も答えぬまま、さらに浅葱が消えた方角をじっと見つめた。

そうして長い間のあと、ぽつりとつぶやいた。

「御社へ帰ります」

気のない答えだった。何の思いもなく、他の巫女だったらこう答えるだろうという、模範的な回答だった。

「帰って、また巫女にもどるのか？」

紅葉は黙った。長いあいだ、何もいわなかった。

「考えたことが、ありませんでした」

常盤は目の色を変えて、紅葉の肩をつかんだ。紅葉はおどろいて、目をまるめた。

「考えろ！ 何でもいい、考えたほうがいい」

肩をつかんだ、手にこもる力の強さに、紅葉は常盤の想いを感じて戸惑った。

「未来がないからなんていうなよ。未来はだれにだって、ひとしくおとずれる。だれにだって、だ」

懇願するように、熱いまなざしをむける常盤を、紅葉はじつと見つめた。

「常盤さん、ありがとうございます」

おなじ宿禰となった妹の姿と、紅葉を重ねている。それは常盤の妹になったような気持ちにさせてくれる。ぽちしか家族をもたない紅葉にとって、ありがたい言葉だった。

だが、常盤は首をふる。

「待て、礼をいってもらいたくていったんじゃない。頼むから悟ってくれるな。それくらいなら、真剣に受けとめて考えてくれ。俺は紅葉ちゃんが未来を歩んでいる姿が見たい。平和とか、そんなものじゃなく、紅葉ちゃん自身の未来だ」

本当なら妹に伝えたい言葉なのだろう。

――葉月が、どんな旅をしていたのか知りたい。

そんなふうに着常盤はいていたが、宿禰という存在に伝えたい言葉もたくさん抱えているのだ。そうして、妹のようになってほしくないと思う。その気持ちは、よくわかった。

だから紅葉は考えた。自分の望む未来は何か。

「……今年の桜は、浅葱さんと見ました。来年も、だれかと一緒に桜が見たいです」

「じゃあ、俺と見よう。花見をしようぜ。酒とうまいものもってさ」呆れるかと思ったら、常盤はうれしそうにいった。その表情を見ていたら、紅葉の口は勝手にしゃべりだした。

「浅葱さんも一緒に見てくれるでしょうか？」

「あったりまえだろ、嫌だっつっても連れてくる。そうだ、紅葉ちゃん。にぎやかなのがいいなら、他にも知りあいを連れてくるぜ」

「本当ですか？ ……ぽちも、入れてくれますか？」

「もちろんだ！ 紅葉ちゃんとおなじ賓客の扱いでもてなすぜ！」  
紅葉は暑いことも忘れて、ぼちの首に抱きついた。

「ぼち、お花見だって。楽しみだね」

ぼちはとじていた口から、べろんと舌をだした。はっは、と息をする。

紅葉は目をまるめて、ぼちから手をはなした。常盤が笑った。

「平和になったらさ、俺の里にこいよ。夏は花火を見ようぜ」

「はなび？」

「夜空に大輪の花が咲くんだ。ひゅーう、どっかーん、てな」

「恐く、ないですか？」

「恐かねえよ。耳がちよっと痛いくらいの音はするがな、赤い花が夜空にばーんと咲きほこって、一瞬で消えていくあの儚さが、たまらなくきれいだぜ」

想像して、紅葉は思わず身をのりだした。

「見てみたいです」

「なっ、な！ 屋台もでてっから。紅葉ちゃんの好きな練り菓子の屋台もあったはずだ。戦がはじまって、少ししたら祭りもなくなつてよ。俺もちいさいころに何度か見ただけなんだ。平和になったら、また祭りができる。きつと楽しいぜえ。人がたくさん集まるから、俺が案内してやる」

「……常盤さん、ありがとうございます」

「なあに、いいってことよ。俺にできることがあるなら、なんでもいってみ？」

紅葉はかすかに笑って、うつむいた。

蝉が鳴いていた。

## 第七話 片蔭 式

不意に、悲鳴があがった。

蟬の声にまぎれ、空耳かと疑ったが、ぼちがさっと反応して立ちあがる。

「なんだ？」

常盤が立ちあがった。

甲高い悲鳴は、女のものだろう。

紅葉は息をつめて、あたりをうかがった。蟬はあいかわらず暑苦しい恋歌をまきちらしている。だがどこか、空気が騒然としていた。がさがさ、と山のほうから草のこすれる音がした。常盤は紅葉を守るように背後へかくした。音は、しだいに近づいてくる。鼓動が、自然と早くなる。

ザ、といきおいよくかきわけられた草のあいだから、浅葱が飛びだした。

「無事か？」

悲鳴を聞いて駆けてきたのだろう。息があがっている。

「ああ、俺たちは無事だ」

ぼちが顔をあげた。先へのびる道を見ている。曲がりくねった道のむこうは、山裾の林にかくれて見えない。

もう一度、悲鳴があがった。

「ちかづいてくるな」

「どうする？ 助けに行くか？」

「いや、数が多ければ分が悪い。ひとまず山へはいろいろ」

道の先を気にする紅葉の背を、浅葱がおす。

茂みに身をひそめると、まもなく山裾から少女が駆けてきた。遅れて、その母らしき女が現れる。

「逃げなさい！」



うしろを気にする少女に、女が叫んだ。

「逃がすか！」

追っているのは五人の男だった。簡素な胴守とすねあてをつけている。このあたりの里長の雇われ兵のようだった。

男のひとりが、女を捕まえた。

「子どもも逃がすな！」

ふたりの男が、少女を追った。少女は懸命に走ったが、つまづいて転んだ。すかさず男たちが捕らえる。抵抗する少女をひきずるようにしながら、仲間のもとへと連れていく。

「女、わかってるんだろうな？」

腕をしめあげられた女の顔を見て、紅葉は息をのんだ。あざだらけだった。目元ははれあがり、新しいあざも、治りかけたあざもある。頬には幾本も切り傷があった。

「ありゃ、ただの女じゃないな」

ぽそりと常盤がつぶやく。浅葱がうなずいた。

「今度逃げたら殺ってもいい、というお達しだ。さて、どうしたもんかね」

男はもっていた脇差をぬいて、なぶるように刃の背を自身の手にとん、とんと当てる。にやり、と笑みを浮かべると、まわりの男たちも似たような下卑た笑いをうかべた。

女は男たちを睨みつけた。

「助けましょう」

紅葉は思わずいていた。

「待て、まだ早い」

浅葱が動きだそうとする紅葉の肩を、つかんでとめた。

と、突然野太い悲鳴があがった。少女が男の手をかんだのだ。すかさず逃げた少女は、だがすぐに別の男につかまった。

暴れる少女を、手をかまれた男が容赦なく殴った。

女が悲鳴をあげた。

少女はあまりの勢いに倒れる。

「お頭、こいつからやりましょう！」

男は、殴っても気がすまなかったらしい。

「それもいいかもしれんな。目の前で娘を殺されるところを見るのも、身の裂ける思いだろう」

女は罵倒しようとして、言葉をのんだらしかった。いったら、男がその気になると思ったのだろう。悔しさをぶつけるように唇をかんでいる。

お頭と呼ばれた男は、眼光でもって刺し殺さんばかりの女の憤怒の表情を、おもしろそうに見ている。

「いい顔してるよ、あんた。旦那様が気に入るわけだ」

しばらく考えこむようにしてから、男はいった。

「そうだ。俺のものになれ。旦那様には殺したと報告するさ。そうすりゃ命だけは助けてやる。もちろん、娘もだ」

女は少女を見た。少女は母の視線を受けて首をふった。

「断る」

きっぱりと女はいいきった。お頭のゆるんだ顔が、さっとひきしまった。

「ふん、なめられたもんだ。おい」

お頭は男に顎をふった。

「殺れ」

指図された男が、刀をぬいた。

紅葉はあわてて立ちあがった。が、常盤に肩をつかまれる。抗議しようとふりかえれば、常盤のうしろで、浅葱が弓をしぼっていた。ぽちがいつのまにか麓の木の影までおりている。

男が刀をふりあげた瞬間、浅葱の矢が音をたてて飛んだ。同時に、ぽちが少女にむかって跳ねた。

男が悲鳴をあげた。矢はねらい変わらず、刀をあげた男の二の腕につきささった。

「なんだ！」

お頭の声に、悲鳴が重なる。

「狛犬だ！」

少女をぼちのほうへおしやって、男たちは逃げた。女を捕らえていた男たちも、転びまつろびながら逃げていく。

女はこの隙に、少女へ駆けよった。

お頭が、逃げる男たちに舌打ちをしながら、刀をぬいた。一閃のきらめきのあと、女が少女の手前でどさりと倒れた。

あとずさりながら、男は仲間たちの逃げたほうへ走り去っていった。

少女は倒れた女にしがみついた。

浅葱は山をくだった。常盤と紅葉もその後にならう。

女のもとへとやってきた浅葱は、言葉をのみこんだ。

背中を袈裟斬りされている。衣が、みるみる血に染まっていく。

近くで見れば、女も少女もひどい扱いを受けていたことが察せられた。袖からのぞく腕や手、首や顔に無数のきりきずや青あざがある。少女の手首には縄でしばられたあとが、まだ癒えない傷で残っていた。

「董……いまのうちに、逃げなさい」  
すみれ

女がいうと、少女は首をふった。

紅葉はようやく女たちのもとへやってきた。女の様子を見て、息をのむ。

「止血を……」

浅葱が目でもう遅い、と伝えると、紅葉は蒼白になって目をそらした。

女がわずかに顔をあげた。

「もしや、あなた様は宿禰様、ですか？」

紅葉は女の視界にはいつて、ひざまずいた。

「はい」

女の目に、光がともった。

「〈星流れ〉のあった日から、祈って、おりました。……私は、夜乃出里の里長の三女で、菖蒲あやめと申します」

女は息をついだ。

「娘を、どうか、娘を、お願いいたします。日乃出里へ、捕虜として捕らえられた、あと、むごい仕打ちをうけ、言葉を、失って、しまいました。どこか、安全な場所へ、連れていってください、だけで、よいのです。どうか、どうか……」

菖蒲はむせこんで、血を吐いた。堇と呼ばれた少女が、ぼろぼろと涙をこぼした。

「泣かないのよ、堇。宿禰様が、いらしているなら、もうすぐ、世は、平和になる。大丈夫よ、大丈夫、だから……」

「菖蒲様」

紅葉は菖蒲の手をとった。

「堇様のことはご安心ください。かならずや安全な里へ送り届けます」

ふ、と女の目元がゆるんだ。わずかな力で紅葉の手をにぎりかえます。

「ありがとうございます、ありがとうございます、ありがとうございます……」

くりかえしながら、女の舌はやがてまわらなくなり、まぶたが落ちた。紅葉の手をにぎっていたそれも、突然するりと力がぬけた。音が、したわけではないのに、ことりと、何かが止まった。

少女は母に抱きついて、声なく泣いた。

紅葉はこみあげてくるものをおさえきれずに、涙を落とした。彼女が御霊となって霊山を訪れたときには、天座大神様が受け入れてくれますようにと、心の中で何度も祈った。

しばらくすると浅葱は、泣きつづける堇の肩に手をおいた。それだけで堇は、浅葱がおどろくほど、大きく身体をふるわせた。浅葱は堇から手をはなした。

「おどろかせてすまない」

少女は浅葱を、警戒したまなざしで見た。

「浅葱さんは何もしないよ」

紅葉がいうと、紅葉をじっと見る。

「わたしは紅葉。彼が浅葱さん。そっちの立っているのが常盤さん。それから……」

ぼちの姿を探して、ぼちがないことに気がついた。

「犬は奴らが戻ってこないように、追いかけていったようだ」  
常盤の言葉に、紅葉は心配しながらも堇に意識をもどした。

「さっきの狛犬はぼち。わたしの家族」

堇の目から、警戒の色は消えない。

「あなたを、安全な里へ送り届けます」

「その前に、彼女の遺体をどうしかなければならないな。このままでは妖獣の餌食だ。ようやくここまで逃げてきたというのに、これでは浮かばれない」

「そう……ですね。埋葬しなければいけませんね……」

浅葱は、堇にいいな、とばかりに目をやる。堇は身体をこわばらせた。浅葱が女に触れると、かみつくように女にしがみつく。

「お嬢ちゃん」

しゃがみこんで、常盤が声をかけると、ますます腕に力をこめる。

堇の薄汚れた衣が母の血に染まっていく。

「このままお母さんと一緒にいるのかい？」

堇は答えない。

「あいつらは戻ってくるぞ。でもって、きみとお母さんを連れ去っていくかもしれない。それでもここにいるか？」

「妖獣に身体を食われると、霊山へいっても地へ落とされてしまいます。そうしたら、お母さんとは会えなくなります。お母さんを埋葬してあげませんか？」

堇はじっと動かなかった。三人は黙ったまま、堇がどうするのか見守った。

しばらく堇は母を守るようにしながら、三人を見ていた。緊張しているのもあって、目ばかりが大きくなって見える。ろくな食事も与えられなかったのだろう、衣からのびる手足は、かんとんに折れてしまいそうなほどに細い。

声を失った堇が、母と共にどのような暮らしを強いられてきたのかと思うと、見捨てることもできなかった。

しびれをきらした常盤が立ちあがった。びくりと堇は顔をあげる。常盤は、山においてきた馬をとりにかくといつて、山へはいっていった。

彼が馬をひきつれてきても、堇は動かなかった。

戦場ヶ原に着く前に、昼をすませた。日は頂点を過ぎ、かたむきは始めている。

「このままここで夜を過ごすのは危険すぎる」  
浅葱がいった。

紅葉は堇に目をやった。目があう。が、堇はすぐに目をそらした。「堇様、わたしはあなたのお母様にあなたのことを頼まりました。あなたをここにおいていくことはできません」

堇はじつと母を見ている。

「共にいきませんか？ お母様と一緒に。ここには危険です」  
堇の唇はかたく閉ざされている。

紅葉はどこをみるともなく顔をあげた。

首をめぐらせて、そこにあった姿に頬をゆるめる。

「ぽち」

ぽてぽてと歩いていたぽちは、呼ばれて駆けてきた。手をさしだせば、鼻面をおしつけ、首に抱きつくとなぐさめるように、されるがまだ。背をなでると、ふさふさのしっぽの先をわずかにふつてみせた。

「紅葉、動こう。ぽちがもどってきたということは、やつらがまたここへもどってくる可能性がある」

厳しい表情の浅葱に、紅葉はうなずいた。

「そうですね。このままでは、堇様も危険です」

紅葉は堇にむかうように座った。

「堇様、いきましよう。わたしたちと共に」

堇はうつむいたままだった。だが、浅葱が女を抱きあげるのを許

した。

「常盤は紅葉と彼女を頼む」

「どこへいく？」

「……街道はすすめないだろう」

そうして山のほうを見た。常盤は、やれやれとゆるく首をふった。

紅葉は堇に手をさしだした。

堇はじっとそれを見た。

紅葉は何もいわず、堇の目を見た。

堇は不思議そうに首をかしげたが、やがて紅葉の手をとった。細  
いちいさな手だった。

## 第七話 片蔭 参

浅葱は近くの川で捕らえた岩魚の腹を切り、内臓をとった。枝にさして火にかける。炉辺には、すでに数匹の魚がそうやって、火にかけられていた。

ゆらゆらとゆれる火にあわせて、草木の影がゆれる。

長い日もようやく夜の帳をおとし、あたりは星の光に満ちていた。浅葱と常盤の背後からは、ごうごうと滝の音が、絶え間なく聞こえていた。

火のまわりに、紅葉と堇の姿はない。

菖蒲の遺体を山中へ埋葬したあと、ここまでやってきた。

紅葉は蒼白な顔で、川のあるところへいきたいといい、ついた早々、襦をするといいだした。

あたりは夕闇のせまってくる頃だった。危険だと浅葱がいても、紅葉はきかなかった。

「一刻も早く穢れを落とさなければなりません」

と泣きそうな顔でせまられたら、許さずにいられるだろうか。

巫女で宿禰である以上、清廉潔白でいなければならぬ。菖蒲の死だけでなく、戦場ヶ原の無数の死を見た紅葉は、つよい穢れをあびたと感じていたのだろう。

堇の手前、母の死を穢れというには抵抗があっただろうが、それ以上に、宿禰としての使命を考えたにちがいない。

「あの子、どうするんだ？ このあたりで安全な里なんて、思いつかないぞ」

堇も紅葉と共に、川でよごれを落としているだろう。紅葉が女ということもあって、堇は紅葉の側にいた。浅葱や常盤には、決して近づいてはこなかった。

「一度、戻るしかない」

常盤はため息をついた。



「だよな」

「だが、すぐにあずかってくれるという人が現れるかはわからない。場合によっては……」

「おい、紅葉ちゃんが、そんなことを許すわけがないだろ」

浅葱は焼けた魚を常盤にさしだした。紅葉は獣や魚を食べない。数匹とった魚のほとんどは、自分たちの腹におさめるためのものだった。

常盤は受けとった魚を遠慮なくがつついた。一匹食べ終わると、次の魚に口をつける。浅葱も一匹食べた。

「なんで夜乃出里へ帰してくれとか、里長にあずけてくれとか、いかなかったんだと思う？」

それは浅葱も考えていたことだった。

「わからない。だが、夜乃出里も戦を起した里だ。安全ではないことは想像がつく」

「でもよー、このご時世にだれが口のきけない子どもを、しかも他人の子をひきとってくれるんだ？」

厄介ごとをおしつけられたって感じだぜ、と口の中でもごもごとつぶやく。浅葱もその言葉に心中でうなずいた。ひきとった以上、すておくわけにはいかない。紅葉も許さないだろう。

「そろそろ、この戦も決着がつくかもしれないな」

「……ああ」

煙の上がっていた夜乃出里。天川を越えていないというのに、日乃出里の兵士が戦場ヶ原をうろついていた。夜乃出里側の天川の警備が手薄になっている証拠だ。まして、女子どもの進入を許しているとは、完全に機能していないっていいかもしれない。

その現状を把握していて、菖蒲はあえて、堇を夜乃出里へ連れて行ってほしいといわなかったのかもしれない。

「この世は、平和になるかねえ？」

魚を食べおえ、常盤は骨と一緒に枝を火になげいれた。

「なる。紅葉なら天座大神様も受け入れてくださるだろう」

「なんでそう断言できる？」

「断言できない理由は何だ？」

逆に問いかえすと、常盤は言葉につまって目を伏せた。彼は宿禰であつた妹を失っている。その不安が、常盤に先へすすむことをとどまらせている。

だが、だからといって、紅葉の失敗を連想されては困る。できなくても、できるといいきつてもらわなければならない。

宿禰である紅葉も、弱音を吐かないのだから。

「これからも、犠牲はでるだろう。夜乃出里でくいとめられていた日乃出里の兵士が、夜乃出里を拠点に、各地の里へ手をのぼすだろう。だが、どこもかしこも里は疲弊しきっている。それは日乃出里も変わらない。菖蒲殿たちが逃げてこられたのは、日乃出里の内部も相当手薄になっているからだろう？ 戦はもう、長くはつづかない」

焼けた魚を、浅葱は火からはなれた場所にさしなおした。董の分なのだろう。

「守別として、紅葉に期待をしているとか、感情的な部分で紅葉が成功するといっているわけじゃない」

わからないか？ 浅葱は問う。

「紅葉の人となりだ」

炎を見ながら、浅葱はいった。

「宮里での、紅葉の噂はひどいものだった。祝詞も唱えられない、約束の時間には遅れる、とろくさくて物もいえない。宿禰にふさわしくない、里人の意見を聞きいれた里の自警団が、守別の候補者を追いかえす計画をしていた」

常盤は目を見ひらいた。

「嘘だろ……」

「このままでは宮里内でも争いが起こると考えて、おれは守別になる決意をした。だが、御社でも紅葉への非難がつよく、追われ、逃げるようにして御社から紅葉をつれだした。すべて本当の話だ」

ぱちぱち、と火がはぜた。浅葱はひろっておいた小枝を火にくべた。

常盤は首をふった。

「紅葉ちゃんが役立たずだって？ どこがだ？」

「盲目なんだ。平和だといわれる宮里さえ、戦で目をふさがれている。だれが役立たずで、だれが役に立つのか、そんなことを、決める人間がいていいのか、それすら、もうわからなくなっている。神を祀る御社さえ」

天座大神が選んだ宿禰を、宿司も巫女も信じることができなかった。大神の言葉は絶対という信仰はうすれ、宿司も巫女も里人に成り果てている。

「紅葉は役立たずじゃない。祝詞はきちんと唱えられる。これまで、いくつもの神宿をまわって、すべての神宿に祈りをすませている。疲れていようと、歩きづめで足の指から血を流そうと、紅葉は決して弱音を吐かない。宿禰として求められれば、それに応じている」

役立たずだといわれた紅葉のほうが、よほど巫女――宿禰らしい。「紅葉は宿禰としてふさわしくないと、宮里の人々にも、御社の人々にもいわれ、それを認めていた。否定しなかった。それでも宿禰として、その使命をまっとうしようとする彼女を受け入れない世ならば、おれもこの世に未練はない」

紅葉が人からの批判をどう思っていたのかはわからない。だが、そんな人々に対して、紅葉が何を望んでいるかは、わかった。

「共に旅をしてきて思ったんだ。平和とか、だれかが争いで死ななくてすむ世だとか、紅葉にはそんな大きな願いはないんだ。ただそこにあって、そのことを認めてくれる人がいる。受け入れてくれる人がいる。……それだけなんだ。でもそれが、本当の平和なんじゃないかと、おれは思う」

桜の花びらに家族のつながりをむすびつけた紅葉。孤児であった紅葉は、どんな想いで桜に家族を重ねたのか。

紅葉はいつでも、そこに在るだけだった。何の主張もせずに、た

だそこに在る。自然のようなものだ。そこに生えた木を、だれも否定しない。そんなふうに紅葉は存在していた。

だが紅葉は自然ではなく、人だった。だから、せめて紅葉という存在が在ることを、認めてほしがっているようだった。

宿禰として求められたとき、紅葉はそこに自分の存在が認められていると感じたのだろう。突然、神木のような大きな存在感をつくりだす。

人は、だれかにその存在を認められたとき、本当の人の姿になるのだ。

「受けいれること、か」

常盤は口元に、にがい笑みをうかべた。

「葉月のことも、きつと今回の宿禰が紅葉ちゃんだったから、受けいれられた気がするよ」

「消化できたのか？」

「ああ、なんとなく、な」

ごろりと常盤は横になって、頭を手でささえた。火を見つめるまなざしが真剣みをおびる。

「びっくりしたよ、死ぬのが怖いって聞いたとき」

「当たり前だろう」

常盤は浅葱を睨んだ。

「葉月は、平然としてたぜ。紅葉ちゃんをはじめてみたときも、そう見えた。宿禰っつー生きもんは、死も超越していらっしやるんだらうってな。でも、紅葉ちゃん怖いつてはつきりいった。葉月もそうだったんだらうって。その先のことを知らないから、死は怖いって。おなじ人間なんだ。俺たちは、おなじ人間に死をかつがせてる。そうして、成功すれば喜んで、不成功に終わったときは怒って落胆するんだ」

勝手なもんだよなあ、と常盤はわざと大きな声でいってみせた。

「……考えさせられる。宿禰の存在とか〈魂もらい〉の意味とか。まるで、答えがでないものによ」

「それもこの旅の意味なのかもしれないな」

「深すぎだろ」

かさかさ、と下草がなった。はっ、と常盤が飛びおきる。

ひよっこりと顔をだしたのは、堇だった。浅葱と常盤に鋭い視線をなげられて、堇はすぐさま下草のしげみに逃げかえた。

「あ、おい！」

常盤が呼びかけたが、もどってくる様子 wasn't なかった。

「まズったな……」

「そのうち紅葉ともどってくるだろう」

浅葱は火に、太めの木を何本かなげ入れた。すこし火の力が弱まる。だがそのうち、もと以上の火力になって燃えあがるだろう。

「常盤、先に番を頼んでもいいか？」

「あ？ いいけど、もう寝るのか？」

「ああ、さすがに大人をかついで山に登るのはきつかった」

常盤は笑った。

「そうだったな。ご苦労さん。ま、まかせとけよ」

「頼む」

浅葱は横になると目を閉じた。

常盤は脇差をぬいて、手入れをはじめた。狛犬がいることと、浅葱の腕が立つおかげで、あまり出番がない。それでも常盤は、毎日の手入れを欠かすことはなかった。

御社に認められた守別ではないが、紅葉と旅をするうちに、自分も守別になったつもりでいた。何かあったときは、命をかけてでも宿禰様をお守りする！

考えて、常盤は苦笑した。

不意に葉月が命をかけた気持ちがあったような気がした。

巫女となって、うすれたように見えた感情の中に、守りたい何かがある、きつとあったのだ。それが一体なんだったのか、もう一度葉月に会えるなら、聴きたかった。話がしたかった。

草がかさこそ鳴った。堇がもどってきたのだろう。驚かさないよ

うに、常盤は何気ない仕草でふりかえった。

木の幹にしがみつくようにしながら、堇が常盤をうかがっていた。

「こいよ、腹減ったろ」

常盤が焼いた岩魚をさしだすと、物ほしそうにしながらも、動かずにじっと見ている。

「これは、おまえの分だから。あったかいうちに食っとけ。そのほうがうまいだろ」

しばらくじっとしていたが、やがて堇は常盤から魚を受けとった。すぐさま身をひるがえして、かくれていた木の影にはいる。そうして常盤を警戒しながら、ちいさなひと口で魚を食べはじめた。

「おまえ……かわいそうなやつだな」

一口食べるごとに、常盤が奪いにこないか、何かされるんじゃないかと怯えている。犬ならば、うなっているだろうが、彼女は声さえも失っている。

日乃出里でおこなわれたむごい仕打ちとは、どんなものだったのだろうか。

「もう、だれもおまえにひどいことはしない。安心していいんだ」声をかけたところで、堇がすぐに心を許してくれるとは思えない。それでも常盤は声をかけずにはいられなかった。

堇は疑うようなまなざしで、じっと常盤を見つめていた。

常盤と番を交代した浅葱は、紅葉がまだ襖から戻ってきていないことを気にかけていた。

空を見上げれば天の川に浮かぶ十文字星が、西にかたむいている。たまりかねたように眠りこんでしまった常盤の話では、浅葱が寝ているあいだも、一度も顔を見せなかったらしい。

ぼちがいるので大丈夫だろうと腹をくっていたが、いい加減睡眠もとらなければ、明日の道中にさわる。

どうしたものかとしばらく悩んだが、結局浅葱は立ちあがった。多めに薪をくべておけば、獣の類はやってこない。常盤なら、襲われても何とかするだろう。

すぐ側の沢をさかのぼると、滝の音にまぎれて、かすかに紅葉の声が聞こえてきた。

さらにのぼれば、滝壺の中に、白い姿がぽつと浮かびあがる。その脇で、きらりと何かが光った。

ぽちだ。

浅葱は足をとめた。なんとなくだが、これ以上近よるな、といわれたような気がした。

ぽちのとなりには、葦が横になっていた。どうやら、ぽちで暖をとりながら寝ているらしい。

「生魂、いくたま足魂、たるたま玉留魂、たまとるたま天座大神の御許へ参ります紅葉の御霊を、清め給え祓い給え……」

シュ、シュ、と空気を裂く音が、三度鳴った。両手が上がり、頭上で組み合わせると、ゆっくりと胸のほうまでおろしていく。

「清め給え、祓い給え……」

つぶやきながら、紅葉は滝へはいつて、祓いの詞をくりかえした。浅葱が寝ているあいだ、紅葉はこうして身を清めていたのだ。それだけ紅葉にとって、戦場ヶ原も菖蒲の死もつよい穢れだったのか。多少苦勞しても、山道を選べばよかった。葦をあずかってしまった以上、日乃出里にも近いこの場所で、街道を歩くわけにはいかない。山道をすすむしかなかったのなら、はじめからこちらの道を選べば、紅葉は穢れを感じずにすんだかもしれない。

浅葱は紅葉の姿を見ながら、つよい後悔を覚えた。

## 第八話 秋思 壺

遠い空に、筋状の雲が境をつくるようにのびている。  
すすき

薄のまだかたい穂が、風にゆらされて秋桜と舞った。コスモス 本当なら、  
稲穂が大地を金色に染め、あちらこちらの里では、収穫の祭りがに  
ぎやかしくとりおこなわれているだろう。

深い山へきて、そんな里の光景がなつかしくなるも、里へおりて  
も稲穂がゆれる大地がどれほどあろうか。

見えるのは赤や黄色に染まる葉と、それらを散らし、幹と枝ばかりを  
残した木々だけだった。大地はそれらの彩りを、錦をまとうが  
ごとく敷きつめていたが、一昨日まで降りつづいた秋霖に、しゅうりん くちや  
くちやと水をふくませた土と同化している。

足元はきたなく汚れ、見える景色は物悲しい枯れ枝ひろがる森と  
なれば、一同の口が真一文字に結ばれていたとしても、だれを責め  
られるだろう。

そしてもうひとつ、一同を寡黙にしてしまう原因があった。落ち  
のこったわずかな葉と枝のあいだから、巨大な雲が見える。暗雲と  
したそれは、この世でありながらこの世ではない〈原郷〉との境。  
中に抱くのは天座大神が住まうという霊山だ。

旅の終わりが、近づいていた。

ふうわりと落ちてきた葉を、葦は駆けよってうけとめた。虫に食  
われたあとのないきれいな葉を、葦は紅葉にわたした。

「ありがとう」

紅葉が礼をいうと、葦はちいさく笑ってみせた。

結局、葦をどこかの里へあずけるという話はなくなった。霊山の  
麓に村はなく、また最寄の里は日乃出里か夜乃出里だ。来た道をも  
どることも考えたが、葦たちを追っていた男連中がこないともかぎ  
らなかった。

せつかく救えた命を無駄にしたくなかった。はたしてそれが、へ



魂もらい」の旅に同行することで、救えるものかはわからないが、悩んでいる暇もそれほどなかった。

山をすすむにつれて、木々は葉の色を染めていく。雨が降るごとに、山は深く色をかえた。白いものがちらついてくるのも、そう遠くはない。

日が沈むと、空気はますます冷えこんだ。火を囲んで、よりそうように暖をとる。

山へはいつてから、理由もなく、互いに交わす言葉は少なくなっていた。今日もとりたてて何かを話すわけでもなく、かすかに聞こえてくる虫の音と火のはぜる音だけが、あたりを支配していた。

そんな中、紅葉は意を決して、口をひらいた。

「常盤さん、お願いがあります」

一同はいっせいに紅葉を見た。

「なんだい、あらたまつて」

「明日から、いえ、ここからは、わたしと浅葱さんとで先へすすもうと思います」

紅葉にもたれかかるようにして休んでいた堇が、ぱっと身体を起して紅葉の腕をつかんだ。紅葉は、瞳をゆらす堇の頭をなでた。

「明日には、霊山の麓へたどりつくでしょう。霊山は……つらい場所です。堇様にも、常盤さんにも、つらい道になると思います」

常盤は反論しようとした口を、閉ざした。

霊山には難所がある。〈三途の川〉と呼ばれる、死者の集まる場所だ。死んだものに会いたいと願うものが、ときおりここへやってきては、死者にのみこまれ、地へ落とされるといふ。

妹を失った常盤。母を失った堇。ふたりにとって、〈三途の川〉は誘惑の多い場所となるだろう。

「常盤さん、堇様をつれて宮里へいつていただけませんか？ 御社なら、きっと堇様を受け入れてくれます」

「ここで紅葉ちゃんたちを待ちやいけないのかい？」

紅葉は首をふった。

「もうすぐ雪が降るでしょう。冬を越せる場所はこちらにはありません。堇様はまだお小さいですし、無理をさせたくはありません。常盤さん、お願いします」

頭を下げた紅葉に、常盤は眉をよせた。

紅葉の腕を堇がゆさぶった。顔をあげると、首をふって必死に嫌だとかえす。

「堇様、御社は安全な場所です。大巫女様はおやさしい方ですし、巫女ならば男性に触られることはありません」

堇は顔をゆがませて、首をふる。何度も、何度も。

すがりついてくる堇に、紅葉は途方にくれてしまった。

「堇、紅葉を困らせるな」

浅葱のひと言に、堇ははっとした。紅葉をゆっくりと見あげて、瞳をふるわせる。紅葉はそっと堇の頬をなでた。

「わたしも堇様の側にいたい。でも、わたしは宿禰です。いまはへ魂もらい」に専念しなければなりません。〈魂もらい〉がすんだら、わたしは御社へ帰ります。そうしたら、また会うことができますから」

ふるえていた目元から、ぽろぽろ、と涙がこぼれた。

紅葉は堇を抱きしめた。

冴え冴えとした夜空に浮かぶ月の光が、みつつの影をつくりだした。すぐ近くで、りいりいん りいりいんと虫が鳴いた。

ず、と鼻をすすったのは、常盤だった。

「宮里で堇ちゃんと、ふたりの帰りを待ってりいりいんだな？」

「はい」

「了解した。浅葱、紅葉ちゃんを頼んだぜ」

「ああ」

常盤の視線を受けて、浅葱は深くうなずいた。

紅葉はそっと堇の腕をはなして、姿勢を正した。

「常盤さん、お世話になりました」

地に手をついて、紅葉は深く頭をさげた。常盤はあわてて姿勢を

正した。

「紅葉ちゃん、お礼をいうのはこっちのほうだ。顔をあげてくれ」顔をあげた紅葉に、常盤は照れくさそうにいった。

「いきなり旅に同行させてくれていったのに、何も疑わずに同行させてくれたこと、感謝してる。葉月のことも、紅葉ちゃんに会って、ようやく受け入れられた。紅葉ちゃんのおかげだ。ありがとう！」

いきおいよく頭をさげて、顔をあげた常盤は、にやりと笑った。

「紅葉ちゃんが帰ってくるの、待ってるぜ。約束、果たしてくれよ」

「約束……？」

「お花見、するんだろ？ 花火だって見にいかなきゃなんねえし、帰ってきたら忙しいから覚悟しておけ」

紅葉は目をまるめた。そうして目を伏せた。

胸がふるえて、言葉がでなかった。

にぎりしめた手に、温かなものが触れた。莖のちいさな手だった。顔をあげれば浅葱も、常盤も紅葉を見ていた。

こんなふうに、だれかに見守られていると感じたのは、婆と葵くらいなものだった。いつの間に、自分のまわりには人の存在が増えていたのだろう。

「ありがとうございます」

やっとのことでつぶやけば、常盤にくしゃくしゃ、と頭をなでられた。

「さあて、湿っぽい話はここまでにしようぜ。また、会えるんだからよ」

「……はい」

二の腕にぽちが鼻面をおしつけてきた。金色の目は満月のようだ。なんとなく、ぽちがよろこんでくれているような気がした。だから紅葉もうれしかった。

紅葉は目を覚ました。

あたりはもうすぐ朝日が顔をだす時間らしい。闇がうすれていく  
気配がする。すがすがしい空気が森を包みこんでいるが、鳥さえも  
まだ目を覚ましていなかった。

寝返りをうつ。と、番をしていた浅葱と目があつた。

早いな、と目が語った。紅葉はうなずいて、そっと身を起した。  
堇のお守りをしていたぼちが目を開けた。

紅葉は髪を結いなおし、身だしなみを整えた。

「いくのか？」

「はい」

浅葱は立ちあがって、刀を腰にさした。

紅葉はぼちの頭をなでた。

「ふたりのこと、お願い」

ぼちは無言のまま紅葉を見あげた。

紅葉は堇の頬をそつとなでた。

顔や手足にあつたあざのほとんどは消えていた。安全な御社で暮  
らせば、きつと声もでるようになるだろう。どんな声なのか、聴い  
てみたい。

常盤は紅葉に背をむけて、まるくなって寝ていた。寒いのか、と  
きおり足をする。

消えかかった火に、紅葉は薪をくべた。

おっかない人だと思ふときもあった。けれど常盤の芯はいつだっ  
てあたたかい。葉月の代わりだったとしても、兄をもった気分だっ  
た。

紅葉に未来をくれた。お花見と花火が、本当に楽しみだ。

紅葉はふたりを見つめ、それから一礼した。

さようなら。

前をむくと、浅葱が待っていた。

紅葉は浅葱にうなずいた。

浅葱も紅葉も音を立てぬようにしながら、間近にせまった靈山へとむかった。

つくしよい。

自分のくしゃみで、常盤は目を覚ました。肩から二の腕のあたりが寒くて、腕をさする。

野宿をするには、厳しい季節に入っていた。火がなければ途端に冷えこむ。

浅葱のやつ、ねむっちゃまったんじゃねえか？

目をあけて、ほらな、とぼんやり思う。白い煤のあいだで、火がちろちろと動くだけで、暖がとれるような火力ではなかった。

しょうがねえな、と身体を起して、常盤の目は一気に覚めた。

「浅葱？ 紅葉ちゃん？」

すでに明るい陽射しが、木々の合い間からふりそそいでいた。だが、ふたりの姿がない。

下草も枯れ、見通しのきく森の中で、ふたりの姿はどこにも見えなかった。

ふたりで水をくみにいつてるんじゃないか、と考えたのは、堇の横にぼちがいたからだ。ぼちはじつときよろきよろする常盤を見ていた。

「おい犬、紅葉ちゃんと浅葱は？」

きいて、答えてくれるとは思わなかった。だが、きかずにいられなかった。

まさかもう旅立ってしまった——そんな考えが浮かんだのは、それからしばらくふたりが戻ってくるのを待ってからだった。

「見送りのさせねえなんて、薄情じゃねえか、つくそ」

拳で地面をなぐる。腐葉土のような土に、拳は沈んでやわらかく受けとめられただけだった。

顔をあわせて、言葉を交わせば別れがなくなる、そう考えたのかもしれない。それでも、ひと言ぐらい声をかけたかった。

しばらくのあいだ、常盤はこみあげてくる感情と葛藤した。

だがそのうち、このままここにいてもしかたがないと気持ちをきりかえた。

昨夜の話し合いで、紅葉は常盤に馬をあずけるといった。馬を駆れば、半年かけてきた道も半分ですむかもしれない。そうすれば、冬がくる前に宮里まではいけなくても、山越里まではいけるかもしれない。

紅葉はとにかく堇の安全を最優先していた。わたしにはぽちも、浅葱さんもいてくれるから、大丈夫だと。

だが、ぽちはここにいないではないか。

「おまえ、どういうつもりだよ。紅葉ちゃんが主人だろ？」

常盤のいうことがわかったのか、ぽちは堇を見おろした。常盤は頭をかいた。

「あーあ、本当におまえは頭のいい奴だぜ」

堇の肩をそつと常盤はゆさぶった。

「おい、朝だぞ」

声をかけたとたん、堇はびくつとして、飛び起きた。ぽちにしがみつく。

常盤は頭をかいた。こんな状態で、宮里まで堇に逃げられずにすむだろうか。

堇はすぐに紅葉がいらないことに気がついた。大きな目をさらに大きくさせて、小動物さながらに首を動かす。近くにいないとわかると、急に立ちあがって森の中を駆けた。

「おい！」

追いかけてまもなく、堇は木の根につまづいてころんだ。起こすのに手をかそうかと思っただが、また逃げられては困ると、常盤は距離をおいて、いった。

「紅葉ちゃんと浅葱はもういってしまったんだ」

愕然として、堇は立ちすくんだ。口にだすと、真実味が増して、常盤の胸も痛んだ。

「俺も、知らないうちにな」

つぶやくと、堇はびっくりしたように、常盤をふりかえった。

「だから俺たちも、いかなきゃならない。紅葉ちゃんと約束したよな？」

堇はうなだれた。

しばらくすると、そろそろ、と常盤に近づいてきた。

「朝餉にしようぜ。それから、出発だ」

大人しく堇は常盤のいうことに従った。

朝餉をすませて荷物をまとめる頃には、いつのまにかぼちの姿は消えていた。紅葉のところへいったのだろう。

常盤は霊山をふりあおいだ。ふたりが、いつ出発したのかはわからない。いまどこにいるのかもわからない。だからただ、ふたりが無事であるように祈った。

## 第八話 秋思 弐

紅葉はじつと待っていた。

急にぽちと浅葱の姿が見えなくなつて、どのくらいの時間がたったのか、すでに感覚はなかった。

雲の中に入ってしまったかのように、あたりは靄につつまれていた。

腕をのぼす範囲までの視界はあるものの、一步すすんだその先に何があるかはわからない。

常盤と堇と別れて一日。翌日目を覚ましたとき、あたりはうすい霧がかかっていた。日がのぼれば消えるだろうと思っていた霧は、消えるどころか徐々に濃くなった。

ぽちを頼りにしながらすすんでいくうちに、そのぽちの姿がふつと消えた。気がつけば、浅葱の姿もない。

万が一浅葱を見失ったとき、動かないこと、という約束を紅葉は忠実に守っていた。だが、どこから何が現れるかもわからない中で、じつとしているのは苦痛だった。

「ぽち！ 浅葱さん！」

叫んでも、声はすぐに靄にのみこまれる。こんな状態では、浅葱に名を呼ばれていても気がつかないだろう。どうしよう。

知らず、首にかけた守り掛けをにぎる。

ちりん

と、どこからともなく、鈴の音が聞こえた。とてもかすかな音で、空耳かと疑うほどのものだった。

ぽちも浅葱も鈴などつけていない。自分の袖についた鈴がなったのだと、思いこもうとしたそのとき、また鈴の音が聞こえた。

ちりん

鈴の音にまぎれて、下草の踏む音がする。人間の足音ではない、



聞きなれた足音。

「ぼち！」

呼んだ瞬間、大地を風がふきつけた。靄が吹き飛んでいく。足元に駆けよってきた狛犬に、紅葉は思わず抱きついた。

「ぼち、よかった……」

頭をなでて、ふと違和感を覚える。頭の中央に、角のようなぽっこりとかたいものがある。こんなものあったかな、と顔を確認して、紅葉は、はっと狛犬からはなれた。

目元はよく似ている。だが、首まわりのたてがみが短く、ぶち模様がちがう。

「吽形」

女の声が、狛犬を動かした。狛犬が走っていった先に、声の主がいた。

紅葉とおなじ白の小袖に緋袴、白の狩衣を緋色の帯でしめた宿禰だった。

その足元に、ぼちが座っていた。

「ぼち！」

ぼちはちらりと紅葉を見たが、駆けてきた吽形と呼ばれる狛犬にじゃれつかれて、二匹ともなって遊びだした。

紅葉は呆然と、不思議な景色をながめていた。

いつのまにか、大地には一面花が咲いていた。芍薬に竜胆がゆれ、秋桜の足元に桜草が咲いていた。まるで季節を無視した花畑だった。女のうしろには溪谷のような川が流れ、うつくしく咲く花の景色をかがやかせている。

〈三途の川〉だ。

そうとわかれば、こうしてむきあっている宿禰が、だれなのかわかった。

「大きくなったのね」

紅葉は母に答えなかった。

さまざまな花の匂いがまじりあって、不思議にあまい匂いがした。

春の日向のように心地よいあたたかさだが、女は青白い顔をしている。宿禰の衣装である白の小袖が、死に装束に見えて、紅葉は嫌な気分になった。

「私のことを、恨んでいるでしょうね……」

そうあってほしいという口ぶりだった。

紅葉は、首をふった。

「どうしてあなたがわたしをすてたのか、考えることはよくあります。でも、恨んではいません。恨めるほど、あなたのことを知りませんから」

母は目を見ひらいて、そして伏せた。

「そうね、そのとおりね」

狛犬たちが走りだした。女のまわりを駆けて、ぼちが吽形を捕まえた。花の上をころころとところがる。あまい匂いがふわっとひろがった。

「阿形はあなたのことを、ちゃんと守ってくれたのね」

「あぎよう？」

「私を守るようにいったのよ。阿形と吽形は双子なの。獅子と狛犬の子よ。久しぶりに会えて、うれしいのね」

微笑ましそうに、女は二匹を見つめる。

「茜」

男の声がした、と思えば、いつのまにか女のうしろに男が立っていた。明るい目の色をした快活そうな男だった。

男は紅葉に気がつく、と、笑みをうかべた。

「茜にそっくりじゃないか。こんなに大きくなって、まさか会えるとは思わなかった」

「あなた、それ以上紅葉に近づいてはいけません」

思いがけず、厳しい声を茜が発すると、男は足をとめて、茜をふりかえった。

「……そうか、そうだな、僕は死人だ」

それにしても、と男は紅葉に視線をもどした。明るかった顔に、

影がさす。

「母娘で宿禰、か……。世はまだ荒れているのか」

ふたりは互いになぐさめあうように、よりそった。

紅葉は守り掛けをにぎった。

あまい花の香りがする。婆や葵や、浅葱や常盤、堇のことを紅葉は必死になって思い出そうとした。だが、思い出そうとすればするほど、花の香りが思考を奪っていく。

「紅葉」

母と父は、娘を見ていた。

「ごめんなさい」

その声は、紅葉の脳をゆさぶった。〈宿禰選択の儀〉で見た夢の声だった。

「日乃出里と夜乃出里の戦が起こったとき、あなたのように宿禰が選ばれたわ」

「それが茜で、僕は守別だった」

「それ以上聞かなくても、想像はつきます」

聞きたくなくて、紅葉はふたりの言葉をさえぎった。

「あなたたちがしたことが、戦がつづく原因になったとは思わない。きっとだれが宿禰になっても、戦はつづいていたと思います」

ふたりをかばうわけではない。それぞれの役目を放りだして、恋に走ったふたりを、おなじ宿禰として紅葉は許せないと思った。だから、ふたりの話は聞きたくなかった。役目を放棄した結果が、自分なのだと思うと、自分さえも許せなくなりそうだった。

けれど、きっとだれが宿禰になったとしても戦はつづいただろう。

母の犠牲も葉月の犠牲も、そして紅葉自身の犠牲も世の流れの中では、とるにたらない犠牲。戦のあいだに犠牲になった人々や、そのときの宿禰に託した想いのすべても、戦という激流にもまれ、なすすべもなく散っていく。

そう思えば、両親を責める言葉などなかった。

だれも、この流れを止めることなどできない。天座大神、その人

以外は――

いかなければ。

紅葉はこみあげてきた使命感に、身がひきしまるようだった。これまでの宿禰や彼女たちに託された、たくさんの想い。そして紅葉があずかつてきた人々の想いを、天座大神にとどけにいかなければ。たとえその想いが、これまでのように打ち砕かれたとしても、砕かれたたくさんの破片は、岸に積みあげられ、やがて激流をおさえこむ力になるだろう。

「紅葉……、やっぱりあなたもいくのね？」

母は、娘の気持ちがかたまっていく様子を見ていたようだった。

「わたしは宿禰です」

紅葉の答えに、両親は心配そうな顔をしてよりそい、力づくうなずいた。

「あなたなら、できるわ」

母の声が、不思議と胸にしみた。

顔をあわせても、母だと思えなかった人が、このひと言で、本当に自分の母なのだと、教えられたような気がした。

「ぽち、もういこう」

両親に背をむけ歩きだす。

が、紅葉はぽちがついてこないことに気がついて、足をとめた。

両親の足元で、卍形とよりそうように座っているぽちは、紅葉の声がかきこえなかったようだ。

「ぽち？」

もう一度呼んでも、ぽちは紅葉を見ようとはしなかった。まるで

紅葉が見えていないようだった。

「ぽち……、おまえは、そっちにいつてしまうの？」

しゃがんで、目を合わせても、ぽちはこたえなかった。

紅葉は信じられず、言葉を失った。

「ぽちは、ここにすることにしようね」

「そんな……」

彩に嫌がらせをされたとき、守ってくれたのはぼちだった。巫女たちに仲間はずれにされたとき、側にいてくれたのはぼちだった。ひとりで、さみしくて泣いていたとき、よりそっていてくれたのは、ぼちだった。

鼻の奥がつん、として、喉が苦しい。

紅葉の知らぬところで、ぼちは自分の兄弟や、親しんだ紅葉の両親に会いたがっていたのか。

紅葉は涙をこらえ、奥歯をかんだ。

それでも、紅葉の側にいてくれたのだと思うと、これ以上側にいてと望むのは、わがままなことなのかもしれない。

こみあげてくるものと戦って、紅葉は目を閉じた。

ここは〈三途の川〉。

亡き人との逢瀬の場。

けれど、その代償は自らの命。

ぼちとの暮らしを求めるならば、共にこの場にとどまればいい。

だが紅葉は宿禰。

ここで命を散らすつもりなどない。

「ぼち……、さようなら」

言葉にした途端、ぼちの姿は急速に遠のいた。母と父がよりそいながら、心配そうに紅葉を見ている姿も、どんどん靄におおわれていく。あまい匂いは一瞬にして消え、紅葉はふたたび、靄の中にひとりでたたずんでいた。

す、と熱いものが頬を伝って、落ちた。

ぼちははじめから、紅葉と共にいるよりも、忤形といたかったのかもしれない。そう考えると、申し訳ない気持ちでいっぱいだった。「ありがとう、ぼち」

頬をぬぐって、紅葉は歩きだした。

## 第八話 秋思 参

〈三途の川〉は越えた。この先に、目指す霊山の頂上がある。

浅葱はどうしただろう。無事だといひ。

そう願ひながらも、紅葉はこみあげてくる孤独感に唇をかんだ。どちらへいけばいいのかわからぬまま、紅葉は黙々と足を動かし、山に登っているはずだが、道は平坦だ。だがそれも靄に視界を奪われていれば、たしかともいえない。

紅葉は信じて歩いた。山頂以外にたどりつくべき場所はない。

足元の靄が、すこしうすれてきた、と感じれば、すこしずつ周囲の景色が見えてきた。

雑草さえも生えぬ大地。石ころ以外に何もない。わずかな勾配のむこう、かすかに朱色の鳥居のようなものが見える。

山頂だ。

紅葉は足をそろえ、息を整えた。守り掛けをにぎり、目を閉じる。思ひうかびあがってくる言葉は、何もなかった。浅葱や常盤のことを思つてもいい。ぽちのことを嘆いてもいい。旅の終着地によせる想ひがないわけではない。それでも紅葉の心は暗く、でてくる言葉も思ひもなかった。

守り掛けから手をはなし、目をあける。ゆっくりともちあげた足が、大地をけつて、紅葉を前へおくりだした。

一歩一歩が、身体に重かった。

これまで苦もなく歩みつづけてきた。だがほんのわずかな距離に、ためらい、足をとめ、息を整えなければ、先へすすめない。

紅葉は、やっこの思ひで山頂へたどりついた。

目を見ひらく。

「浅葱、さん……？」

朱色の鳥居の前に、浅葱があぐらをかいて、待っていた。

浅葱は紅葉を認めると、緩慢な動作で立ちあがった。

「待っていた」

「無事……だったんですね」

「ああ」

胸に、何かがこみあげてきた。

よかった、と思った瞬間、膝の力がぬけて、紅葉は座りこんだ。

「どうした？」

あわてて浅葱が駆けよってきた。

「安心、して……」

浅葱はわずかに表情をゆるめた。そして、ぼちの姿が見えないことに気がつく、ふたたび表情を厳しくさせた。

「ぼちは？」

「ぼちは……、兄弟と共にいることを望みました」

そうか、と浅葱はつぶやき、沈黙があたりを支配した。

「つらかったな」

その、かすかな声に、紅葉の中ではりつめていたものが、ふ、とゆるんだ。奥歯がふるえて、喉が苦しくなった。

浅葱の目元が紅葉のゆれをうけとめた。

ぼろぼろ、と涙がこぼれた。

紅葉はそれを止めることができなかった。

嗚咽をあげながら、紅葉は泣いた。

浅葱は迷ったあげく、紅葉を抱きしめて、その背をなでた。

紅葉は、浅葱の胸で泣いた。

泣いても、泣いても、つきあげてくる悲しみは、なくならなかった。涙が止まったかと思えば、またこみあげてきて、とまらなかった。

浅葱は紅葉が泣きやむのを、辛抱よく待っていた。紅葉をなぐさめながら、浅葱自身もぼちへの悲しみを弔っているようだった。

やがて紅葉は涙をぬぐって、顔をあげた。

「浅葱さん、すみません……」

「謝らなくていい。大丈夫か？」

「……はい」

かすかにふるえながら、紅葉は立ちあがった。よろけた紅葉を浅葱が支えた。

紅葉は天を仰いだ。

雲の中、ということになるのだろうか。青い空も暗い空も見えない。世界はただ、白か、白のつくりだす陰影しかなかった。

大きく深呼吸する。何度も、何度も。

波だった心が静まってから、紅葉は前をむいた。

浅葱が紅葉を見ていた。

「浅葱、さん……」

彼の背後には、鳥居が建っている。そのうしろは、真っ白な靄に包まれていた。靄の中がどうなっているのか、ここからではなにもわからない。

「最期にひとつだけ、聞いてもいいですか？」

「何だ？」

「どうしてわたしの守別になってくださったのか、まだ、理由を聞いていません」

浅葱はにがく笑った。

「あのとき宮里の人々は、正気を失って冷静な判断ができなくなっているように思えた。だれかが宿禰の守別にならなければ、御社の存在意義も、宮里も崩壊する。そうなれば、戦の火は宮里にも飛んでくるだろう。それはさけたかった」

ひと呼吸の間のあと、浅葱は紅葉と目を合わせ、いった。

「宿禰になった人物にも会ってみたかったしな」

紅葉はかすかに笑った。

「まさか浅葱さんが守別になってくださるとは思いませんでした」

「それはこちらと同じだ」

ふ、と空気がなごんだ。

「浅葱さん、今までありがとうございます」



紅葉は深く頭をさげた。

「それは、まだ早い言葉だろう」

「え？」

「帰りもある。御社へ宿禰様をお送りしなければならぬ」

紅葉はうつむいた。

「浅葱さんは、本当にわたしが世を平和にすると、思っているんですか？」

「もちろんだ」

「わたしの噂を、知っているの？」

浅葱の表情がかわった。

「わたしは、役立たずです。ぼちがいたから、今まで乗り越えてきました。でも、もうぼちはいません。わたしは、もっと役立たずになりました」

「旅をして、思ったことがある」

つよい口調に、紅葉は、はっと浅葱を見た。彼の眼光もまた、おなじくらいつよかった。

「役立たずというのは、思いこみじゃないのか？　すくなくともおれは、旅をしていて役立たずだと思ったことはない。だが、おまえがそう思えば思うほど、まわりの人間はおまえを役立たずなんだと思いきんでいく。宿禰として立ったときの紅葉は、役立たずではなかった」

断言されて、紅葉は言葉を失った。浅葱が、これほどまで自分を見ていたとは知らなかった。

「おれは、紅葉が宿禰に選ばれた理由は、そこにあると思った」  
「そこ？」

「本当は役立たずなんかじゃない。だれしもが、役割をもっているんだ。必要とされない人間なんて、いない」

紅葉は、婆の言葉を思い出した。

——人には役割があるんだ。ひとりひとり、かならず役割を持っている。その役割に気づくか気づかないかは、その人しだいだ。

「わたしは、ちゃんと宿禰らしく振舞えていましたか？」

「ああ」

「わたしにも、役割があるんでしょうか？　——いえ、宿禰となつて、世を平和に導くことが、わたしの役割……。きっと、そう……。なんですね」

自信がもてず、しりすばみになる紅葉の背をおすように、浅葱は深くうなずいた。

「常盤も、堇も、葵も、おまえが帰ってくることを望んでいる」

「……はい」

紅葉は守り掛けをにぎった。きっと、婆様もわたしの帰りを待っている。

それにここへたどりつくまでに出会った、たくさんの人々の想いを、紅葉はあずかつてきている。ここで弱気になって、託してくれた多くの想いを、無駄にするわけにはいかない。

「浅葱さん、ありがとうございます」

「それは、おまえを御社に送り届けてから、聞く」

「はい」

紅葉はゆつくりと鳥居の下まで歩いた。浅葱がそのややうしろを追った。

噴火口のように、鳥居から先はわずかに凹んでいる。だが、靄におおわれた世界は何も映しはしない。

この先に、天座大神がいて、世の采配を下している。紅葉が宿禰として認められ、和魂をもらいうけられるかどうか、裁きが下されるのだ。

「浅葱さん」

紅葉は浅葱をふりかえった。

「何だ？」

「もしも、待ちきれなくなったら、帰ってください。わたしは、それでかまいません」

「待っている。おまえを連れて帰らなかったら、おれにも帰る場所

がない」

「……そんなこと」

「少なくとも常盤と堇にはどやされる」  
かるく笑いがもれる。

「でも浅葱さん、お願いします」

「わかった。どうあっても、待ちきれなかったら、いうとおりにする」

見つめあって、言葉をなくす。こんなときは、なんといって別れたらいいのだろうか。互いに、かける言葉が見つからなかった。

紅葉は一礼をして、浅葱に背をむけた。

浅葱は無言で、紅葉のちいさな背を見送った。

一歩ずつ、かみしめるようにすすんでいく、その背が靄に完全に消えてしまうまで、浅葱は紅葉を見つめつづけた。

帰ってきてくれ、とひたすらに祈りながら。

## 第九話 垂雪 壱

雪が舞っていた。

はらはらとおちる儂げな雪を、浅葱は見上げた。降り積もった雪は浅葱の足音と、とおってきた跡を残す。

葉を落とし、かわりに雪を身にまとった木々のむこうに、霊山がいつもとかわらぬ姿でそびえている。

浅葱は荒れた日乃出里で、ときおり用心棒として雇われながら、紅葉の帰りを待っていた。

冬にはいり、戦はやんだ。だがそれは紅葉の成功なのか、季節的なものなのかはわからなかった。ただいえることは、日乃出里人の生活は困窮しており、戦をしている余裕などないということだ。この冬の蓄えさえ、ない。

浅葱は霊山にほどちかい樹海に小屋をつくり、そこで暮らしていた。そうして食料がつきるまで毎日霊山へおもむき、紅葉の帰りを待ち、食料がつきると里に出向いた。

今日はひさしぶりに霊山へのぼる。

一度〈三途の川〉をこえたせいか、あれ以来、死者に会うことはなかった。

あのとき浅葱の前に現われたのは、祖父母だった。尊敬し親しんだ祖父母にもう一度会えたのは、浅葱にとってうれしいことだったが、浅葱は彼らが死者であり、届かぬものであることを知っていた。祖父母は盗賊から浅葱を守って死んだ。七つのときだった。

ふたりの死に様を思い出せば、浅葱の心は紅葉を守らなければという思いにかられた。祖父母は浅葱のそんな気持ちを尊重し、いけといった。

山頂が見えてくると、浅葱はいつも安堵する。もしもふたたびあの花畑を見ることになったら、今度そこにいるのは祖父母ではなく、紅葉なのではないかと考えてしまうからだ。

浅葱は鳥居の前に立った。

紅葉の姿はない。

あれから、二月半がすぎていた。

しばらくのあいだ、浅葱は鳥居の奥にひろがる靄をながめた。やがて、背にかついだ荷をおろし、鳥居の脇に腰をおろした。

そうして、時は流れた。

雪は解け、あらたな息吹があちこちから吹きあがり、山はうっすらと笑いはじめた。

その日も、浅葱は鳥居の前に座っていた。下界では、春のおとずれと共に、日乃出里の里長が亡くなったという噂がひろまっていた。と同時に、夜乃出里は日乃出里に対し白旗をふった。

ふたつの里の動きに、里へおりていた浅葱は、いてもたってもいられずに、霊山へのぼった。

戦によって停滞していた世の流れが、動きはじめようとしている。それは他でもない、紅葉の〈魂もらい〉が成功した証ではないか。息せききって霊山へのぼった浅葱だったが、紅葉の姿はなかった。浅葱はただひたすらに、待った。

やがて、浅葱は靄が晴れてきていることに気がついた。

もしやふたたび〈三途の川〉へ誘われているのだろうか。

その不安は、靄の中にうかびあがった影を見て、ふくれあがった。時代は変わろうとしているのに、紅葉の〈魂もらい〉は失敗したというのだろうか。

靄の中から姿をあらわしたのを見て、浅葱は目をまるめた。ぼちだ。

ぼちはゆったりとした足取りで、鳥居へむかってくる。浅葱の存

在に気がつく、わずかにしっぽをふつてみせた。

鳥居の前にたどりついたぼちは、そこでお座りをした。そうして石にでもなったかのように、じっと動かなくなった。

ぼちは〈三途の川〉にとどまることを選んだといって、紅葉は泣いた。このぼちは、はたして生あるものなのか、死したものなのか。浅葱が思案しているうちに、靄はじょじょに晴れていった。

視界をさえぎる一切のものがなくなったとき、そこにひろがっていたのは花畑ではなく、一面の荒野だった。麓には樹海の萌ゆる緑。奥には日乃出里に戦場ヶ原、遠くかすむ海原。

そこには、雲ひとつない下界の姿があった。

こんなことははじめてだった。

だがおどろくのはそればかりではなかった。

鳥居のむこうにひろがっていた白い靄が、山頂の中央に集まり、ゆるく渦を巻いていた。それは天にむかつてのびている。

渦はごうごうと音をたてていた。上空ではすさまじい風が吹いているのだろうが、浅葱のいる場所には不思議なことに風がなかった。ぼちも巨大な渦を見上げていた。

突然、浅葱はひらめいた。全身に鳥肌がたつ。

天座大神が降臨する。

紅葉は〈魂もらい〉に成功したのだ。

カッ、と渦が光を放った。

あまりのまぶしさに、目を覆う。目の裏で光がちかちかと飛んだ。光がおさまったあと、目をひらいて、浅葱は愕然とした。

渦が消えていた。

ぽっかりとお釜のような山頂が見え、そこに乳白と空色をたしてわったような、うつくしい湖があった。

紅葉の姿は、どこにもなかった。

## 第九話 垂雪 弐

裏の大巫女は春めいてきた空気を感じて、ひとつため息をついた。庭にみえる梅の木が花を終えて、若葉をしげらせている。

紅葉が旅立って、一年がすぎた。

荒れた一年だった。

大宿司は紅葉がいなくなったのをいいことに、〈宿禰選択の儀〉のやりなおしを強行した。だが準備が終わらないうちに、宮里に戦の火の粉がとんできた。南から日乃出里の軍勢がおしよせたのだ。すぐに〈宿禰選択の儀〉をやめさせると、まもなく、軍勢は里から撤退した。

大宿司も里人も、天座大神の怒りにふれたのだと気がつき、ようやく紅葉を宿禰だと認めたのだった。

浅葱のいうとおりだった。いまでは彼を守別としたことは、まちがいなかったと断言できる。

その浅葱の代理と名のる男が、ひと月前、紅葉は無事に霊山へたどりついた、と知らせてくれた。

常盤というその男は、紅葉と道中を共にし、兵に襲われ母をなくした菫という少女をつれていた。紅葉に菫を御社へ届けるようにいわれたらしいが、菫は常盤からはなれることを嫌がり、結局ふたり共に去っていった。

紅葉が霊山へたどりついたという報告に、婆は安堵し、同時に不安も抱いた。天座大神に受け入れられなかったら、紅葉は死んでしまふ。それくらいなら、霊山などにいかず、どこか別の地で生きのびてほしい。

大巫女としてあるまじき考えかもしれない。紅葉のことを忘れようとしても、思わぬようにしようとしても、ぼちとともに縁側でぼつん、と座っていた紅葉の姿がうかびあがってくる。

せめて、人並みのしあわせを知ってほしかった。

春にしてはめずらしいほどすみきった空を見上げる。雲ひとつない空は、その字のごとく空虚に感じられた。

突然空が光った。雷鳴のごとく、光は婆の目をさしぬいた。あまりにも突然なことに、目がくらんでひらくことができない。

バタバタ、と足音が聞こえてきたかと思うと、襖の前でぴたりと止まった。

「婆様、葵でございます」

「よい、はいれ」

光にやられた目は、まだひらくことができなかった。

襖がひらき、足の擦る音で、婆は葵がはいってきたことを確認した。冷静な彼にしてはめずらしく、息をきらしている様子だった。

「失礼致します。婆様、先ほどの光をご覧になりましたか？」

「見た。つよい光だった」

「はい。……あれは、霊山から放たれた光ではないでしょうか？」

「なんだと？」

興奮するあまり葵は口ごもった。

「ただの想像です。ここからでは霊山を見ることはできません。あの光を見たときに、紅葉の姿がぱつと浮かびあがったように見えたのです」

ようやく見えるようになった目で、婆は空を見上げた。快晴の空が何事もなかったように、ひろがっている。

「〈魂もらい〉に成功したのか……？」

問いかけても、答えられるものはだれもいなかった。裏の大巫女を務める婆でさえ、〈魂もらい〉の成功とはどんなことなのか、知らない。ただ、成功すれば、紅葉は無事に御社へ帰ってくるだろう。天座大神から授かる和魂をもって。

「宿禰様の帰りを待つしかないだろう」

葵は深くうなずいた。



「しかし常盤様も変わられたな」

「ああ、ふらつと旅にでちまったかと思いきや、今じゃあ、荒れた農地の耕作を自らされてるんだからな」

「何があつたんだかなあ」

「なあ」

うなずきあつたふたりを、常盤は睨みつけた。

「おい、人の噂をしている暇があつたら、働け。全然すすんでないじゃないか」

「いやあ、常盤様もご立派になられて、わしらは感動しとるんですよ」

「まったくだ。これで戦が終われば、山越里も安泰だ」

いいながら、ふたりは鍬をふるって溝をほった。

常盤はその背を見ながら、やれやれと息を吐いた。

紅葉たちには特別話をしなかったが、常盤は山越里の里長の嫡男だった。

もともと相当な放蕩息子で名を知られていたが、葉月がへ魂もらいゝにでて死んだと聞いたあと、それはますますひどくなった。

戦で徴兵されようと、隠れてでてこようもしない、里長の恥だと勘当された。

紅葉たちと別れたあと、常盤はまっすぐ山越里へ帰郷した。その頃にはもう里にも雪が積もっていた。

菫にはあたたかで安全な場所が必要だったが、常盤に頼れるのは故郷しかなかった。紅葉に花火を見せるという約束も手伝って、常盤は両親に頭を下げた。

一度勘当した息子を、父は許そうとはしなかった。

それでも菫がいたことで、母が父を説得し、門をくぐることを許されたのだった。

しかし父は厳しく、春になったとたん、常盤に荒れた田畑を耕作

し、実りがでるまで屋敷にはもどらぬよう命じた。

そうして、常盤は住むもののいなくなった家を、なんとか住めるくらいに改築し、そこで暮らしながら毎日鋤をふるっているのだった。

里の民家のまわりには、戦中でも細々と田畑は耕され、実りをつけていた。だが、家からはなればはなれるほど、田畑は荒れ、雑草のひろがる荒野となっていく。

常盤は手はじめに、民家にほどこかい田畑を耕した。雑草をぬぎ、土を起し、溝をほり、畦をつくれれば、すこしずつ田畑はもとのかたちをとりもどす。

「こうしてると、平和になったような気がするな」

「ああ。そういや〈魂もらい〉にでた宿禰様がいるんだろう？ もう平和になったんじゃないか？」

ふたりはまた話をはじめた。

農家連中の中でも、特に怠けぐせのあるふたりが、常盤に唯一与えられた仲間だった。丁字ちやうじと刈安かりやすという。

『怠けてばかりいたおまえには、似合いだろう』

と皮肉の混じった口調で父に告げられたときには、多少の苛立ちもあったが、ひとりで作業するよりは幾分ましだった。

「そうかもしれないねえな。戦も知らないうちにはじまってたしな」

「ちげえねえ」

ふたりは笑い声をあげた。

のんきな奴らだと呆れながら、常盤は草をぬいた。

丁字と刈安がやってくれるのを待っていたら、紅葉が帰ってきたときに、こんな情けない格好を見せることになる。それだけはさけたかった。

「おっと、あれに見えるは、おれたちの飯じゃないか？」

「ああ本当だ、ちっこいのが駆けてくる」

ふたりの声に、常盤は顔をあげた。なだらかな道を、風呂敷包みを抱えた堇が駆けてくる。

常盤は紅葉にいわれたとおり、堇を宮里の御社へ送り届けた。

だが、冬のあいだ共に過ごしたせいか、常盤からはなれようとしなかった。仕方がなく、常盤は堇をつれて帰り、いまでは母の手伝いをさせている。

はじめは、ひとり暮らしをはじめた常盤についていかなければならぬと、駄々をこねていた。母の提案で、昼餉の配達役となつてからは、ようやく大人しく屋敷で寝泊りするようになった。

堇は、常盤の三人目の妹となった。

とびはねるように駆けてくる堇に、常盤が手をふると、にこりと笑った。

と、突然、光が走った。一瞬のことだったが、思わず常盤は受身をとってしゃがみこんでいた。

「な、なんだあ、いまの？」

「雷か？」

空を見上げてても、雲ひとつない。何が起こったのか、わかるものはだれもいなかった。

堇が蒼白な顔でかけてきて、常盤にとびついた。風呂敷包みが、道にころがっている。

「大丈夫だ」

頭をなでてやると、堇は頭をぶんぶんふって、うったえるようなまなざしを見せた。堇は、まだ口をきけなかった。

空にむかつて指をさす。ちいさな指の先には、緑の濃くなつてきた山が見えた。

その山、その方角に気がついて、常盤は、はっと意味するものをさとした。

「紅葉ちゃん」

つぶやくと、堇はうなずいた。

呆然と見つめあって、ふたりはやがて口元をほころばせた。抱きしめあって、歓声をあげる。

「成功したんだ！ 紅葉ちゃんは、成功したんだ！」

堇は話せないかわりに、さかんに手をうち鳴らした。

「やった、やったぞ！」

畑の中央で、よろこびあう常盤と堇を見ながら、丁字と刈安は首をかしげた。

浅葱は立ちつくしていた。

靄に消えた紅葉が、半年ものあいだ、飲まず食わずで生きているとは思えなかった。

それでも、靄の中には紅葉がいて、いつかでてくるのだと待っていた浅葱にとって、目の前にひろがる景色はあまりにも無情だった。つよい山風が小石をころがし、お釜の水面に波をたてる。

浅葱はこれが本当にたしかな景色なのか、確かめるために鳥居をくぐった。

もしかすると、本当はまだ靄の中にいて、〈三途の川〉のように別の景色を見せられているだけなのかもしれない。

突然、ぼちが吠えた。浅葱の行く手をはばむようにまわりこんで、鼻面でしきりにもといた場所へ戻るようにうながす。

「ぼち、おまえは紅葉が心配じゃないのか？」

たずねても、ぼちは戻れ、戻れとくりかえすばかりだった。

しかたがなく鳥居をくぐり、もとの場所へ戻る。ぼちは鳥居の下で、だれもはいらぬようにどん、と腰をおろした。

気がつけば、あたりはうっすらと靄がただよいはじめていた。

もう、紅葉はいないのだろうか。

浅葱は途方にくれて、集まりつつある靄をただながめた。

## 第十話 風薫る

いくつもの笑い声が、山に響いた。満開をむかえた山桜が笑い声に呼応するようにゆれ、はらはらと花が舞った。

茶器がぶつかりあい、歌や舞が披露され、春のおとずれをにぎやかに祝っている。

山桜をながめる高台は、里長の特別席だ。そこへむかう、一組の男女と犬がいた。高台の手前で、思い思いに花見を楽しむ里人を、微笑ましく見ている女を、先導するように犬が、守るように男がうしろをいく。

「やっときたな！」

高台にいた男が、ふたりに気がついて手をふった。女がそれに気がついて、ちいさく手をふりかえす。

「紅葉様！」

少女の明るい声が、山に響いた。

「……堇様？」

駆けてくる少女は、すっかり背がのびて、身体にもまるみがでていた。声がかかれば、嫁にいつでもおかしくない年頃の娘は、紅葉に思いきり抱きついた。

「紅葉ちゃんがあまりにも遅いから、待ちくたびれて声がでるようになっちまったよ」

遅れてやってきた常盤がいった。こちらも随分としっかりした顔つきになっている。

「お待ち申しておりました」

堇のふるえる目元に、紅葉もつられて涙ぐむ。

「こいつは紅葉ちゃんの帰りを、毎日神宿に祈ってたんだ」

「と、常盤様、あまりなんでもお話なさらないでくださいませ」

真っ赤になって、堇は常盤を非難する。

「そうか？ だけど紅葉ちゃんはよろこんでるぜ」

な、と共犯めいた笑みを見せられて、紅葉は笑った。

「はい。忘れられていても、おかしくはありませんでしたから」

「そんなこと、ありません！　紅葉様に助けていただいたこと、忘れたことは一度もありません」

紅葉は堇の手をとった。言葉なく、見つめあう。流れた年月の隙間をうめるように。

「紅葉様、今日はたくさんお話ができますよね？」

「もちろん」

ふたりは笑みをかわした。

紅葉はあらためて常盤の前に立った。

「常盤さん、約束、ずいぶんと遅くなってしまい、すみません」  
頭をさげる紅葉に、常盤はあわてて顔をあげさせた。

「何をいつてるんだ。こうやって、また会えただけで十分だ」

紅葉ははにかんで、背後に立つ浅葱を見あげた。

「浅葱さんのおかげです」

「おれはなにもしていない」

「でも、待っていてくださいました」

「それだけだ」

黙ってしまった紅葉を、浅葱もまた黙って見下ろす。

ふたりのやりとりを黙ってみていた常盤と堇は、ふたりのあいだに流れる、微妙な感情を察して、笑みをうかべた。

「ま、なんでもいい、よろこばしいことなんだ、祝宴といこうぜ」

「ささ、紅葉様はこちらへ。花見の特等席へご案内さしあげます」

堇に腕をひかれて、紅葉は高台の先端へとむかう。その背を見ながら、常盤はふたりに聞こえぬよう、浅葱に話しかけた。

「あれから五年か？　長かったな」

浅葱はうなずいた。紅葉が霊山へはいり、でてくるまで三年の月日があった。

あきらめながらもあきらめきれずに、樹海での暮らしをつづけていた浅葱の前に、ある日ひょっこり紅葉が姿をあらわした。

和魂を授かった紅葉を御社へと送り届け、それから一年半、浅葱は紅葉と顔をあわせることはなかった。浅葱は金角の鹿隊の再入隊の誘いを断り、森村へ帰った。

「巫女をやめたって話、本当か？」

「ああ、本当だ」

だがこれまた唐突に、紅葉は森村の浅葱をたずねてきた。そうして、森村に住まわせてほしいといった。巫女はやめたから、と。

「よく御社が許したな」

「くわしいことは話さないが、黙ってぬけだしたようだ」

「何だって？」

素っ頓狂な声に、紅葉と董が目をまるめてふりかえった。常盤は手をふってごまかした。

「あとから、御社の人間がきた。連れ戻そうとしたんだが、紅葉が嫌がっていたから、おれが追いかえした」

「おい」

「紅葉は、ふつうの暮らしがしたいといっていた。家族がほしいのだと」

常盤は黙った。久しぶりに見た紅葉のまなざしは、宿禰として会ったときよりも生き生きとしている。肩の荷をおろしたこともあるのだろうが、ひとりの人として受け入れられている安心感もあるのだろう。そして、それを与えているのは、他ならぬ浅葱なのだ。

「おまえこそ、里長になったそうだな」

常盤は舌打ちした。

「どこで聞いた？」

「ここまでする道中に、里人が話してくれた。昔の怠けぐせからは到底想像がつかないほど、よくしてくれるといっていた」

「ふん、一昨年、親父があっけなく病に倒れたからしかたなくなっただ。まったく、ようやく平和になったってのに、何やってやがるんだか」

「董もうつくしい娘になった。おまえの嫁になると聞いたが？」

常盤は何もない場所でつまづいて、ころびかけた。

「な、なにいつてやがる！ あんな餓鬼……！」

「里人の噂だ」

さらいといって、浅葱は真っ赤になった常盤を横目に追いぬいた。

「おまえな！」

「常盤様、早くいらしてくださいませ」

菫と共に紅葉が常盤の到着を待っている。常盤は頭をかいた。

高台からは、山の起伏にあわせて花のほころびのちがう山桜が、さまざまな顔をみせているのがよく見えた。あいまあいまの杉やケヤキなどの緑もまた、桜のうつくしさをよりいっそうひきたてている。

「きれい……」

「ああ」

いつのまにかとなり浅葱が立っていた。

紅葉が見あげると、浅葱もまた視線をむけた。

目があうと、くすぐったいような気持ちになって、紅葉は目を細めた。

春。

うららかな空気に誘われて、風が笑う。その風が紅葉の髪をくすぐり、とおい空へと舞っていく。

「紅葉」

穏やかな声に、紅葉は我にかえった。ふりかえった先で待っていた、みつつの視線に、紅葉は笑みをかえした。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7628h/>

---

恋し、春待ち人

2010年10月8日12時02分発行